

時空管理局と化したEDF先輩

名無しの権左衛門

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

HDD破損により、更新停止

目 次

時空管理局と化したEDF先輩	1
進撃の黒蟻	10
森の中の蜘蛛さん	17
お花畠の赤蟻	26
暗闇のドラゴンさん	32
6：おやつさんの歓迎パーティ	42
花壇のてふてふ	50
ひつかかつた蟻さん	70
9：とつかんする虫さん	83
10：ハチさんのおうち	99
11：蜘蛛さんのおまつり…？	127
12：たべられちやつたみんなの世界	146
13：三途の花園	159
番外編：魔法拳士と魔砲使いと愉快な仲間たち	185
α ：もう一人の特異点	200
$\alpha-2$ ：異世界への扉	206
番外編　金の雷光の現状、白い天使の日記	218

時空管理局と化したEDF先輩

暑すぎて脚本を考えられない腹いせで書いた、脳死シナリオでお送りするEDF。

1：爆弾を止めるのは爆弾のみ
20XX年、地球を幾度となく襲つたフォーリナーは全て駆逐された。

しかしフォーリナーの技術の中でひときわ輝く歯獲技術があつた。それは過去・未来・並行・位相・次元世界への宇宙転移技術だった。EDFは早急にこの技術を改良し、EDFを全宇宙規模に発展させた。

EDFは全ての世界にEDF隊員を送り、その世界に根付こうとするフォーリナーを駆逐し完全に壊滅させることが目的だ。

更にこの宇宙転移技術以外は、襲われたその星の人間に戦闘技術や冶金技術の譲渡ができるようなモノリスを作成。

これで戦後ただでさえ少ないEDF隊員の代わりに、自分の星を防衛してくれることだろう。

そして、最終戦争から数年後、ものすごい天災隊員が誕生した。

私は戦士名誉職である、レンジャー部隊の称号を手に入れた。ナンバーは1だ。

おつと申し遅れたな、私はEDFの職種レンジャーのレンジャー1結城だ。

え、以前にも結城がいたって？

そりやそうだろう！なんたつて、私は彼の息子なんだからな！勿論他にも兄弟がいるから、母親一人ぼっちではない。

おかげで旅館も復活できるつて先月言つてたなあ。

さ、気を取り直そう！

私は任命されたが、就任はまだしていない。何せ武器がなにもな

い、ただの職員状態だからだ！

眩しいLEDに照らされた真っ白な通路を行き、とある場所に来る。

「おお！レンジャーじゃないか！」

「は！レンジャー1結城あります！」

「うむ、元気で結構！これより、貴殿にはこの地球とほぼ同じところに飛んでもらう。

今そこではフォーリナーと人間が戦闘している。早急に介入し、事件を解決せよ。

そして……

私はEDFから、認識上書きのEDF紋章と現地民を協力者として行動できる契約拘束腕輪を5つ貰う。

そして現在では地球以外の活動が禁止になつていて、エアレイダー・フェンサー・ウイングダイバー以外の武器を二つ貰える。

しかし今後の活躍次第では、武器枠は三つに増え地球外活動禁止の兵種装備を装着できるようになる。

更にEDFクオリティの自動リロード・∞弾薬・武器の成長・アーマーの増加がある。

これは気を引き締めて行かないといけない。

「では、送るぞ」

「御願いします」

私は認識上書きのEDF紋章を胸につけた。

これをつけると相手の興味をざらして、此処にいるべき存在として認識できる。

更に契約拘束腕輪をつけると、全ての世界に違和感なく入場できる。

それと一度救済した世界は、二度と訪れられない。

理由は広すぎる宇宙に痕跡を残すのは難しいから。

ただ例外はあるらしい。それでも、毎日が忙しいからそんなこときにしていられないのも事実。

⋮⋮⋮

私が送られてきたのは、転送先の星の郊外。

周囲には林立する高層ビルが多くある。

これらを見てどれくらいの経済成長を遂げているかがわかる。
さて、どこにフォーリナーがいるか。

それはすぐにわかることとなる。

いや、別にレーダーがあるから、敵がどこにいるのかわかるだけだ
が。

私は近くに駐車してあるバイクを奪う。

そして記憶合金でできる粘性金属で、バイクにエンジンを点けてア
クセルを絞る。

ギアの操作等はすぐに把握した。

そのままレーダー上の赤い点に向かって、バイクを走らせる。

途中有る信号や迫つてくる警察車両は無視して、敵の所へ向か
う。

そして見えたのは、デパート周辺だ。

デパートは他のビルとつながつていて、ショッピングモールになつ
ているようだ。

そのためフォーリナーにとつて、恰好の餌場になつてゐる。

「何だよ！」

「きゃあああ!!」

「アリ!? アリだよね!?」

全て外国の言葉だがEDFの翻訳機のおかげで、相手の母国語を尊
重してお互に理解することができる。

よつて状況を嫌というほど知ることができた。

なんでもデパート内にある一つのビルにVIPが居て、そこに何者
かが侵入。

その瞬間、ナニカを押した。その瞬間、アリが空から降つて來たと
のこと。

私はその様子をビルに映し出される巨大な液晶で、状況把握を完了する。

手持ちには、ロケランの『スティングレイM1—1』とアサルトライフルの『AF—14—1』がある。

これ等の確認をして私はバイクを使って、デパート内部に入る。しかし突入時蟻がじやましていたので、バイクから飛び降りてそのまま呐喊。

ロケランでバイクを爆破して、周辺諸共破壊した。

ここで中に入りやすくなつた。私は周辺のフォーリナーを撃滅させる。

我らEDFは、地球という家を守つてているだけであつて、そこにあら家具などはまることはない。

私はレーダーで赤い点を見つけて撃破していくと、途中真っ黒な人物と接触する。

「もし、そこの人」

「邪魔なんだよ！」

「ぐ！」

私はその敵に押しのけられ、壁にめり込む。すると何者かが、私に近寄る。

「君、怪我はないか？」

「大丈夫だ。それよりも、貴殿はあのものらとは違うようだ」

「そりやそうさ。それよりも、手伝つてくれないか？（爆弾の奪還を）」「わかつた。助けてくれたお礼だ、手伝おう（テロリスト殲滅）」

私はロケランで奴らが逃げている先に偏差射撃して爆破すると、周辺を巻き込む大爆発が発生した。

私は無傷で、戦後処理を行う。

私は足元にいる人物を目にかけ、彼に契約拘束腕輪をかけてEDFの帰還ボタンを押す。

これにより腕輪を掛けられた本人とEDF職員は、EDFの基地内にある帰還地点に降り立つ。

「結城！初任務おめでとう！そこで、そこのけが人は協力者だな。すぐ回復させ、故郷に戻そう」

「御願いします、主任。そこで、初任務達成の褒美はなんですか？」

初任務の達成というよりも、撃破したフォーリナーの種類と数字で功績が認められるようになつていてる。

これが活躍としての指標になつていてる。

よつて活躍していくと、強力な武装が手に入るようになる。

勿論、転移した世界先でも、援護を受けられるような状況になる。

「黒アリ型が30匹、赤アリ10匹、緑アリ5匹、クモ30匹。武器は……ん？」

「？」

「いやいや、嘘だろ？え、でも……」

どうしたんだろうか？

主任が戸惑つていてる。

彼はどんな状況でも焦らないで、状況の確認ができる優秀なサポート班だ。

なのにこの焦りようは、よほど私に渡される装備が貧弱なのだろう。

この基本装備よりも弱いとは……何という事だ「ルールオブゴッドー1だ」え？

翌日私と主任は、EDF本部の一定の力を持つ人物にお目通りし今回武器譲渡に関して苦言を云いに行つた。

しかしその返答はただ笑顔で、『ガンバレ』とのことだった。

そして今日日本日付で、マザーシップ（人類側）が支援者になつた。能力はドローン射出・広域制圧モード・超広域殲滅モード・Genocide Modeがある。

そしてその中で、私が指示できるのは出撃と退却・援護と援護射撃だ。

更に援護射撃は非常に強力で、『ルールオブゴッドー1』を使える。これは広範囲にジエノサイドガンを射撃し、周辺を制圧する援護射撃だ。

ただ膨大な大気エネルギーが必要なので、連射ができないようになつて いる。

「さてレンジャリー1結城殿。これがこのマザーシップの詳細だ。

功績を使って武器の入手を無くす代わり、こいつの武装等の強化を施せる。

勿論武装は戦闘中によく使用することで上昇する。

ユニットやドローンも、練度や武器レベルも総合した中で計算される。

が、がんばってくれ

「はい」

私は近くの休憩所にある自販機で、セントリーエンターテイメントのアシッドソーダを飲む。

この突き抜けるような酸味が癖になる。

ただ他の隊員は、『殆ど炭酸水じゃないか!』といつていた。

其処に砂糖やらいれたのが、防壁製菓のサイダーじゃないか。別に変わらんだろう?

そういえば、この休憩室には短時間でできる飯の自販機もある。その自販機はついでなのか、普通の取り出し口があつてこつちは付属品が出てくる。

たしか焼きうどん専用のジャスミン茶とかだつた筈。

私はそう思いながら、TVで『泣いた赤蟻』の再放送を見る。

赤蟻がフォーリナー側でありながら、普通の生物兵器でなく思考を兼ね備える思考生物で

人間と何故戦うのか考え葛藤する日々を送る。

結果赤蟻は女王蜂の命令を無視し、人間と協力するが結局はフォーリナーであるからその運命は変えられない。

しかも生物兵器を操る匂いや神経節・脳波操作機で、長年付き合つてきた最初の理解者と戦う前に決別したりする。

最後はフォーリナーに改造され、女王金蟻にされて最後の思考を潰され本能のままに暴れるよう改悪される前に、敵の本拠地で暴れフォーリナーの本部やブレイン・アースイーターを破壊しまくつた。

その代わり女王金蟻は、フォーリナーの思考体と話す機会が到来。結局フォーリナーも、進化してしまった人類だつた。

女王は決意し死んだ進化した人類よりも、必死に生きて友情を高め合う武器だけ進化するEDFに肩入れすることになる。

そして幕引きは自分の命だ。

主人公は親父がいるレンジャー部隊とストーム部隊、オメガ部隊だ。

友情・努力・勝利な彼等と相見える。そして、勝者はどちらでもなく、悲哀が包む。

最初の邂逅者であるレンジャー。彼等の相談と共に、実質的な行動をするストーム。現実を突きつけるオメガ。

彼等は赤蟻の情報を元に、現実で戦つてきた。
そして彼らは恩人と決着をつける。

“生きるとは、本能に従う事だ！”

“利己とか自己だとかそんな理由なんざいらねえ、かかつてきやがれ！”

“理想を夢見て主に仕える者は、主たる者が理想を追い続けると現実をも見失う。

それがフォーリナーだ。君たちは間違えるんじゃない。絶対、約束だ”

意志を残し、遺志を引き継ぎ、意思を語り継ぐ。

私は訓練してからこれを見たんだが、心が死んでしまつていての感動しなかつた。

いや、既に現実を体験しているからこそ、こんな劇に心動かされな

いのかもしない。

「結城！例の協力者の治療が終わつたぞ！」
「解りました。見に行きます」

私は協力者と面会する事になる。

「おはよございます、私はレンジャー1 結城。貴方は？」

「私は高町士郎だ。いきなりやつてくれたね」

「いえ、意思の疎通が荒かつたための事故でしかありません」

「そうだな。それで、何時帰してくれるんだ？」

既に状況説明は済んでいる模様。

だからこんなにスムーズに話しが通じているんだ。

「EDFの事を話さないと誓つて頂けるなら、早急にお返します」

「理由はわからないが、確かに超技術の塊だ。話しちやまざいのは分かつた。

だが約束してくれ。もう一度私の世界にフォーリナーが来たとき、君を派遣する様にと」

すると、この話を聞いている上層部の一人が、了承する。

何氣に救助対象世界から、民間人を運び入れるのは初めてらしい。

というか、宇宙転移技術自体が10年以内にできているんだからそれはそれで、最近の出来事なんだなと思った。

「では、お送りします」

「ああ」

彼、高町士郎氏は、宇宙転移され元の世界へ戻つていった。

近況報告。

ロケラン：

『ステイングレイM1—2』

アサルトライフル：

『AF—14—3』

後方支援：

『ルールオブゴッド—1』

進撃の黒蟻

2：進撃の黒蟻

「報告！結城！至急、宇宙転移してくれ！今動ける兵士は君しかいな
い！」

「構わないが、そんなにレンジャリーいないのか？」

「一般兵士だがレンジャリーになるには、8年の訓練が必要だ。

君みたいに3年で、此処に来る事ができるのはありえないんだよ」

「前科のおかげだな！」

「胸張つてないで行つて来い！」

「了解！」

私は自分の武器を倉庫から取つてきて、宇宙転移する場所へ行く。

「では、送ろう」

「御願いします」

そして、私とマザーシップは、その世界へ転移した。

目が覚めると、そこは広い草原だつた。

更に出会いは急なものだつた。

「おいおつさん！こんなところで寝てると、風邪ひくぞ！」

「む？」

「駄目、エレン。こんな得体のしれない人としゃべっちゃ

「んだよ、ミカサ。得体がしれないからこそ、こうしてんだろうが。

其れに一人だぜ？これくらいなら、駐屯兵团でなんとかなるつて
色々な言われようだが、少年は中々見どころがある見解だ。

そして少女な方は、当然の物言いだ。

しかし大気密度を計測するが、ここも地球とよく似ている。

二酸化炭素濃度は、私の世界の方が高いか。

私は起き上がり、二人の子供を見る。

「やあ、おはよう」

「おう！」

「私はEDFのレンジャー1結城だ。君たちの国を案内してくれない

か？」

EDFの紋章を見せる。

これで不信感が払拭されるだろう。

「よつし、俺達が見せてやるよ！その代わり、外がどんな世界か教えてくれよ！」

「ああ、いいよ」

私は中世ヨーロッパの町並み、標高100Mの壁を見ながら彼等に地球の環境を伝える。

また私はこの世界の兵器や兵装を見て、これではフォーリナーに対抗できないとして蒸気機関を伝えようと思つた。

更に彼等の友人であるアルミニンを加えて、私のお話は非常に人気盛況を誇つた。

なんとも熱いんだろうか。彼らが次代の若者だ。

きつとこの国も、まだ捨てたもんじゃないんだろうか。

何せ聴くところによると、外へ想いを馳せるのは禁止タブー視されている。

だから外国に目を向けると、いじめられるんだとか。

しかし目を向けないと、国際社会に置いていかれるぞ？

「国際社会って何？まさか、此処以外にも国があるの？」

「あるだろ？何せ、此処に人がいる限り、どうにかして生きているんじゃないのか？」

此処みたいて壁を築いたり、城や長城を築いて守つたり

「すげえ！他にもいるのか！っていうか、おっさんも外から来たんだから当然だよな！」

「おっさんって、まだこれでも12歳なんだけど

「え？」

「え？」

この世界では私は大人らしい。
悲しい現実也。

私はこの後、彼等の家に行つて昼飯を取る。

勿論私は私で用意しているので、迷惑をかけることはない。

そこらへんは抜かりないので。

「おっさん、それなんだよ！」

「カレーっていうものなんだが、知らないのか？」

「くれよ！」

「こーら、エレン」

エレンの母親が私の飯を食おうとするエレンを諫めようとする。
しかし私はそれをやんわりと断り、彼らに異文化の味を味わわせる。

「なんだこれ、すげえ美味しい！」

だが私のカレーは、甘口だ。辛いの苦手なんだよ……。

「だろう？これはインドから入ってきた料理なんだけど、私の国がこれを改良してこうなった」

「へえ」

エレンは母子家庭ではなく、父親は近くの家に診療しにいつているらしい。

とにかくこの飯が終わつた後、エレンに連れられて近くの城門に行く。

そこには人だかりがあり、ナニカを待つていてるようだつた。

そしてそのナニカが出現すると、人々は陰口をたたいたり罵倒嘲笑を喰らわせていた。

食らつて いる彼等も、非常に暗い様子だ。

「すみません、息子は！トーマスの姿がどこにも！」

「彼はこーです」

翼の画が描かれて いるマントを羽織る彼らは、後ろに引き連れている荷馬車の荷車からある包を持つて
母親である婦女に渡す。

「申し訳ありません。彼の遺品は、腕だけです」

「で、でも、トーマスは調査兵团として、何か華々しい最後を遂げたのでは」

ここらへんで群衆の聲がうるさくて聞こえなかつた。

しかしそうある言葉で、大体察することができた。

「我々は何も成果を得られませんでした!!」

私はこの世界が如何に難局に陥つてゐるか、大体理解できた。だからこそ、私は視界を覆い尽くす壁に登らなければならぬ。

「おっさん、何やつてんの？」

「何つて、あたり判定を駆使して、登るんだ」

「あたり判定？」

「そうそう、こうすると」

私の視界には青空が広がつた。

そこから眼下にウォール・マリア全域を望むことができる。

「おさああああん!」

「エレン！遠くから巨人が大量に来ている！早く、母親や友人をつれて逃げるんだ！」

「ええ!? よくわかんないけど、逃げるよ！」

私はついている。まさかこんなにも早く、ハヴオック神に会えるとは！

この技は友情のレンジャー・忠実なオメガ・奇天烈なストームの戦闘映像から盗んだ技だ。

あの世界もこの世界も、やはり根底は同じなんだな！

と思つていたのも束の間。

いつの間にか、壁上に人体模型もびっくりな筋肉纖維たっぷりの巨人があらわれた。

あまりにも驚いてしまつたため、ロケランを放つてしまつた。

巨人の顎を吹き飛ばしたが、直ぐに肉体を回復し始め傷はふさがつた。

奴からは大量の蒸気が吹きあがつてゐる様が見受けられる。

直ぐに生物の弱点である目に、ロケランやアサルトライフルで射撃した。

すると大量の蒸気を発生させながら、シガソシナ区にある城門を蹴り飛ばした。

更に鎧のようなものを全身に纏つた存在が出現する。

それに対して、ロケランで爆撃する。

すると奴はそこら辺の家を投げて来た。

私は緊急回避をして逃げ惑う。

直ぐに態勢を戻して、進行してくる巨人を撃破する。

最初に四肢をやつて、頭をうつ。

だがすぐに再生されてしまう。

そこで人間の急所である、背骨や脊椎・首を狙い撃つ。すると首を爆撃したり、集中砲火すると動かなくなつた。これが弱点だ！

動き出そうとすると、後ろから何者かが接近してきた。

「お前は何者だ！」

「私はEDFだ」

「……わかった。巨人との会敵と共に、民間人救助を頼む。

巨人の弱点はうなじの縦1M、横10センチを損傷させること。これで殺せる

「了解。援護する」

壁外にはなんと巨人の他にも、フォーリナーである黒蟻を発見する。

私は遠くに見える黒蟻横一列に爆撃する様に、マザーシップに援護を頼む。

刹那上空から白い光線が扇状に飛んでいった。

字面に着弾すると同時に、大爆発が発生。

周囲を音と炎と衝撃波で破壊し、黒蟻を木端微塵にする。

その様子を見てから城壁から爆撃を行う。

この場所の放棄は目に見えている。

私は周辺を巡りながら、侵入してくる巨人と蟻の撃滅に勤しむ。

そしてあらかた撃破したら、エレンの家へ向かう。

すると既に閑散としており、巨人が一匹いるだけだった。
よつて、爆殺確定。死ね。

「レンジャー1結城。黒蟻の撃破完了です。巨人に関しては、当地の問題ですので功績に加算されません。

ですのでこれにて、貴官は帰還できますが?」

「帰還する」

私はEDF隊員。私情は挾むが、仕事なんですね。
これにて失礼させてもらうよ。

「お帰り、結城」

「ただいま、主任。ところで、私の功績はどれほどでしょうか」

「うむ。君の功績は、黒蟻400匹だね。武器は——」

私は主任に言われた通り、武器庫にやつてきた。

基本的に武器は10種類と支援武器4種類までだという。
レベル制度により、多くの武器が必要なくなつたとのこと。
故にこの少なさだという。

私は新たに追加された『AF-15-1』を入手する。
これは『AF-14-5』ととつて変わられる。

そりや育てた方を使いたいが、結果的に総合威力はこつちの方が上
になる。

レベルは武器性能が良いほど、上がりにくくなる。
だがその分威力は非常に高い。
故に私はこいつを選ぶ!

近況報告。

ロケラン：

『ステイニングレイM1-7』

アサルトライフル：

『AF-14-5』

『A
F | 1 5 | 1』

後方支援：

『ル
ールオブゴッド | 2』

森の中の蜘蛛さん

3：森の中の蜘蛛さん

私はレンジャーハー結城。

久しぶりに宇宙転移することになった。
行先は並行世界のイギリスらしい。

どういうことなんだろうか。

「技術技師さん、頼みます」

「ああ、行つて来い」

私が転移すると、その場所は湖だつた。

「!?

いきなりでびっくりした。

私は岸辺に上がり、武器を確認する。

うむ、何も起こっていない。素晴らしい！

「あのー……」

私は小さな男の子が話しかけてくる事を視認する。

「ん、なんだい？」

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ。それで、君はどうしたんだ？お友達はいないのか

？」

幼少の子がこんなさびれた場所で一人ぼっち。まさか、迷子か！？

「あ、いえ。違うんです」

「聲に出てたか？」

「うん」

「あちゃやー。うん、よし、私と何かして遊ぼう！子供は遊ぶに限る！」

「じゃあ、僕とこの本のどこ遊びして！」

「ああ、私が敵になるよ」

というわけで、ラプラスの悪魔とかいう事象現象に関する小説を元にした劇場遊びをした。

推理小説かなにかか、と思つたくらい難解だったが何とか敵になれ

た。

少年は私の迫真の演技に、目を輝かせていた。

傍から見ると痛い人だが、これもこの少年の為だ！

よ、夜まで遊び通してしまった……。

夜と云つても、まだ夕方なんだけれども。

そろそろ夜になる。少年は家に帰るといつて帰ろうとするが、私の

帰る場所について心配してくれる。

「大丈夫。私は私の家がある。だから、君は安心して帰つていいよ」

「……ねえ、僕の家にきて！」

「え？」

「家には誰もいないんだ。だから、一緒に居てほしいんだ」「わかった。じゃあ、行こうか」

私は少年と共に、家に向かおうとした。

しかしその時後ろにある森から、異様な音が聞こえる。

この音は……。

私は何かを察知し、少年を抱えて緊急回避する。

「へ!?

その時私達が居たところに、多量の蜘蛛糸が張られていた。
この量は蜘蛛型巨大生物のバウだ。

実際森の中から、一匹の凶蟲バウが出現した。

私はアサルトライフルを出して、バウを射殺した。

奴は吹っ飛んでいった。

「大丈夫か?」

「うん、すごいねお兄ちゃん」

「EDF隊員なら、これくらい当然さ」

私はこの後、少年と共に日本名物の『うな重』を少年と共に食べた。
「なにこれ?!すつごいおいしいよ?!口に入れたら、溶けるんだけど?!」
「そりや、日本産だから当然だよ」

「ねえ、お兄ちゃんの名前何?」

「私は結城だ。君は？」

「ネギだよ！ネギ・スプリングファイールド！」

「そつか、皆に親しまれるような良い名前だ」

「えへへ」

少年の良い笑顔が見れた。それだけで儲けものだ。
さて彼の幼少時が酷く悲しいことになつていて。
もしここで蟲を殺さなければ、彼の輝かしい未来は途絶えてしまう。

私は深夜動き出す。

それはレーダーに赤い点が現れたからだ。
静かにネギの家から出て、敵戦地へ向かう。
そこには大量の蜘蛛と何か黒い奴らがいた。

『ルールオブゴッド—2』を発動させる。

白い光線は周辺一帯を消し飛ばす。

そしてロケランで残つた全てを射撃する。
少し遠いので、ライフルでは届かないのだ。

私が其処を殲滅する頃合いには、ネギが住む家が所属する街に火が
進る。

私は街へ行き、周辺の建物を爆破しながら黒い人型の何かと、クモ
型甲虫を撃破する。

「お前が、我々の仲間を殺した奴だな！お前もコレクションに入れて
やろう！」

すると目の前の奴は、口を開いて光を発した。

私はそれを無視して、敵を撃破する。

「こいつ、石化しねえ!?」

「おい、先ほどからなに言つてやがる。私達は、石化等設定上ないのだ
！」

「何言つてやがんだよお前!」

何かをほざく角やら尻尾やらを生やした、真っ黒な何かをライフルで引き撃ちする。

腰だめやジャムやらホワイトアウト、ブラックアウト、グレイアウト、レッドアウトも存在しない。

故に私達は常に安全に射撃を行うことができるし、高層ビルやヘリからでも落ちることができる。

数時間すると、何か炎の玉が飛んで行つて敵を撃退していった。

「ん?」

「そこのあなた、何をしているのかわかりませんが、援護ありがとうございます」

「いえ、仕事中ですので、お構いなく」

金髪の女性が出現した。

その人物がいうには、奴らは魔法によつて召喚される悪魔とのこと。

だから重火器ではダメージを通すなんて不可能と云われた。

しかし私達の世界では、悪魔なんていない。故に悪魔は常に戦場で生まれ、畏怖される生き残つた英雄に与えられる称号だ。

決して姿形、その運命まで闇に堕ちていない!

「私はEDFのレンジャー1結城です。貴方は?」

「私はネカネ・スプリングフィールドです。この街の一介の魔法使いです」

「そうですか。ではこれより共同戦線を頼みます」

「それは願つてもないところ。お願ひします」

これによつて殲滅力が上昇し、一気に敵を減らす事ができた。

だが私達は町の中だけを減らせたのであって、外の事を気に掛ける事をしていなかつた。

〈マザーシップより通達。ネギ・スプリングフィールドが、悪魔により襲撃を受けている〉

何だと!?

「ネカネさん、郊外にてネギ・スプリングフィールドが、悪魔の襲撃を受けています。

直に応援に行きましょう」

「ええ、行きましょう」

私達が向かつた時には、ネギは何者かにより助けられ杖を握つた状態で見つかつた。

その何者かは、私達の背後に立つていた。

「私はEDFのレンジャー1結城です」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。ま、今後会えないかもしねえが、ネギの事は頼んだぜ」

「私ではなく、ネカネさんに言つてください」

「いや、俺の勘だとお前は深く、ネギを含んだ全員と世界を救済することになるだろう」

「よくわかりませんが、頼まれました」

「ということで、魔物を全てぶつぶしました。」

翌日私はいきなり豹変するナギ・スプリングフィールドを無視して帰還した。

帰還してから本部周辺を巡つてみたが、誰もいなかつた。

不信に思つて、武装解除せず周辺を巡つてみると皆が皆、上層部に掛け合つてゐる所が見られた。

その集まつてゐる理由が、宇宙転移後の功績が巨大生物以外で加算されることがないその問題点についての事だ。

最近宇宙転移により、若手のレンジャーがすぐに死んでしまう事態が発生。

その人数は万を超えており、その責任を有耶無耶にして相手とその当局の人間の対応力不足のせいにして、

追求を免れてきたようだ。

だが明らかに無茶な戦闘とその継続時間、むしろフォーリナーよりも厄介で強い敵がわんさかいる宇宙世界が危険だと

熟練のレンジヤーが多数報告。

これはマスコミにも流れ、世間を風靡している。

結果 E D F という世界連合的な組織の地盤は、ゆるゆるで今にも倒

肅清と共に改革された。

おかげで新たな制度が生まれることになった。

この発表が今起つてゐるEDH内の闘争と一極集中の理由たゞ

しかしこれで、あの悪魔や三人も再評価されるんだろう。

これは功績に値されなかつたフオリーナーより強い敵が、功績に値

する事となつて着手のレンジューの基本的な
アーティストの運営)又ヨーロッパ、イギリス、

実際EDFのレンジヤー不足は、8年の経験の積み上げよりもこの

功績の部分がフオリーナーの撃滅のみによる報酬だつた事と、

幸醜が武器のみで作り造る方にはわざいことは明白か。力

環が促進されることと同義で、非常に喜ばしい。

主任！技術技師！どうでしたか！？

「うむ。君のテロリスト・田人・悪魔撃破の功績は、上層部のストーリー

よつてその功績で――

功績はお金に還元され、それを使って物品の購入・武器やビーグルのレベル上げや細かい備品のレベル上げや装備の改良・新たな武器やアーマー強化への購入・自室や倉庫の強化や増強に充てられた。

勿論実家への仕送りも可能になつた。

そこで私は民宿を営んでいる母親に、仕送りをして少しでも手助け

になる様にした。

「ん？ 民宿ユウキはないぞ？ 今はホテルユウキになつてる。

ああ、息子さんの偉業のおかげで、いろんなところからスポンサーが食いついて、一気に大企業に変身したな」

いつの間にか、ユウキ不動産会社・コンツエルン・ホテルまで経営し始めた。

何してんの、結城の一族。
いや私もそうなんだが……。

ちなみに今回の功績＝お金システムは、新たな不穏な風が吹いている。

しかしこれに対するシステムやルールが追加された。

それはヘルメットについているカメラを、仕事中に停止させたり壊した場合職務停止または職権剥奪になるという。

（再度EDFに申告してきても、DNA関係が進化している今どうやっても通ることがないので、再度兵士になれない）

このカメラは非常に頑丈なので、壊れることはない。

地下数千キロの圧力に耐え、真空による膨張圧にも耐え、太陽風や宇宙線に耐え、水圧・電気その他諸々に対応できる
超ハイスペックカメラだ。

更に稼働には人体の電気エネルギーという微弱な電気で賄つていいる為、非常に省エネ。

記憶も微弱な電気で保存しているので、長く持つ。

これを解析することで、レーダーや視覚情報・聴覚情報の同期を確認し、功績の整合化を測る。

ただこれは人数が少ない今できることであり、これから一年後少なくとも8年後大変な事になるので、

超機密な判別機器を作つてこれらの無人化と機械化を進める事になつてている。

これにより加入申請者が増えたわけではない。

何せ常に生死の境が続くのだ。

だから若干増えただけで、慢性的な兵士不足はまだまだ続く。

更にストーム部隊が改革をやつただけで、ストーム1がやつたわけではない。

このため現役な彼等は、GGを片手に戦場で戦っているんだろう。

さて、私も整備しようか。

項目が沢山あるが、フォーリナー（人類側）というのはなんだろうか？

それをクリックすると、アースイーター・ブレイン以外のフォーリナーが列挙されている。

「技術技師！この項目はなんですか？」

宇宙転移する広場にある機器で、これを使っているので技術技師に聴ける。

「それは一定のフォーリナーを撃破した者や優秀なEDF従事者・ルールオブゴッドを持つている者へ

選択が可能になる特殊な装備だ。此奴を使えば、EDFを倒すこともできる。

今回革命をしたのはフォーリナー絶対殺すマン、ストームチームによる行いだ。

奴らが使ったのは、フォーリナーやEDFの軍隊だ。

しかし軍隊の方は、EDFの専属者にならなければ選択すら不可能になる。

洗脳もあるらしいが、頭がイカれた奴らの思考回路はわからん。

とにかく、フォーリナーはいいとしてEDF軍隊に手を出そうとは思うな。

グラインドバスターは浪漫だが、そのためには自身の将来と過去を生贊に捧げなければならぬ。
覚悟しておけ」

「ごめんなさい」

私は素直に謝つておく。

今のEDFは敵の全てを知っているような物。

だから再度襲撃を受けても、確実に破壊できるようになつていてる。
故にフォーリナードとき、使い潰してもいいだらうという考えなん
だろう。

よし、私はこうしようと思う。

近況報告。

ロケラン：

『ステイングレイM1—13』

アサルトライフル：

『A F—14—5』

『A F—15—7』

後方支援：

『ルールオブゴッド—2』

フォーリナー：

『マザーシップ—3』

『アルゴ—1』

全体改良：

『最大弾数強化—1』

『リロード速度強化—1』

お花畠の赤蟻

4：お花畠の赤蟻

私は久しぶりの宇宙転移だ。

今まで地底探索をして、アリの巣の植民地化戦争をしていたから、こつちに来るのは本当に久しぶりになる。

「では、送るぞ」

「御願いします」

私が送られた場所。

そこはだだつ広い草原だつた。

非常に空気が澄んでいる。

更に二酸化炭素濃度が低く、酸素濃度が高い。

恐竜の時代かな？

いや、それにしてはこの世界は綺麗過ぎだ。

空氣中に、火山からでてくる一酸化炭素がほとんど見られない。

中々小奇麗だが、この地球は生きているのか？

私がそこらを散策していると、目の前にある林の奥から何やら例の音と女性4人と男性一人の聲が聞こえた。

私はすぐにローリングとハヴオック跳躍を行い、向かい側へ行く。

「親方あ！ 空から誰かが！」

「親方じゃないって！ 団長だつて！」

私は眼下で赤蟻数匹と見たこともない蟻が、男性一人・女性4人を襲っているのを発見する。

しかし意外と距離が近いので、射撃する。

これにより、見たこともない蟻は殺したが、赤蟻がまだだつた。すると女性4人が、絢爛な力を發揮し赤蟻の擊破を完遂した。私が着地したときには、全て倒し切つていた。

「私はEDFのレンジャー1結城。君たちは？」

「僕はFlower of Knightsの団長です。今初めての

花騎士の連隊構想の試運用中ですでの、

団長は僕一人だけです

「あたしはアブラナ。まあ、よそ者だし機会は少ないんでしようけれど、一応自己紹介しとくわ」

「セントポーリアです。みじかあい間でしようけど、御願いしますうう」

「貴族出身の花騎士、ギンランです。短い時間でしようが、御願いします」

「後方支援が得意なワレモコウです？ 特異な変化への対応は得意ですか？」

どうやら、キャラの濃いながらも初めての軍団指揮を行う軍事国家と邂逅してしまったようだ。

だが一応友好的である。一名を除いて……。

とにかくお互いの親交を深め、よりよい関係を築かなければ今後危ういだろう。

私はアイテム欄にある、孫子の兵法を団長に、ぬいぐるみをセントポーリアと菜の花に、

宝石をギンランに、本をワレモコウに手渡す。

「お互いの友好の為、お納めください」

すると三者三様の反応を示された。

実際、本とぬいぐるみと宝石の三種類なので、これは妥当だろう。

この後私は、ブロツサムヒルという所で初めての軍団指揮をやつて成功に終わった団長を送り、

共に今後の戦略を考えることになる。

そして私は聴いた事のある名前やこの国の成り立ち等、色々聞いて興奮した。

「え、じゃあ、サクラやウメは花騎士の中で上位なの？」

なのに松竹梅といわれるのに、松はどこかの下つ端で竹は花ですらないと？

解せぬ

「まあまあ、一応一般市民はいるんだし、そこは妥協してよ」

一応お互に親しく話す間柄になる。

孫子の兵法を読む傍ら、ある程度の彼等にとつての花騎士や能力関係で、しようもない話を展開する。

これは団長にとつて、戸惑うことだろうがそういう認識がこっちであるんだ。

「それにウメやサクラは、一般大衆に知られている認知度や生命エネルギーを力として転換・変換できる人間を、

花騎士として採用している噂があるんだし、そこら辺は……」

「竹とミントの生命力はヤバイからな？」

「竹はいないし、ミントは下つ端だなあ」

「駄目な花騎士だな、このやろう」

「認知度……」

「ミントは芳香剤として、竹は観光系で世界中に知られてるけど？」

「どうしようもないね」

花騎士の上級騎士の任命する順番がよくわからん。

まさか生きるその場所の範囲だとか？

サボテンという上級騎士がいるんだが、その生物は砂漠に広く存在している。

だから上級騎士なのだろうか。

しかしペポなんて聞いたことがない。

せいぜい一般で売られているアネモネ・そこらに生えているヤマブ

キ・紅ショウガはわかる。

桜や梅・サクランボもわかるし、オオオニバスもわかる。

デンドロビウムってなんだよ。

そんな時緊急を知らせる音が鳴り響く。

（赤い蟻がこちらに向かつて来ています！花騎士と軍団長は至急出動せよ！）

「お話をここまでだ」

「うん。後、結城の言う通り、僕らは赤蟻よりもその右翼にいる害虫を倒すよ」

「ヨワ虫だつたか」

「違う、マイドアリだよ」

「そうそう。頼んだ」

戦場に行く頃には、上級騎士が布陣を整えている。

しかしどう見ても傭兵のような行動だ。

これでは勝てる戦も勝てないぞ。

「む、来たか新設の新戦闘布陣説を提唱した団長よ」

「サクラさん、我々を侮らないでください。

そして新たな花騎士として任命された『蠍火』さんと共に、敵を効率よく撃滅します」

「ほう、その実力とやら、魅せてもらおうか」

たしかブレーメン地方での生き残りが、少数精銳を叫んで物量と個人の傭兵スタイルを取っていると言っていた。

おかげで軍団レベルの統率や指揮は、すたれかけているとのこと。

しかし当時の生き残りである桜やウメは、この新たな風である団長と孫子の兵法を用いたその懷柔案により

団長を信じるようになつた。

ちなみに一番信じた案の一つが、『女性ばかりの中男性が一人いれば、女性は男性に見栄を張ろうと頑張る。

その為戦闘効率や能率が上昇する。』という言葉。

現実世界の真逆かよ!?

と、とにかく私は団長の指揮下（仮）で、戦闘を開始した。

『ルールオブゴッド』発動。

先鋒の赤蟻を爆散させた。

この後はロケランとライフルで支援しつつ、サクラさんの砲撃やウメのペントガコンアタックを筆頭に撃滅していった。

マイドアリの方面は物量なんだが、団長の指揮により救済された花騎士と共に戦線を拡大し、

徐々に数を減らしていくつた。

赤蟻は二度目の『ルールオブゴッド』で殲滅できた。

この赤蟻は爆風で吹っ飛んでどこかへ行つたので、偏差とそのままの射撃で撃破した。

「助かつた、ありがとう、結城」

「いや、数が多いマイドアリのほうが圧倒的に脅威だ。だから、引きつけてくれたことは非常にありがたかった」

「新設団長、貴殿は正式に花騎士団長として任命される」

「拝命仕ります」

この事により、正式に団長による軍団指揮が功を奏して、新たな戦闘隊形が支持されるようになる。

これは革命だろう。

さて、私は彼等の大団円を見て、帰還することにしよう。この世界もこれで安泰だな。

そういやアルゴは役に立たなかつたな。

まあ呼んでいないからどうしようもないんだが。

「主任、どうでした？」

「うむ。赤蟻1300撃破。マイドアリ2900撃破だ。ただ、マイドアリは雑魚中の雑魚だから、

功績はそんなにないぞ？」

「功績目当てで戦つているわけではありませんので」

「流石EDFレンジャー部隊」

というわけで、今回は安上がりだが母親に仕送りをした。これで一安心。

さ、次の戦闘の前に、改良を施さないといけないな。その前に、武器を購入しよう。

流石にステイングレイだと、赤蟻がきつくなつてきた。そこで、『ボルケーノ3A』を調達。

長らく使つてきたステイングレイM1は、ここにて退役することになる。

今回はこれくらいかな。

近況報告。U=装備中。

ロケラン：

『ステイリングレイM1—25』

U『ボルケーノ3A—1』

アサルトライフル：

『A
F—14—5』

U『A
F—15—10』

後方支援：

U『ルールオブゴッド—3』

フォーリナー：

『マザーシップ—4』

『アルゴ—1』

全体改良：

『最大弾数強化—1』

『リロード速度強化—1』

暗闇のドラゴンさん

5：暗闇のドラゴンさん

私は新たに導入された巨大生物への知識を吸収する授業を受けた。それを受けて、今度はインセクトビルの傀儡化を行つてきた。

武器レベルが上昇して重畳。

これでフォーリナーをもつと殺せるようになつたんだ。嬉しくない筈がないだろう？

「お、結城。新たな任務だ。前にもあつた星でな」

「前？」

「高町土郎の世界だ」

「ああ！」

「そこで一匹のドラゴンが入り込んだ。撃破してくれ」

「了解！」

ということでの世界に来た。

「えーと、主任がいうには、駅前の……ここか」

周囲の人の視線を浴びながら、店内へ入る。

お店の名前は『翠屋』。シュークリーム等の御菓子を扱うお店のこと。

店内はにぎわっていた。

「すみません、高町土郎さんはいませんか？」

「貴方は？」

「私はEDFのレンジャー1結城です」

「解りました。店長を御呼びします」

私はシュークリームを購入して、お店の外で待つていた。

「久しぶりだな、結城」

「お久しぶりです、高町さん」

シュークリームを食べ終え、今回の話を持つていく。

彼の左腕には、私が付けた腕輪がある。

中々未来的なデザインで、機能も未来的。其れゆえに多くの人が、

この腕輪の購入先を聽かれたんだとか。

そんなことじやなくて、彼と今回の目的を話す。

「フォーリナー……あのクモや蟻の仲間というのなら、早急に撃滅しなければ。

しかし今は仕事中だしな……よし、私の門下生を紹介しよう。何、私の息子と娘だ。

実力は折り紙付きだぞ？」

「そういうのでしたら、御願いします」

シュークリームがEDFで売っているやつよりもおいしかったので、まとめ買いして食っている。

食べ歩きはあかんというが、私はこれでも仕事中だ。足を速め、現場へ向かう。

「……というわけで、協力してくれないか」

「わかった。フォーリナー云々の前に、父さんの命の恩人なんだ。

否が応でも頼まれるさ」

「私も恭ちゃんと同じ考えだよ。それに空飛ぶ怪獣でファンタジーだと、マスコミが騒ぎかねない」

「最悪、市民を巻き込んだ戦争になる」

「二人は積極的だけど、どうするんだい？」

「私は一人の可能性を見て、参戦を要請します。

私はEDFのレンジジャー1結城です。今回のドラゴン討伐、よろしくお願ひします」

「俺は高町恭也だ」

「私は高町美由希。宜しく」

と云う訳で、レーダーでドラゴンの場所を探す。

しかし今日は休日なのか、酷く道が混雑している。中々その場所へ行けない。

ドラゴンが飛んでいるのは、ベツドタウン屈指の計画建設現場だ。つまり建設している建物が多い場所。今この海鳴市は、ベツドタウンとして急成長・発展しているようで、

現在建設ラツシユなんだとか。

しかし今日は休日で昼なおかげで、工事現場は休みである。私はドラゴンを追いかける。

すると、ドラゴンはどこかへ急降下していった。

その場所をヘルメットの高倍率モードで細かに見ると、道路の中央にひし形の宝石があつた。

色は翡翠色。

ドラゴンがそこにかみつきに行つた。

そしてかみついたと思ったら、そのあと桃色の光線・黄色の光線・水色や緑色の繩や糸が絡みついていった。

ドラゴンに攻撃した仲間と思われる者の座標が、レーダー上にそれぞれの攻撃色に表示される。

これによつて、何者か分かるようになつた。

その瞬間、ドラゴンは光り輝き何者かになる。

「マザーシップより報告。ドラゴンはグレーター・ワイルド・ドラゴン。通称神龍になりました」

「神龍はやばい！」

神龍は周辺に衝撃波と火炎放射を放つてきた。

私は高町兄妹に民間人が一つの工事現場にいるだけ以外で、半径1キロ未満に居ないことを確認。

市民を助ける為、その場所へ向かう事にする。実際は攻撃するのに高所のほうがいいからという理由なんだが。

このように行動しないと、現地の人は納得しないんだ。

これが戦争を知る者と平和を知る者との価値観の相違だ。私は兄妹と共にその場所へ行く。

屋上から一階下だ。

其処へ行くと、市民が一か所に集まつていた。
だが様子がおかしい。

「市民の方、ここは危ないので退避を」

銃口を向けながら言う。

背中を向け、集まりの中央へ目を向けている奴らはものすごい形相

を見せるのと共に銃撃してくるが、

私がすぐにライフルで市民を『みねうち』した。

更にアタッシュケースから見えていた札束を見て、あかんやつらと判断して兄妹が奴らを『みねうち』した。

私は困っていたその存在を見て、救助することに決めた。

その存在は金髪の少女だ。服の全てを脱がされていて、暴行を受けているようだつたので腕輪を付けて転移させた。

勿論市民（餌）の提供をしてくれた協力者として、送らせていただいた。

「こいつらはどうするんだ？お前の言う通り、みねうちしたが」

「フォーリナーは人を襲うんだ。だから、こいつらは餌にする」というわけで、遠くに10000人、近くに8人居れば近くに来るのがフォーリナー。

そこで私の近接射撃と恭也の『閃』が、奴を襲う！

更に桃色・黄色・水色の砲撃やらなんやらが飛び交い、奴を苦しませる。

この間に、緑色の縄が奴の動きを封じ込める。

『ルールオブゴッド』を使い、周辺を巻き込む大爆発を発生させる。

次に支援でアルゴを寄越させ、美由希と恭也を奴の下に行かせる橋渡にさせて滅多切りにさせる。

おかげで奴は最後には輝いて爆発する。

この時には高町兄妹は、撤退済み。

〈報告。それぞれの攻撃支援者の撮影に成功。送ります〉
有能。

〈更に今回の騒動の原因は撃破。遠因は既に捕獲済みです〉

有能だな。

〈名称は、ヒドゥン型ジュエルシード。記憶を力に、夢を魔力で叶えるロストロギアです。

ロストロギアは次元世界の高度の技術を持つ世界が残したオーパーツのことです〉

つまり危険物であるということだ。

此れが終わった後、餌になつてもらつたこいつらは屋上から突き落として死んでもらつた。

意識が残つて居たら、男の象徴を切り落として指を折つていつて慘殺した。

市民は餌だしな。罪悪感はわかない。

だつてEDFは地球を守るんだから。人間の命や権力・財産は守らない。

守る意味が分からぬ。守つて地球が助かるなんらいいけど、助からぬなら無いのと同じ意味だ。

「お二人とも、この写真に見覚え在りますか？

今回の討伐時の協力者です。私はこの方々に感謝を伝えに行きましたのですが？」

情報の視覚化をすると、兄妹は二つの写真をみて驚いた仕草をする。

ビンゴ。EDFの今後の任務に引き連れよう。

私は高町家に来る。

そしてその一室。

場所は道場。

そこには高町士郎・恭也・美由希、写真にあつた桃色砲撃少女と緑の拘束者フェレット、そして私がいる。

上座に士郎。そこに一人居り、そこから彼から見て左に美由希・右に恭也がいる。

ただ彼らは少女の真横付近にいる。

何ゆえか、彼等少女とフェレットが逃げない為というのと、不思議なデバイスを後ろ手で用意させたためだ。

私は道場の出入り口に立つてゐる。

「なのは。ここに私達がいるということは、察してゐるんだろうな?」「にやはは……全然わかんないや」

「仕方ない。なのは、フェレットというのは外来種だ。」

今ここで私がここでNOを云えば、後ろの監督官がそいつを殺してくれる

「キュウツ!?」

「ええ!」

中々の修羅場だ。私はライフルを構え、ユーノと呼ばれるフェレットに照準を向ける。

話が進んでいく。殺気に充てられた少女は、涙目になりユーノを抱きしめて訳の分からぬ敵意に困惑する。

「結城、見せてやつてくれ」

「はい。高町なのはさん。これに、見覚えはありますか?」

「え、え……? 嘘、どうして……」

「なのは。そして、ユーノ。説明してくれるね?」

顔面蒼白どころか、絶望しきった表情だ。

そしてなのはさんは観念したのか、ユーノが喋れることも言つて話し始める。

更に黄色い少女はフェイントといつて、ジュエルシードを集めている目的を持っていて敵対中。

水色の少年はクロノといつて、ジュエルシードを回収するという目的を持つ組織で一応敵対中。

「結城。私の腕輪をなのはにつけてやつてくれ」

「いいんですか?」

「ああ。私の方はなんとかできる。だが、なのははまだ子供だ。

君の戦闘力は近接型である私とは非常に組合せが悪い」

「私は中距離ですが?」

「それでも、だ。君はフォーリナーを殺すといいながら、市民を餌と考えながら私を救つてくれた。

もしそれが協力者という味方という概念であつたとしても、私は君の良心を信じるよ」

「私はEDFのレンジャー1結城です。フォーリナーから地球を守る事を是としています。

なのはさんを殺すかもしません」

「だが、腕輪を付けている時点で、それは味方だろう？」

「……おっしゃる通り」

「今はまだ私が腕輪をついているから、なのははまだ餌だ。

今の会話も私が腕輪をつけ、味方であるから喋っているだけである。

「そうなんだろう？」

「ええ。協力者ですから」

「効率よく・能率的に殺す為、が忘れられているぞ？」

頭が切れる分、士郎の方が良い。

しかしドラゴンの様相をみて、普通の人間よりも魔法という非現実的現象に目が向けられている今、

彼と手を組むのは得策じやない。

それにフォーリナーが宇宙転移するのは、地球を侵略するのと共に新たな力を手に入れる為の筈。

ならば人間よりも、魔力方面で決着がつくか……。

「わかりました」

私は士郎の腕輪を取つて、なのはさんの左腕に腕輪をつける。

若干びくついた彼女だが、直ぐに未来的デザインであり綺麗な腕輪に見とれた。

「なのは。今後俺達に秘密事はなしだ。勿論結城にもだ。

彼にフォーリナーに関する事で嘘をつけば、天からの爆撃で死ぬぞ？」

「それは前拝見させていただきました。うん、結城さん。お願ひします」

「ああ。では、今後とも高町家の皆さん、よろしくお願ひします」

「む？ 私達はもう餌だが？」

「ＥＤＦは私情を挟んではいけないというのは、フォーリナーに関してです。

そして士郎さんは私の良心を信頼すると言つてくれた。

これは私の観念で言いますと、個人的な親交も視野に入れてくれる色よい契約だとみて取れますか？」

「ははは！なるほどそう来たか！いいだろう、今後ともよろしくな」
私は任務中の為ヘルメットを着ていたが、今後の親交の為素顔を見てほしいと言われた。

大気密度や構成は、向こうと同じだ。
だから大丈夫だろう。

私はヘルメットを外す。

「ふう……いかがいたしました？」

「いや、無骨な人間だと思っていたが、予想外だつたよ」

「ほほう」

「へー」

「わーー！」

「かつこいいわね！」

喋った順に、敬称略で士郎・恭也・美由希・なのは・桃子だ。
しかしがつこいいか？私は殺すのに注目しているため、外見は気に
していない。

其れゆえに頭髪は伸ばしつきりだ。

この後食事を共にする。

私の出身や親の仕事、年齢だけ喋ることにした。

「私は日本の神奈川県出身です。親やきょうだいの仕事は、結城不動
産・結城コンツエルン・結城ホテルで、

私は結城家の長兄です。年齢は12歳です」

「え、いいのか、そんな超重要事項」

士郎さんが驚いているが、私は一向にかまわない。

「士郎さん達の事情や仕事、年齢を私は網羅しています。

今上空にはマザーシップが飛んでおり、彼のものが我々の技術を使つてある程度の事は知れるのです。

主にDNA関係が発達しておりまして、人の見た目や行動・言動・
肉体の動きで年齢は簡単に割り出せます」

「な、なるほど」

「なのは、なのは、三歳年上で長兄よ。超優良物件じやないの、アピー

ルしたら?」

「ちよ、美由希お姉ちゃん!？」

「いや、結城家は弟に譲るつもりだ。私は父親の様に、世界中に跋扈するフォーリナーを殺すのがふさわしい」

「そうか、君も中々複雑なようだ」

「ええ、理解して頂いて何よりです」

「でもなのは、見とれてたでしょ?」

「ちょっと!?

女性の方は話題の移り変わりが激しいから付いていけない。

私は基本的にフォーリナーの情報以外いらないので、そういう情報は全てシャットアウトしている。

食事をした後、私は色々再確認して何も盗難がない事を確認。このまま転移する。

因みに、土郎にライフルのマガジンを取られていたことが判明。それも共に転移しているので大丈夫だ。

というより、全ての備品には、EDF印がついているので、何かあっても転移させることで戻ってくる。
さて、私はあの人物と出会わないといけない。

「調子はどうだ?」

「ええ、最悪ではないわ。むしろ、ありがとう。後少しでやばかっただつたもよう。

危なかつたな。

しかし餌がいなければ、殺していたかもしね。

あいつらに感謝しろよ?

いや、殺されていた、か?

どちらにせよ、悪運が強かつたことは幸いだつたな。

「さて、君を故郷へ戻そう」

「ありがとう。転移さきは?」

「君と同じようなDNA配列のある家を発見した。
犬ばつかりの家だが、そちらでよろしいか?」

「ええ、大当たりよ」

という事で、あっさりと帰還させた。

餌には興味ない。士郎のように、利用価値があればよかつたが、まあいいか。

そういうえば、なのはさんと同じ服を着ていたが……まあ、どうでもいいか。

近況報告。

ロケラン：

『ステイングレイM1—25』

U『ボルケーノ3A—3』

アサルトライフル：

『AF—14—5』

U『AF—15—13』

後方支援：

U『ルールオブゴッド—4』

フォーリナー：

『マザーシップ—5』

『アルゴ—1』

全体改良：

『最大弾数強化—1』

『リロード速度強化—1』

6：おやつさんの歓迎パーティ

6：おやつさんの歓迎パーティ

「結城！」

「はい！何か、仕事ですか主任！」

「いや、今日は久々に休暇を取つてもいいそうだ」「わかりました。余暇を取らせていただきます」

久しぶりのUQQ暇だ。

しかし私のような熱心なEDF隊員は、前線で戦い若者の手本になるような仕事をしないといけない。

こんな現を抜かすようなことはしたくない。

私の趣味は、フォーリナー殺し。

こんな私が普通の日常を謳歌できるわけがないのは、上層部も知っているだろう！

トリガーハッピーではないが、それでも蟻共を殺さないとこの瞬間に多くの地球型惑星が侵略されていると思うと

非常に悲しい気分になつてくる。

しかたない訓練場に行こう。

そこで私の勘を鈍らせない様にしなければ！

私は久しぶりに『ステイングレイM1—25』と『AF—14—5』を装備して、訓練場へ向かう。

訓練場はLED煌めく白い通路を通り、大動脈である巨大な廊下を通りそのまま直進した通路の外にある。

そこは山岳・丘陵・市街地・海岸等、いろんな状況で戦う訓練を行える場所だ。

やはりEDFは勇猛果敢さも大事だが、臨機応変さも求められる。

だからこいつらフォーリナーの弱点や行動を把握しておかなければ、いざという時にやられてしまう！

勿論それは隊員に限られた話ではない。

輸送部隊やEDFの非戦闘員も、緊急戦闘態勢を取り銃片手に射撃戦を行わなければならないことがある。

輸送部隊はガス欠や輸送ヘリの墜落による遭難時。

EDFの非戦闘員は、拠点の最終防衛ライン突破時や脱出時にこれらの技能が役立つ。

これ等の能力は北米支部が実際にやつてのけ、非戦闘員はおおむね無事で撤退した。

私はその訓練場に行くと、懐かしい人物を見ることができた。

「お父さん!？」

「おお、我が愛しの息子よ～！会いたかつたぞ～！」

私は父親の抱擁を緊急回避して退避し、父親に銃口を向けて話す。

「うおおお……父ちゃん悲しいぞい」

「うん、なんかごめん。ついつい。それで、珍しいね」

「うむ！今日は非番なのだ！そこで今日は、ストーム1と一緒に訓練しようともつてな！」

ストーム1!?あの大英雄と訓練するのか……。

死なないようにね？

「ははは！大丈夫！さあ、息子よ、共に来るのだ！」

「え、いいの!?」

「勿論だとも。害虫を駆除するのが、父ちゃんらの仕事だ」

お父さんは『OスタンピードXM-100』を手に、私と共にストーム1が待つという大演習場へいく。

この演習場はフォーリナーから得た技術を使って作られた大きなドームで、

市街地マップの10キロ平方メートルの戦場が内部にある。

空や空気感は、現実と同じく設定されながら建物やドームは、例の技術で作られ超固い。

だから非番になつたストーム1達の遊び場となつてている。

この遊びのおかげで、ドームの耐久力を調べそれを強化していくと
いう研究チームすらある。

これは宇宙転移する物体が多きれば大きいほどエネルギーを必要
とし、

色々な問題を引き起こす為だ。

そして、それを防ぐのが目的となつて活動している。

「ストーム1！それにオメガじゃないか！」

ここにて戦争の英雄が終結した。

全員EDFのアーマーを着ている。

しかし父親世代の生き残りは、前々回のEDFアーマーを着用して
いる。

その為か、若干分かりやすい。

「お、来たな。俺は特殊遊撃隊ストーム1つて、知つているか」

「自分は特殊戦略群オメガつと。一応様式美だ」

「私あ、局地戦闘群レンジャーツと」

三人はそれぞれ、やばい力を持つてゐる。

主にアーマーがやばい。

今のはアーマーが要らないくらい、マザーシップと現地人に頼つ
ているから表示しても意味がない。

一応、APは390なんだ。

お父さんは、300万位。

オメガやストーム1は、おおよそでしか伝えられていないけれど、
GG自爆戦法で10回撃つて回復が1必要というだけもの。

しかし武器のレベルもあるので、その10回撃つのにどれぐらいの
被害になるのか、想像が付かない。

いや、前も見たことがある。

「そんじや、中に入つてミッショント行おう。ミッショント設定は『煉
獄』だ」

『煉獄』？業火や烈火は聴いたことがる。

私は武器を携え、マザーシップの援護がない中、お父さん・ストー

ム1・オメガ1とチームを組む。

まず最初に出現したのは、大型輸送船だ。

輸送船は回転して巨大生物を投下し始めるが、建物が邪魔して攻撃できない。

そこでお父さんのスタンピードが役立つた。

しかし『スタンピードXM-1』と違つて、拡散・弾数・威力がけた違ひだ。

リロードも終わつてゐる。早いなあ。

「結城父よ、それでは遅いぞ！やはり、戦場に華がなくてはなあ！」

そうやつて肩に担ぐのは、長身の砲台。

太陽光を反射しているその銃身は、どうみてもやばい代物としか思えぬ。

『Oジエノサイドガン4・1-17』を食らいやがれ！」

トリガーを引いた瞬間、私の意識が飛んだと思つたら体力が195になつて復活した。

其れと共に、周辺の敵と建物が消えていた。

「息子よ、無事か!? ストーム1、やりすぎだらう!?

「ハハハ！やつちまつたぜ！」

まだ煙が空中に残つてゐる。

どんだけやばいんだ……？

次々にレーダーに出現する赤い点。

そして足元から、蟲の巣が盛り上がりつてくる。

私は緊急回避してその場から離れる。

すると、地面から糸が貫通してきた。

「うわ!!」

「レタリウスのせいだな！」

「待てストーム1。自分がやる」

そういうつて、『特製フュージョンブラスターZD-98』を使って、

巣を溶かした。

圧倒的すぎるが、徐々に敵が増えてきた！

見たことのない敵やインセクトビルが、乱立しアースイーターもで

てきた！

私はステイングレイを使って、アースイーターのコアや砲台を落として行く。

赤点はレーダーを真っ赤にしてしまって、どうなっているのかわからない。

ただお父さんの『OスタンピードXM-100』『OFORK-X20-38』『OプロミネンスMA-99』が、私の周囲を安全にしてくれているのが分かる。

オメガ1は、『特製フュージョンブラスターZD-98』『特製ノヴァバスターZD-76』

『特製零式レーザーライフル-100』を使用。

オメガ部隊にのみ許された特殊で高価な武装。

大取のストーム1は、『Oジエノサイドガン4.1-17』『Oアルマゲドンクラスター4-5』『OライサンダーZ-100』を使用している。

「ヒヤッハアアアアア！戦場は地獄だぜ！虫けら共、人間に立てつこうなんて、いい度胸じゃねえか！」

「ストーム1、西からマザーシップ5機だ」

「機種は？」

「3」

「なら、装甲をぶち抜けるぜ！」

「お父さん、怖いんだけど」

「大丈夫！息子は私が全力で守るからさ！さあ、武器のレベル上げをしていこう。

私がみねうちをする。それを撃破していつてくれ

「わかった」

爆発で吹っ飛んで回復されたり、GGやアルマゲドンクラスター等に巻き込まれたり、

私は手におえない敵の総攻撃に会う。

お父さんのおかげで、武器のレベル上げがなんとも爽快だ。

『ステイニングレイM1—25』と『AF—14—5』は、『ステイニングレイM1—100』『AF—14—100』になる。

これだけやつても、『ステイニングレイM4』以上『ステイニングレイM99』未満だ。

『AF—14』も『AF—19』にすら届いていない。

ただリロードが0・5秒で、射程距離が500Mである以上完全にレベル上げが無駄ではないことが分かった。

これだけでも非常に有用な情報だろう。

私はドラゴンにかみつかれ、アルマゲドンクラスターにエリアルされてぶつぶつされる。

こ、これで二回目。

リタイアまで後二回。

三回目はブレイン二機を壊したノヴァバスターの誤射。

最後は焦土と化したフィールドで、完全に後方で戦闘をしたので誤射はなかつた。

しかし最後の敵が、数十年前の敵である『皇帝』だつた。

それでもオメガとストームの広範囲殲滅は、一瞬にして防御や装甲を溶かした。

人間戦略兵器とか言われているらしいが、本当のことなんだなあと真に受ける。

「よくぞ耐えきつた！これで、結城君の功績もうなぎ上りだ！」

「あ、あんまり嬉しくないです」

「まあ、殲滅は私達に任せなさい。君は君でもう一つの信念があるらしいね。

若い者は理想に向かつて突き進むのだ、少年」

俺と言っているストーム1は、私の為に畏まつて言つてくれた。やはりどんなに戦闘狂でも、我々の希望でしかないんだ。

そういうえば主任が、ストームチルドレンというストーム1が直々に育てている部隊があるらしい。

化け物が化け物を生み出すことは確定なので、本部でもストームたちを含めた者をどうにかしようとする動きがみられるとのこと。

それはさすがにやりすぎだろうと思ってしまうが、

そんな難局も打破してしまいそうでなんとも難しい先輩達だ。

そういえば私の理想というより夢を語つておこうか。

今フォーリナーは敵だ。

融和とかそこらへんは考えていないが、フォーリナーの本拠地を見つけ

どのようにして地球への侵略へと相成ったのか。

その理由や技術推移を見てみたいと思っている。

そこでフォーリナーを集め、彼らによる波長を使って本拠地の特定を行おうと思う。

何せマザーシップが電子工作で簡単に操れたんだ。

ならば、相手も同じ土俵であることが分かる。

今ではどちらが上か分からぬが、この世に壊れないものはない。だから戦力でいえば、私達の方が有利だろう。

「結城、此処にいたんだね！出動だ、現場はまた大荒れみたいだし、ちゃんと整えて行けよ？」

「解りました。では、功績を使つて、強化します」

勿論仕送りはするさ。

さて、今回マザーシップに、『飛行ビーグル5—1』の射出機能をつける。

これで元々の『飛行ドローン5—1』と二つの機能がついた。

因みに、今後も功績で購入できるが、名前の後ろにあるのが合計射出可能機数。

そしていつも通りの“——”の後ろにあるのがレベル。

それと今まで広域モードだの言っていたが、これらはすべて『最大形態変化3』とする。

こういう配慮を技術技師に頼んだら、アップデートされた。

これでなんとかなるな。

ただ、何時使うかは分からぬ。

近況報告。U=装備中。AP:586

ロケラン:

U『ステイングレイM1-100』

『ボルケーノ3A-3』

アサルトライフル:

U『AF-14-100』

『AF-15-13』

後方支援:

『ルールオブゴッド-4』

フォーリナー:

『マザーシップ-5』(飛行ドローン5-1 / 飛行ビーグル5-1 / 最大形態変化3)

『アルゴ-1』

全体改良:

『最大弾数強化-1』

『リロード速度強化-1』

花壇のてふてふ

「花壇のてふてふ

「主任！なんなんですか!?」

「結城、落ち着くんだ」

「落ち着いてられませんよ！」、これが本当だとしたら……」

「大丈夫だ。少なくとも知的生命体だと情報量が多いから、ソイツは壊れると聞いた」

おはよう！今日もいい天気だな！つて、そうじゃないんだ。

実は今日、EDFのフォーリナー研究チームが、新たな発見をした。それはフォーリナー全ての神経節や思考を行う場所に、フォーリナー本部から送られてくるであろう命令を忠実に行わせる

0.0001ナノミリメートルの素粒子基盤が見つかった。

これは今後、F, oreigner因子と命名されることになる。

このF因子は小さいが故見つかりにくく、今まで発見されなかつた。

其れは非常に機密性が高いが、逆にその規模の小ささから単純な指令しか出せなかつたのではないかという指摘がある。

実際敵か味方かの判断しか行わせないで、後は本能とプログラムに任せた行動を取らせたんだと思う。

実際ブレインから採取した数多の波長を、疑似的に作り出して植民地化した巣の蟻に短波を流したところ

0で行動せず1で付近にいた隊員を襲うか巣から出ようと活動し始めた。

ヘクトルやエルギヌスも、この短波により行動を大きく変化させた。

こういうことは確定的になつたんだが、問題はこれが害虫共全ての脳に入つていることだ。

もしこのF因子が、他の星の生物の脳を支配したり人間まで支配す

るようになれば……。

早急に探しして殺さなければならぬ。

私は夢がある。それでもそれはEDFから支給されるものだけ。故に私は心置きなく、奴らを殺すことができる。

そう思っていた時が私にもありました。

常に時は経過し、物事は進化していく。

創造者がいればいるだけ、全ての事象現象は加速しこの世に新たな常識をつくる。

この事を忘れていました。

その結果が主任とテンションの高い会話である。

実は私が一度行つた事がある世界で、その世界の生物からF因子の検出に成功と共にEDF内に驚愕と絶望の聲が響き渡つた。

私も非常に驚いている。

いや、別に一度行つたことがある世界に対してもなく、フォーリナーの進化に対してである。

普通に侵攻すればいいものを、そのように痕跡を作りまくるのは如何なものかと思う。

まあいいさ。私の血肉になりたい奴らがいるんだ。
殺す。

「そうだ、結城。帰つてきてからでいいから、ちょっと話があるんだよ」

「解りました。では、任務へ行つてきます。技術技師さん！」

「ああ、行つて來い」

私はその世界へ向かつた。

「うわあ、キメエな」

「花騎士を見て何言つてんの『蠍火』」

「ああ、それで固定化したんだ」

何がキモイのかというと、同じような容姿をした花騎士が団長と云われる人物と共に

そこらを歩いているからだ。

この現象については、花の力を充分に自身にとどめ切れていないみじゅな花騎士が、

その花に選ばれることにより発生する状態だと言われている。

彼女らも個人的な事情や才能があるので、しようがないのは分かるが同じ顔でうろつくな。

気持ち悪い。

ただ個別の性格や仕草があるので、一応見分けることが可能らしい。

「それで団長。どうなんだ？」

「残念ながら、功績がない君の言葉は信じられないんだとさ」

EDFの紋章を見せても、効果があるのは本人の認識程度。

だから功績という事実の数字が必要な場合は、上手く誤魔化せなくなる。

「そつか、それは残念だ」

「でも、僕らが考え出した戦闘形態は、数に対し質で補うために行っている事。

そこで物は相談なんだけど、蠍火の功績の為花騎士を率いてみないかい？」

「え、いいのか？」

「良いんだよ。僕らの命の恩人だからね。

僕らの戦闘形態は、国家毎による力量の見せ合いである大会の時に輝いたんだ。

おかげで僕は連合国家の元帥になつたわけだしね

ブロッサムヒルにあるフェリア花園内園の街のカフェテリアで、お互いに密会ではないがお話をしていた。

団長は以前の戦闘の功績で、ブロッサムヒルは勿論他の国家の軍事指導を行ながら、

他国と連合を組みその連合国家の軍を総括する元帥になつたんだと。

ただ前のように大規模な戦闘はなく、局所的な小競り合いばかり。

そのため元帥職も、基本的に暇で平和であることがあれらしい限りだと団長は笑顔を見せている。

「平和つて……平和は戦争と戦争の合間で、準備期間だ。

この小競り合いも害虫による、戦力やその戦術・戦略に関する道の把握なだけによる逐次投入かもしれんぞ？」

「大丈夫だつて。この孫子の兵法があれば、万事大丈夫だから

あ、ダメなパターンがきた。

これは存亡の危機に陥る可能性が高い。

やはり花は花で、日和見な性格が多いのだと気づかされた。

この意識を改変させるには、私がこれから育てるであろう花騎士の意識を戦時体制に移行させなくてはならない。

私はこの世界に来る事が絶対であるように、使命付けられた瞬間に感じた。

この後の予定はリリイウッドという国で、連合国家として共存共栄の祭典を開く中元帥による演説をする仕事

がある。またこの式典が終われば、リリイウッドで連合国家所属の団長として登録する。

そしてブロッサムヒルに舞い戻り、その団長としての証を証明書として提出。

そこで初めて、リリイウッドとブロッサムヒル出身の花騎士を、配下・部下として任命できること。

ただ相手も花の力を手に入れているとはいえ、中身は普通の人間なので扱い方を間違えると縊り殺されるらしい。

これを防ぐには団長に与えられる『世界花』の恩恵で、花騎士の調子や好感度を視覚化できるのでこれ等の要素を利用する事。

他には昇進システムがあるので、それを使つて昇進させていくことが肝要なんだとか。

この昇進は佐官とか大将とか大尉というものではなく、勲章の星の数で決定される。

形でもそうだが、実際は見た目の方でも変化が出てくること。

☆1／☆2／☆2・進化／☆3／☆3・進化／☆4／（略）／☆5
／○／☆5・5分咲／☆6／

☆6・進化／☆6・開花／☆7・満開。

と上記のようになる。

この話をカフエテリアからリリイウツドへ行く道すがら話された。道中、花騎士に見守られながら、桜等春に咲く花々を見て歩いた。非常にきれいに見えるが、この連合国家は四季が土地ごとに存在しているため、

この花々が何の為に咲いているのかわからなくなつた。

いや花騎士のシステムを作り出したときから、このように咲いているのがもしけない。

元々花というのは、自身の種を維持・繁栄させるための物であり、『咲く』事自体がそれの手段でしかないんだ。

だからこの手段が継続されているという事は、実際の目的が変更されている可能性が高い。

やはりというか、これしかないんだが……団長の言うように、知名度や花騎士へのエネルギーを与え強化するという『目的』に繋がってしまう。

実際そななんだろう。

このブロッサムヒルで一番咲いているのは、桜や梅だ。

梅の方が低木になつてているせいか、遠見や上空からだと全く見えない。

それでも近くをみると、桜・梅・アネモネ等が周辺によく生えてくる。

この認知度・世界花のおかげで、サクラやウメが強いのが分かる。

「蠍火、そろそろ国境だよ。

ここら辺の敵は強いから、僕の花騎士で対応できないと思うんだ。
だから、もしもの時は……」

「なるべく援護しよう」

まだ仲間になつていない。

私に敵意を向ける虫だけ片付けよう。それ以外は無視する。
わざわざ功績の為に、便利屋扱いされる気にはならない。

それとこの世界は虫への対処が上手だ。だからモノリスなど渡さ
なくとも十分渡り合つていけるだろう。

私達は国境を超えていた。

EUの様に関所があつて、簡単に所属国家の書かれたパスポートを
見せれば通ることができる。

しかし通ろうとした瞬間、花騎士である二名の者に行く手を阻まれ
る。

「すみません！害虫が出現しました。今から掃討に移らせていただきますので、此処にてお待ちを！」

「害虫だとよ。いけよ、元帥」

「将の将だから、行かない方が無難。寧ろ足でまといになつちやうよ」
暢気に話していると、目の前で粉雪が舞い散り周辺の花騎士が全て
倒された。

これにより関所付近の花騎士全てが投入された。

しかしこの関所からリリイウッドへいくと、花びら舞い散る光景が
なくなり一気に夏模様になる。

ここら辺の大地を計測してみてほしいな。
どんな気候なのやら。

「ちよつと！花騎士がやられてるじやない！？」

団長も戦闘準備しないと、やられるわよ！？」

「わかっているよ、なのは」「
「なのはじやなーい！」

「えーと、菜の花でえーと」

団長のくせに、仲間の名前を忘れているな。

「ああ、アブラナか！」

「しつかりしろつての！あんたがあたし達の団長なんですよ!?」

「わかってるよ。それじゃあ、戦闘をしようか」

ワレモコウ・アブラナ・セントポーリア・ギンランが、戦闘状態に移行した。

団長は後方から全員に指示を出して、敵と戦闘を開始させる。ただ戦闘は見るもつまらない。

4人が並んで、頭上にいろんなアイコンが浮かんでから接近戦を開始した。

一人ずつ攻撃していく。

ただ敵の方が強い。

敵の名前は分からぬ筈だが、明確に『エーヴィヒデモン』と頭上に書かれている。

「強すぎるです？ 戰略的撤退、やむなしです？」

「くつ、認めたくないけど、これはまずいわ」

「久々の、大ピンチ」

「押されているな」

「孫子の兵法が、全く役立っていない!?」

これはあれだ。世界に縛られるという奴だ。

しかしフォーリナーが出現したときは、自由に行動出来た。

というのであれば、敵か味方にEDFが加われば団長達は自由に行動ができるのか？

私は今回、『ボルケーノ3A—3』を持つてきている。

流石にステイングレイだけじゃ、火力不足に陥ってしまうからなあ。

武器のレベル上げもそうだけれど、なにより仕送りできないのが辛い。

お母さんやきょうだいの皆さんに、お金しか融通できないというのはかなり歯がゆい。

だが害虫駆除しか能がない私に、どのように手伝えというんだ。

だから無駄に仕事を増やす様なことはしないで、投資や生活の安定のために仕送りをしている。

これが最善なんだ。私に悔いはない。

そうだ。言い忘れていたが、功績により手に入れられる資金で武器のレベル上げができるが、このレベル上げに使用する資金は結構高い。

だから資金による武器のレベル上げは止めておいた方が良い。

そうしないと、ただでさえ高レベル武器の購入にかかるのに、こんな無駄な投資は自分の為にならない。

とにかく今は制圧射撃だ。

『ボルケーノ3A—3』で、敵の蝶を爆炎に染め上げる。

蝶々は何度か羽ばたくと、逃げるよう飛び去つて行つた。

私が参加すると、戦闘する彼らの布陣に乱れができた。
此れで確定した。

戦闘にフォーリナーやEDFが介入すると、世界の制限が解除されるという事だ。

私は思う。

これを使えば、宇宙に広がるフォーリナーを餌に引き寄せて、その間に狩るという釣り野伏せができるんじやないかと。
そうだな……まだそんな世界に到達していない。

だから見つけたらやつていこうと思う。

「へえ、日和見な奴かと思えば、役に立つじゃない」
「圧倒的後方火力支援？モコウ、お払い箱？」

「中々やるじゃない」

「私達だけでは無理だつた。ありがとう」

団長の騎士さまに感謝されることになった。

峰内できないから、こうやつて有用性が上がるるのは良い事だ。

「そんじや、行こうか。ようこそ、リリイウツドへ。

そして一番賑やかな、『白百合街道』だ」

戦闘のおかげで閑散としていたが、都心に近づいてくるとにぎやかな人の通りになっていく。

そしてこの国家の世界花といわれる国花に近づいてきた。
更にいろんな服装の団長や色んな花騎士が、所せましと駆けまわっている。

これから起ころる祭典の準備なのだろう。

「それじや、本部へ行つて団長登録しよつか」

「了解。まあ、どんなやつが来るか、帰つてからのお楽しみだな」

「そだね。じゃ、つぎの祭典の準備があるから……一人で行ける?」

「大丈夫だ。それに、行つてみたいところもあるしな」

「わかつた。じゃあ、新米団長として、このマント着といて」

「OK」

というわけで、冠位十二階もびつくりな鈍色マントを羽織った。

私は団長達を見送つた後、この国を散策する。

今一番勲章が多く、花の力を強く受けているのは、サクラ・ウメだ。

同じ顔がたくさんあるが、ここは簡単におちないだろう。

私は巡り廻つて。どんな騎士にすべきか見るが、ピンと来なかつた。

「もし、そこのお方」

「ん?なんですか?」

私は道すがらおばあさんやそこら辺に居る兄ちゃんから、この国について色々聞かされた。

新米団長の羽織を着ているからだろう。

こんな状態の中、とある人物によつて私が決めるべき花騎士が決まる。

「花騎士の作り方?」

「そうですよ。というわけで、今日は試験的に君にこの花を渡します。

帰つたら自國で育ててみてください。きっと良い花だと思います」

手渡されるのは、『アプリコット』。

どんな花騎士になるのだろうか、フォーリナーを効率的にぶつぶつしてくれるのだろうか。

EDF隊員なのに、団長としてわくわくしてしまった。

まあ、教育方針に従わなければ、烈火の中に放り込むがね。

「ちょっとアンタ、どこいってたのよ!」

「散歩だ」

「はあ? こんなクソ忙しい時に、そんな暢氣でいられるわね」

「そりやあ、部外者だしな」

「とにかく来なさい。来なかつたら、あたしが怒られるんだっての」

「了解」

私はアブラナに連れられて、そのまま式典会場へ足を踏み入れる。この雑多な雰囲気の中、種を落としていいか確認して、元帥団長の部下の隣へいく。

「興味ないのは分かるが、寝るな。寝るのが一番失礼にあたる」

「流石にわかっているさ、ギンラン。

それにこの国の団長に仕事でなるんだ。気を抜いたりしないさ」「それならば良し」

私達人間と花の力を得られる花騎士は、その式典を演説や女王の言葉を聞く。

その時、レーダーに影が映る。

「む、敵か」

「どこよ!」

私は隣にいるなのは腕を握つて、その場所を指差す。

「は!」

「マザーシップのご到着だ」

此の祭典に出席している全ての人物が、上空を見上げ戦慄する。そこには見たことのない銀色の光沢をS pecular表示している奴がいた。

そいつは十数年前に地球を襲つた先遣隊、マザーシップとキャリアードだ。

更に周囲には、数多の見たことのない害虫が飛翔している。

『ワレワレは、キサマラに宣戦布告する』

名前表記は、『破壊ヲ齎ス者』だ。

そいつは肉体を紅と黒に染め上げ、圧倒的強者としてその場に君臨する。

『猶予期間は、1年のみ。セイゼイ抗ツテ見テクレ』

奴らが飛び去る時、キャリアー5機がハッチを開き何かを投下する。

ヘルメットの高倍率拡大を使い、其れを見ると投下したのはクモや蟻共だつた。

会場外から湧き上がる悲鳴。

この瞬間大混乱に陥る。

私は皆を置いて、ジャンプする。

そしてあたり判定を使つて、この人の海を渡り敵の下へ向かう。

式典会場にある壁を乗り越え、建物の屋根へ飛び移る。

見えるのは蜘蛛の糸と蟻の蟻酸攻撃。中々良い被害を与えていない。

そこで我々の出番だ。

蟲共が良い餌に群がつて いる間に、難ぎ払う。

EDFは地球も守る組織。人間や現地民の命・財産・権力・文明を、地球の為に破壊する。

これは優先事項である！

『ルールオブゴッド—4』発動！

扇状に白い光線が発射され、リリイウツドの城郭都市内部に存在する文明・財産・命をフォーリナーからこの国を守るため破壊した。

「やつは、戦場は地獄だな！」

「ちよ、何してんのよ!?」

「おお、来たかなのは」

「ア・ブ・ラ・ナだつて、なんども言つてゐるでしょ！」

「それよりも、楽しい殺し合いに発展した。行くぞ！」

アブラナを連れて、戦場へ赴く。

周辺が良い素材や燃料に恵まれてゐる為、火災が冗長されている。うむ、よい山火事だ。

これで奴らの進軍を止められるだろう。

『AF—15—13』で、至近の敵を排除しつつ更に敵を投下しているキヤリアーに弱点攻撃を敢行する。

100M上空にいるので、普通の花騎士だと届かないもよう。

流石に5機は骨が折れる。だがそれが楽しい。おい、もつと戦争しようぜ。

私はあの『煉獄』を味わつてから、戦場が生ぬるく感じてしまつていた。

別に致命傷は受けないが、攻撃手段が私しかいないという状況がひどくもどかしく感じてしまった。

勿論中々落とせないと、花騎士が中距離にしか長けていないという状況にも歯がゆさを感じている。

近距離戦闘を見ているが、一番勲章の多いサクラが蜘蛛二匹に糸で絡めとられ食われている様を見てしまう。

彼女等は恐怖におびえ腰を碎き尻もちをつくか、失禁するか脚を震わせているかのどちらである。

抵抗している素振りを見せるが、近距離から蟻酸を食らい己が融け

る痛みに発狂する様は痛快である。

痛いか苦しいか。其れに悩まされながら、EDFは進化してきた。
そう、大量の犠牲者を出し、進化と共に引かぬ精神を持ち抗つてき
た。

EDFの働いている組織の人間は、最上級だ。

ああ、司令部は罠であり敵だ。絶対に指示は聞かない。
とにかく今は恐怖に打ち勝つか、それを受入れ己を正当化するかだ
な。

それができれば、後は気合でなんとかなる。

アーチョットガン持つてくれればよかつた。

相手の体力に、こつちの武器の攻撃力が足りていらない。

ん？ ビークルやドローンを出せつて？

馬鹿いうな、今後こいつらが謎の勢力に頼つて生きていくようにな
るんだぞ？

私もこいつらの為に肉壁になるなんて嫌だからな。

共に出血を用いるのであれば、共闘を考えなくもない。

今の私は確実にフォーリナーと敵意を向けてくる害虫しか倒して
いない。

そこは契約と盟約なので仕方がない。文句なら敵に行つてくれ。
F因子が悪い。それだけだ。ん？ 害虫もフォーリナーなのか？

「フフフ、ハハハ」

「ど、どうしたの？ 頭でもうつた？」

「いや、大丈夫だ、なのは」

「だから！ つああああ、もう！ それでいいわよ！」

「よし。では、突撃する！ アブラナは、私が攻撃した敵が怯んでいる内
に殺してくれ」

「わかつたつての！」

敵がF因子に侵されていることも考慮して、攻撃を受け四肢欠損し
融けている花騎士も殺していく。

勿論介錯してやつて、痛みから解放していると後ろにいるアブラナ

に言いつけて置く。

よし、これで存分に殺せるな。

え、F因子に侵されている確証はつて？無いに決まっているじゃないか。

其れに戦争は、疑心暗鬼で殺すなんてごもつともであり日常茶飯事な事なんだから、

20XX年まで来て一々そんな事で一喜一憂するほど人間は戦争していない。

だから戦争は無慈悲なのさ。じゃ、行こうか。

「た、助けグフツ」

「ごめんなさい、サクラさん」

「次だ次！一々目の前の現実を見るんじゃない！未来の幻想を見て、今を生き抜くんだ！」

「本当、戦争従事者がいて助かつたわ」

孫子の兵法を読んでいるだけあって、戦争従事者・従軍という言葉がでてくるのはさすがである！

素晴らしい！これこそ精神的闘争心！団長は見事配下に、本能による生存能力の表面化に成功している。

EDFもこれは集団内で開花させている。

しかし戦争が終わつた今でも、その命を失うという状況に消極的にならないよう、

本能による抵抗を行うように訓練させている。

素晴らしいなあ、本当に！

君たちも結局は人間だつてことがよくわかったよ。

実際覚悟や花騎士として逃げた者は、花の力や加護が受けられなくなつて一般人に変化している。

多分花言葉関連だろう。

本人が花の力を受け入れると、花の花言葉通りの性格になる。

その性格を本人の思考が、潜在的に拒絶すると引き起こされる花騎士乖離現象が上記のように、花騎士から一般人に変化するという奴だ。

一般人（市民）は、餌だ。

逃げる餌は、良い撒き餌だ。立ち向かう餌は、悪い餌だ！死ね！

「カハツ!?」

「ちよつと!?」

「タゲ取りに邪魔なんだ。お前は死ね。それに、一匹しか連れていなければいいじゃないか。

無能確定。じやあな」

「こ、国民になんてことを……！」

「これは戦争だ、仕方ない。アブラナ、復唱するんだ。戦争だから仕方ない」

「仕方なくないわよ！」

「じゃあ、自分の後ろに団長がいて、目の前に敵がいる。

敵は突撃すれば勝てるかもしれない強さ。しかし敵は団長狙いで団長は弱い。どうする？団長を助ける？」

「準騎士でもわかるわよ、突撃するわ。どうせ逃げられないし、時間稼ぎすればだれか来るから」

「自分で何とかしようってか？いいね、それはいい考えだ。

まあ、甘えるな馬鹿垂れとも言えるか」

「どういう事よ」

私は『AF-15-13』で周囲を制圧・鎮圧することに成功。追加でくる援軍にそこらを任せ、他の地帯へ侵攻することにする。他の場所は害虫に溢れている。

虫は花の受粉を助けると言われるよう、そういう行動を見つけるが……隙だらけ過ぎて欠伸ができる。

「ちよつと、あたしの質問について、キモツ!?」

「これが害虫共の本能だ。F因子は中々浸透しているようだな」

「確かに花騎士は、花の力を得ているけど……」

「其のが狙いだ。繁殖力を高めるために、人間という豊富な資源とエネルギーを使って更に花を侵蝕できるよう、耐性と量を盛つて制圧する気だ。

本気だな、奴ら」

「ちよつと、本気つて……まだこれ、本隊じやないの!?」

「……知らんがな」

危ない。

状況が状況だけに、言つてしまいそうだつた。

本隊がどうのこうの言つているが、ぶつちやけ戦場にいる虫ども全て潰せば本隊も何もない。

それに結局どうしたつて、本丸とはぶつかるわけだしな。

周囲の蟻や蜘蛛、他の害虫が花騎士を中心に襲つてゐる事を確認。よつてアブラナを前衛に仕立て上げ、『AF—15—13』で護衛する。

『ルールオブゴッド—4』を再度発動。

これにより敵勢力の減衰を確認する。

長い間戦い遂に3時間で、全てのキャリアーの撃墜と虫共の撃破に成功した。

『我々の初撃に、コレダケ食ラウとは……。ククク……

世界を制スルのは、我々だ』

そういうつて、『破壊ヲ齎ス者』はマザーシップと共に去つていった。

今回の戦闘だが、私が介入することによつて花騎士本来の強さを發揮できなかつた事がわかつた。

そうあの前衛二人、後衛三人の位置固定戦闘だ。

これができなかつた事で、慣れないアクション戦闘を行うハメになつた彼女らは苦戦を強いられた。

元帥團長は今回の戦闘を今後とも継続して行う事ができれば、勝機は十分あると指摘している。

しかしそれを行うには、EDFの介入が必要になるのだ。
どのようにEDF介入の形を作ればいいのか。それはまだ分から
ない。

其れに今回のような事が起きてしまっているので、早急な軍備や軍隊の再編成・再配置を行わなければ、敵に良い様にされてしまう。

今後F.O.Kの世界に縛られるのか、EDFの世界に改変されるのか。

このどちらかになる事で、世界の行方が変化することになる。

「蠍火、何か方法はないの？」

「分からんな。EDF世界のフラグを、此方になじませようとするとこの世界の崩壊につながるかもしだれない。

だから無闇矢鱈に改変するのはよくないぞ？」

「こつちが頼んでもいないのに、救援なんてするからこうなつたんじゃないか！」

「弱点が固定されている敵に、外部から攻撃しても止まることはない。

増援を増やされて詰んでいる筈だ。それに我々はEDFだ。

害虫はともかく、フォーリナーは我々の敵である。見過ごすわけにはいかない」

「それが迷惑だつて言つているんだ！蠍火のおかげで、本来の優位を覆すハメになつたじゃないか！」

「勝手に介入せず、見守るだけでいいじゃないか！」

「私が介入する前から、自由闊歩になつていた。

結局EDFのように、フォーリナーも世界基礎の改変を行つたんだよ。

だから私達がそのように糾弾されるいわれはない

しばらく沈黙が貫かれる。

この戦闘後祭典式典会場から離れたVIP待機場所で、お互に面会を行つた。

周囲には元帥団長以外に、彼を認めたサクラやウメがいる。

このサクラは冷静沈着で、仲間と共に戦い敵の殲滅を行つた。孤立しているサクラや食われたサクラは、戦線後退を知らないで突撃した馬鹿だ。

私はサクラ達から鋭い目線で貫かれ、他の事情を知らない花騎士からは憎悪を向けられる。

私のせいではないんだがね。

「……50歩譲つて蠍火の介入で、今回が勝てたとしよう。

今後の戦闘だが、フォーリナーが攻めてくればEDFは力になつてくれるのか

「そうだな。EDFは力になる」

「そうか。わかつたよ。では、蠍火に花騎士を率いてもらう。

それと実験として花騎士に力を与えるこの花の種子を、EDFに戻り育ててほしい。実験だよ」

私は『キンギョソウ』『シャボンソウ』と言われる原点種子を貰った。原点種子は色があり、色が濃いほど力の作用が強くなる。

『アプリコット』も、かなり色が濃いので相当力が強いのだと思う。

私はこれをEDFの自室にある制御花壇に植えようと思う。制御花壇は機械操作でどんな風にするのか設定して、自動で水やりや土交換等を行うもの。

忙しいEDF隊員の代わりに、肉体疲労の肩代わりと精神の回復を担つてくれる頼もしい近代装備だ。

「では此れにて解散とする」

〈結城、任務は無事終了した。帰つてくるかい?〉

〈帰るさ。ちよつとやりたいこともある〉

私は帰還した。

「お帰り、結城！蜘蛛980、蟻1340、他5000以上の活躍だ！」

「よつし！これで、お母さんに仕送りできるぞ！」

功績の量に溺れて通常より増した仕送りを見ながら、功績による購入可能物品を見る。

『自室』項目を見て、『制御花壇』を購入しようとすると。

しかしその下に、『制御温室』や『制御田畠』、『制御温室ドーム』が垣間見える。

こ、功績全てを使つても、『制御田畠』すら買えない……だと？

仕方ないので、『制御温室』を購入した。ただ、私の功績が三分の一に減少した。

結構つらいな、これ。

仕方がないだろう？ 今回は、私が勝手に引き受けてしまつた事だし。

そこら辺の責任は被るつもりさ。

武器強化？ できるわけねえだろ！

「O h、キレてるねえ。でも、田畠のすばらしさ……Y ouも感じてくれると思うYO」

隣の温室の主、エアレイダー田中が変な言葉で超うざい。

しかし温室を見せてもらうと、普通にきれいで言葉が出ない。

ステータスが美的感覚に極振りされているのは、隊員としてどうなんだ？

国民の財産を平等に、まつさらな状態にしてしまいそ娘娘から大丈夫か。

「三種類だけDeathCar!? 何とY ou事でShow!」

「それ、やめてくれないか。調子が悪くなる」

「N o N o N o w! でKill! わけないでShow!」

ノーリやなくてナアウつて、言わなかつたかこいつ。

とにかく、アプリコット・キンギョソウ・シャボンソウを植えた。次の任務まで待つとするか。

『秘伝、『Springkler』。見て下PSIY O! MeKnow華Layな姿War!』

「はいはい、わかつたわかつたよ」

まじで、どうにかしてくださいYO……。

近況報告。U = 装備中。AP : 989

ロケラン：

『ステイングレイM1—100』

U 『ボルケーノ3A—11』

アサルトライフル：

『AF—14—100』

U『AF-15-34』

後方支援：

U『ルールオブゴッド-5』

フォーリナー：

『マザーシップ-6』（飛行ドローン5-1／飛行ビーグル5-1／最

大形態変化3）

『アルゴ-1』

全体改良：

『最大弾数強化-1』

『リロード速度強化-1』

他：

『制御温室』（アプリコット／キンギョソウ／シャボンソウ）

ひつかかつた蟻さん

「それで主任。話つてなんですか？」

「おお、そうだつたそだつた。

実はだね、上から話があつたんだ。

それはF因子による戦線拡大を以つて、君には何種類かの星を担当してもらうことになつた

「つまりその何種類の星に、私が固定で赴くということですね？」

「そういうことさ！それにその世界の主人公を見つけて、協力体制を築けば非常に戦力になつてくれる。

何せ主人公は勝つのが仕事だからね。全宇宙の悪であるフォーリナーは、主人公とEDFの敵だ。

だから顔見知りになつておけば、他の隊員が行かなくてもいい。専用の人が行けば、効率が上がる」と上が言つてゐる

「確かに効率的です」

私はさすがと思う。

今はストームチームが、上層で采配を振るつてゐる。

おかげで撤退を許可してくれるし、増援を要請から許可してくれる。

更に状況をしらせるカメラとの連携で状況を把握でき、そこから宇宙転移技術を用いて隊員を一瞬で転移させてくれる。

基本的にただでさえ少ないレンジャーを救出することが、増援として派遣されたEDF隊員の使命である。

犠牲の大小と敵の量と強さで、撤退を見極める。

これは現場に居合わせた隊員へ増援が言う言葉である。

今地球の地下や宇宙転移していくフォーリナーの逐次投入に、EDFが出動して何とかしてきた。

だが他の宇宙世界で敵の勢力を減衰させることも、EDFの役割なんだ。

だからこのように効率的に、その世界と向き合う主人公と仲良く

なった隊員を固定化して送ろうと画策しているのだ。

私が拝命したのは、巨人の世界・花の世界・魔法の世界・魔砲の世界だ。

他にもランダム宇宙転移で、主人公と共に闘ることがあればそちらにも行くとのこと。

「さて、結城！出動だ！」

「はっ！」

真つ黒な深夜。

月明りが周囲を照らす中、私はこの中世ヨーロッパっぽい所に来ている。

私がここに来た理由は、少数のフォーリナーがこの街に潜んでいるという報告を受けたからだ。

レーダーに敵影はない。

本部は間違ったのか？

いや今までレーダー圏外はいつもの事だ。

それに今まで最初からフォーリナーが、現場にいたことはなかった。

た。

基本的に現場ではその世界の住人と会話して、状況の確認と把握を行い來たるべき脅威に備えていた。

だから今私が行うべきは、ここが私が知っている世界なのかどうかの確認だ。

私はフォーリナーの奇襲を恐れて、武器を構えたままにする。

こうでもしないと、冷静になつて周囲に目を凝らす事なんてできな
いと思うからな。

……私は臆病だ。あの時から変わつていない。だが、確實に進歩は
しているはず。

いや、状況と時代が変わつただけだ。外見が変化しただけで、中身

は大それて変わっていない。

結局恐れたまま、前に進むことなんてできないんだろう。

嗚呼、しかし、うつむいたままじやまともに前すら見れず、全うな道すら選べられない。

それだとただの犬死でしかない。気を持つんだ。

満月の二日前の月光に照らされながら、『A F — 1 5 — 3 4』を構えて哨戒に出る。

負へ持つていかれる気持ちをなんとか表へ持つていく。

そんな中フォーリナーの昆虫共の足音が聞こえないかどうか、周辺の音を聞き分ける。

ふむ、何もないな。

あれから30分間捜索するが、何もいなかつた。

私は居ないという事で、上層部に連絡を寄越したがそんなはずはないといつてすっぱり切られた。

居ないもんは居ないんだよ。

仕方がないので、近くにある深夜でも開いているファストフード店に立ち寄る。

「いらっしゃいませ……え？」

「ああ、EDFだ。夜分にすまない」

EDFの紋章を見せて、私の存在をこの世界になじませる。

そしてこの場所とEDFの通貨規格が同じ円なのが幸いした。おかげで簡単に食糧を得ることができる。

暫くはゆっくりさせてもらおうか。

少し経過すると、レーダーに新たな反応が出る。

それは青の表示だ。

EDF隊員？それにしては一人というのはありえない。

私はその場所へ赴く。

場所は郊外。

青点の表示は1だけだったが、急に赤点が7程増えた。

私はすぐに近くの木々に隠れ、『ボルケーノ3 A — 1 1』を構える。

ヘルメットの高倍率で、敵を拡大する。

そこでは男子二名が、とある建築物のステージ前で佇む男に集中攻撃している。

またステージ上には6名の女子が、泡のようなもので捕獲されている。

ステージ中央は女子一名が吊らされている。

他にも泡の前には、ちびつちやいのが3体いる。

ふむ、男子二名は押されている。

そしてあの泡を作り出したのは、あの戦闘している男性だろう。

次に主人公だ。私たちEDFが味方するのは、今後戦略的に有利になる主人公側が良い。

だから主人公を見極めなければいけない。

……どうみても男子二名の方だな。

EDF隊員は以前であれば、フォーリナーを優先的に排除してきました。

しかし今後のため、主人公の仲間として認められるまたは、味方だと思われるための軍事介入は致し方なしという見解がされている。

だが変な誤解を避けるため、私はフォーリナーが出現するまで待つてみようと思う。

そうしなければ、何故助成したのだといわれ、主人公の加勢のため“という醜い応答をしなければならないだろう。

それとレーダー上の7つの赤点が気になる。

その赤点はステージの裏手のようだ。

私は前方ステージでの戦闘を無視し、ステージの裏手へ迂回した。ステージの裏手には、ステージの建築上の設計によりあの男へ敵意を向けながら、嵌っている黒蟻が7匹いた。

有効射程は250M。敵との距離は150M。戦闘音による消音効果で、連射音はかき消されないが……やつてみるか。

私はマザーシップから送られてくる映像を見ながら、連続で大きな音が発生するその時を待つ。

早速来た！少年一人が、容姿が変化した男性に猛烈なインファイトを仕掛けた！

この時しかない！

私は『A F — 1 5 — 3 4』を構え、射撃する。

ステージの表側からは、猛烈な打撃音が聞こえる。

これくらいの大音量ならば、燃焼効率の良い火薬酸化反応音なんて無に等しい。

私はこの黒蟻共を、地獄に落としてやつた。

〈敵勢力1体が、そちらへ向かつて います。敵勢力をレーダーに紫色で表示します〉

クソツ見つかってしまったか……。

だが有能なマザーシップのおかげで、敵がどこからくるか分かつた。

その間に、『ボルケーノ3A—11』に変更して、敵を待つ。

敵は私の右側面から仕掛けてきた。

「魔法を見られたからには、やらせてもらうぜ」

へんな色をした少女が、蹴りをかましてきた。

しかし見てから回避は、訓練通り。

そして爆破範囲から出たので、射撃し目の前の敵を爆散させる。

「お、なかなかやるナ」

そういうと少女は肉体が、軟体であるかのように腕を鞭やら縄として攻撃してくる。
しかしそれはライフルに変更して、射撃しハチの巣にさせてもらつた。

さらに熱い弾丸のおかげで、その肉体の水分を奪うことに成功。蒸発した腕を元に戻そうと再生しているが、そんな隙は与えない。後方へローリングして、ロケランで射撃する。

レベルが上昇しているこいつの瞬間火力はすさまじいぞ？
ロケランの射撃でひるむのを抑えるため、ライフルに変更しながらタクティカルファイアを行う。

お父さんたちは制限なしで、この技術を使えるが私のような新世代の隊員は制限付きでこれを使える。

しばらく戦闘するが、無限に回復しているようなそぶりを見せる。

〈結城！ミッショングリリアしているぞ？帰還しないのか？〉

〈します。しかし、面倒なのに絡まれておりますので、倒すまで安全に帰還できません〉

〈わかつた。じゃ、あとでな！〉

主任からの連絡だ。

やはり奴らだけだつたようだ。

しかしこんな量だけで向かえとは……上もなかなか、人使いが荒いじゃないか。

いやもしもフォーリナーの奴らが、主人公達へなんらかの被害を与えるとふんだのだろう。

ならば仕方がないといえるものだ。

それにF因子のこともある。

これが主人公につけば……悪夢だろう。

そしてその世界は、崩壊へ向かつてしまふだろうな……。

つと私らしくもないな。私はEDFのレンジャー1結城だ。

フォーリナーを撃滅しつつ、その功績でフォーリナーの元軍隊を集めその集団波長か何かで敵本拠地を探るのが目的だ。

フォーリナーはEDFの敵。それ以外は障害物か餌だ。

たまに正義感を出して、市民を守るのは武力を持つ強き者の役目なんていつていてるバカがいる。

しかしフォーリナーを撃破しなければ、その市民が襲われている状況という根底を破壊できない。

私はそんなことはせず、フォーリナーを確実に追いやるために赴く世界のフォーリナーを撃破する。

功績なんざ、その過程で必ず手に入る。

だからいちいちそれを気にして戦うことはない。

さあ気持ちを切り替えるんだ。

主人公やいろんな世界とつながりを強固にし、様々な世界に干渉す

るという方向へ EDF が方針転換しただけだ。

私自身の思惑の転換を強制されたわけではない。

私は帰還しようと、右腕にある腕輪の機能である帰還ボタンを押そうとする。

〈キャリアーの侵入を確認。迎撃してください〉

帰還しようとした矢先、新たな敵を運ぶキャリアーが出現。

ハッチを開いて、黒蟻の投入を開始する。レーダーに映りだす、数多のフォーリナー。

さらにそのフォーリナーは、結構ひどい方向に投下されている。それはステージの表側。きっと主人公も気づいているだろう。

あ、雷。

それと高笑い。

敵と思われた少女はいつの間にか消滅していた。

私はすぐにフォーリナーとの戦場へ赴く。

戦闘が終わつたばかりの少年少女を、そのまま放置することはあまり好きじやない。

大人ならまだしも、これからが全盛期な子供を将来が潰えるような状況に押し込むことは、EDF の対フォーリナー戦線の保持に反する。

即座に行動を移す。

緊急回避を使つて、ステージ前方へ移動する。

そして私は『ルールオブゴッドー5』を発動し、超高度から扇状に白い光線を発射させフォーリナーを効率よく撃滅させた。

しかし効率よく撃滅しただけで、全滅させたわけではない。

撃破できなかつた黒蟻は、ステージにいる子供たちに群がる。

しかし子供たちは、主に少年二人による健闘で黒蟻を漸減させ、遂には全滅させる。

私は子供たちの無事の確認とフォーリナーという存在について、ほ

かにもあるがそれらのことを伝えるためステージに近づく。ああ、
キャリアーは去つたよ。

ステージにある観客席から、少年少女らに向かつて歩いていく。
武装は解除できない。

そのまま歩いていくと、当然の如く警戒される。そりやそうだろ
う。

「私はEDFのレンジャー1結城です。お怪我はありませんか？」

そういうと、警戒が解けた。

そして、少年の一人が代表して出てくる。

「けがは黒蟻にやられたものじゃないので大丈夫です」

「そうですか。実はあれは黒蟻ではなく、フォーリナーといいます。
端折れば、あれは世界の敵です。できるだけぶつぶつか、武力を
持つている組織に連絡してください」

「わかりました。ありがとうございます」

赤毛の少年はその見た目に似合わない口調を見せる。

しかしこの少年、どこかで見たことがあるような……。いや、関係
ないことか。

簡単に世界の主人公に会うことなんて、そう都合の良いことはな
い。

それにその世界にとつての主人公がだれか、それは全く分かつてい
ない。

自分たちで見出して、ともに歩むことしかできないのだ。

「質問よろしいでしようか」

「はい、なんでしょう」

「先ほど結城と聞きましたが、EDFの方は不死身なのですか？」

「いや、我々にはすべての過去・現在・未来・位相・時空を跳躍・転移
できる技術がある。

これを使い、すべての星にはびこるフォーリナーを駆逐している」

「なるほど。ということは、僕のことは知っているはずですね？」

「まあ、そうなりますね。しかしそういうことは、相手が知つていよう

がなかろうが、自分からしなければならない」

しばらく問答が続く。

その間少女らを帰宅させ、巨大な木の下で私と少年が向かい合う。「僕はネギ・スプリングフィールドです。あの時から、幾年が経ちました。

あの時の僕は、酷く弱虫でしたが強くなりました。フォーリナーと悪魔が襲ってきたときより、強くなりました。

お兄さんはどうなんですか？ 僕と違つて数日しか変化していないようですが

「ネギ君。君が何を言いたいのか、今いち要点を掴めない」「つまりですね……」

そういうと彼は魔法というものを放つてきた。

私は回避する。

見てから余裕だ。

彼の戦闘能力は、あの時からかなり成長しているようで、精神的な面が一番変化が著しいといえるだろう。

「僕は強くなりました。しかし、限りある力で、その場を制圧できるほど強くなつていません。僕はお兄さんを超えて見せる」

ネギ君の気合の入った技が、私に突き刺さる。

ミッショング終了した今、EDFに帰るのもいいけれどもこうやって何か目標を得ている者の指標になるものいいな。

APは299に減少する。結構威力が高く、あと一回食らえば死ねる。

「やつぱり強い。あの攻撃で、アーマーに亀裂もなにも入つていない」「まあ待つんだネギ君。私は今仕事中でね。君の武者修行に付き合う暇はないんだ。

今も数多の世界で、数多の星が襲われている。

こうやつている間、罪のない者が殺されている。

これ以上はいられない。退散させてもらおう」

「あ、待つて！」

私は帰還ボタンを押す。

「やあ、お帰り結城！」

「ただいま、主任！」

私は帰つてくるとそのまま食堂に向かい、腹を満たす。

この後主任のところへ行き、ほかの世界の動向を見る。

私が担当している世界は、うまくいっているようだ。

しかしそれでも、うまくいっていないところはうまくいっていないようだ。

例えばエアレイダー田中。

彼は文明と財産を破壊することに関してだけ、非常に長けている。この文明と財産破壊は、規模が少ないほどいいが彼は武器レベルを上昇させすぎて、大破壊しか生まなくなっている。

おかげで立ち直れないレベルで、財政破壊を行つてしまつていて。これにより戦闘を行つた国といわれるその世界の国の経済が、全くといって立ち行かなくなり対フォーリナーが上手くいっていない。この結果は火を見るよりも明らかで、結構な数の隊員が彼の世界に投入されている。

というよりも確実にその世界を破壊しており、軍事バランスすら変化させてるので主人公を把握できないまま世界大戦になつていて。

「あー、やつちまつているな」

「うむ。あのエアレイダーの実力は高いのだが、如何せん破壊意欲が高すぎる。

現場のレンジャーから苦情が相次いでいる

「FFをどうにかすればいいのでは？」

「戦場は地獄」「Inferno」だから無理だ

だと思つた。

いや、普通だ。今までも、そういうのはあつた。というより、FF

のおかげでストームチームは生き残ってきた話がある。

だから今更この事に関してどうにかするということは、EDFの長

所を消してしまいかねないのだ。

そうするとEDFの超技術を目敵にしている各国の大団は、長所を消した瞬間に攻め込んでくるだろう。

FFがない恐怖よりも、無駄に突撃し消耗を強いる無能がいる方が気が楽なのは、攻め込む側にとつて僥倖以外の何物でもない。

それに現在FFがあろうがなからうが、愚か者は戦場でうつぶせで寝たりアーマーによる密造酒になつてしまふだろう。

本当に今更だ。

「さて、次まで時間があるだろう。結城、休んできたらどうだい？」

「はい。お言葉に甘えて、休憩してきます」

武器を携帯しながら、近場にあるソファに座つて次の出撃を待つ。

そしてその出撃は、4分後に舞い込んでくる。

このフロアに響き渡る警報。

だが私はその警報を、主任に言つて取り消してもらう。

「私が担当する惑星ですね。行つてきます」

「うむ。

君に行つてほしいのはやまやまだが、この緊急事態は君にはちと荷が勝ちすぎる。

だから援護のための援軍をこちらで集めておくから、先に殲滅してきてくれ

「そのお言葉は、私以外は無能と言つているのと同じではありませんか？」

「貴殿が行つてている惑星は、どんな状況だとろうと君に一任されいる。

それに現地でのコネクトもあるだろう。だから、貴殿以外は下士官と同等の扱いになつてしまう

つまりその惑星の事情を知つている者の言うことを聞かないと、痛い目に合うということだな。

なにせ一番最初に潜入して、痛い目を見たのはその本人だ。

だからその本人が味わった恐怖を元にした情報を、仲間に与えてその世界の常識をあてはめさせ郷に従わせ、そして本惑星での拗れや摩擦を少なくさせるための措置なんだろう。

「わかりました。行ってきます」

「うむ、では、健闘を祈る」

「らしくないですよ」

「だな、ハハハ！」

私は武装を確認して、宇宙転移場へ向かい技術技師に頼んで現地へ送つてもらう。

「……行つてこい」

「はい！」

さて、面倒な奴らを撃破していくか。

近況報告。U=装備中。AP:1021

ロケラン:

『ステイングレイM1—100』

U『ボルケーノ3A—14』

アサルトライフル:

『AF—14—100』

U『AF—15—39』

後方支援:

U『ルールオブゴッド—5』

フォーリナー:

『マザーシップ—6』(飛行ドローン5—1／飛行ビーグル5—1／最

大形態変化3)

『アルゴ—1』

全体改良:

『最大弾数強化—1』

『リロード速度強化—1』

『最大弾数強化—1』

他：

『制御温室』（アプリコット／キンギョソウ／シャボンソウ）

|

「ネギ！何、あこがれの人にくつく当たつてんのよ！」

「だつて、6年経つてすべてが変化していなーいなんて思わないですよ

！」

9：とつかんする虫さん

私は宇宙転移を行つて担当惑星に来た。

主任は想定される戦線の拡大のために、援軍派遣を確約してくれたが私はそれを待たずに殲滅しようと思う。

理由は言わずもがな、この世界に私たちを利用させないこと。

そして自分たちで上手く駆逐してもらうためだ。

もちろんレンジャーが少ないためというのと、人的資源が異常に少ないからその消費を抑えるため、これ以上の無駄と対価を支払わせたくないという思いがあるからだ。

現在地球外での活動を禁止されているレンジャー以外のエアレイダー・ウイングダイバー・フエンサーは、地球外で行動できるようにレンジャーへ転換されていっている。

しかしそれの能力に見合うように、レンジャーにせずそのままの兵科で他惑星に突っ込ませるという暴挙を今のEDFが行つている。

地球外惑星でそれらの運用は、御法度ではないのかと思われる。しかしレンジャーよりも殲滅力が格段にうえで、別にコミュニケーションを行うのは同じ中身が人間なので別に関係ないというような事になってしまっている。

つまりレンジャーを逆に排除して、例の兵科三種だけにしてフォーリナーへの打撃を有効にしようとする思惑も出てきている。

これらは話さなかつたが、技術技師がヘルメットにメールとしていろいろ情報を出してくれてているので案外わかつたりする。

「またこの世界だな」

私が来たのは、巨人が天下を支配している世界だ。

以前に来た時より三年経過しているようだ。

さらに前と同じ世界線のようで、私が見おぼえある少年少女がいる

と聞いている。

基本的に同じ世界線で、それに対して時空の加速がかけられている存在する力が弱い惑星が事件を生み出しあやすい。

別に前の世界と同じだが、時空の加速が私がない間に行われておりブランクが空いてしまつていると聞く。

この隙間は結構致命的だ。

理由の一つが、以前ネギ・スプリングフィールドに出会ったときと関連している。

それはタイムパラドックスだ。

いや、実際は違うかもしれないが、それに近いことになつていて。時空が進みすぎて、私たちの方が進化していなか中その世界に侵入すると、当時子供であつた人物が大人になつていることがあるという。

だからネギは6年の時を進み、私の目の前では立派な子供として出現していたわけだ。

「うーん。こっちで合つているのか？」

腕輪を渡しているのは、高町なのはと元帥団長のみだ。

彼らはちゃんとした理由でわたしているが、こっちの世界ではだれにも渡していない。

だから主人公格がだれか、この時点で全く分かつてない。

向こうは主人公格関係なく、強いやつ・影響力が強いやつに渡した。だからそれが本当に主人公にあたつていれば、最高に重畠といえるだろう。

EDFの指針には反対しないが、レンジャー職をなくすのは勘弁してくれ……。

私は城壁に降り立つていて、目の前にある町に向かつて歩みを進める。

歩いていると突然、何時ぞや見た巨大な巨人が出現した。いつも通り蒸気を噴出している。非常に熱そうだ。

呼吸なんてしてみれば、のどを焼き切られそう。

しかしあのようないく接型やエネルギー消費型は、その巨体を維持するのにかなりのエネルギーを消耗する。

だからずつと待つていいのだが、相手は巨人。かなりの被害を出してしまうだろう。

致し方ないので、爆撃ぐらいはする。

ロケランを使って、巨人を爆撃していると巨人が何かを投げてくる。

見てから回避して、正体を見てみる。

その存在は私と同じ城壁の上に着地していた。

その存在は鎧のような武装を施された、機械化凶蟲バウがいた。相も変わらず赤い複眼なこつた。

奴は腹を持ち上げ、尻の先から密度の濃い糸を吐き出す。

これは見ずに奴の存在を確認する前に退避していたので、当たらずに済んだ。

しかしこいつらの糸は、こちらの意図を解せず地形無視で射撃していくので非常にやつかいだ。

その地形無視はほかの地形を破壊せず、貫通するかのように何もかも無視していく。

だからその糸に少しでも触れたオブジェクト以外の何かは、一気に体力を失ってしまう。

さすが戦場は、地獄だ。

私は引き撃ちをしながら、その蟲にダメージを与えていく。

微量でも、塵は積もるもの。

確実に損害を与えているようで、あの巨人が忽然と消えるまでにバゴンとかつ飛ばした。

フォーリナーはこいつだけのようだが、下の町に出現していないか見てみる。

そこには結構な巨人のほかに、蟻を確認することができた。

私は飛び降りず、城壁から爆撃する。

〈対巨人組織の分布をマップに表示します〉

さすがマザーシップ、有能だ！

巨人組織を一通り見ることができる。

その中で最も隊員の補充がなされていないところへ向かった。
しかしながらというか、不自然だ。

ここ対巨人組織員は、巨人から離れている。

戦闘が怖いのはわかるが、4人もいて動けないことはないだろう。
動きからして負傷ではない。

三人が集まり、一人がのけ者になっている。

戦場でいじめか？ 餌が餌たり得ないのならば、私が引導を渡してや
ろう。

私はその隊員がいる場所から有効射程で届く最低限である場所を
選定し、

そこから彼ら4人から結構な死角に移動する。

ははは。無能はそこで死にたまえ！

私はロケランで戦場いじめをしている三人に、射撃を慣行する。
するとにんげんとは思えない身体能力で回避しやがった！

レンジャーの跳躍力は、家一階ほど。

しかし奴らは家1・5階ほどの跳躍力をを見せた。

これで私は確信する。

奴らは人間に化けて、内部工作を行う巨人どもの敵だと。
別に確証はない。だがこんなバケモノスペックを拝見すれば、敵と
の内通を疑つてしまう。

だからEDF本部も……おっと、例の三人がこちらに来た。
危険なのでフックをかけた先は、ライフルで打ち壊した。

金髪の男はそのまま地面に落ちるが、死亡は確認されない。
よつてこれで中身がバケモノだということがはつきりした。

奴は地上4.5M付近から落ちたにもかかわらず、腕を抑え頭から血
を流す程度の損傷に終わる。

私はこれを見て、少し笑つてしまつたんだ。

壊れない敵ほど、壊したくなるつていう衝動に等しい。

フォーリナーが無駄に硬いから、爆散させたとき超気持ちがいいのと同じだ。

ヘクトルや蟻は、四肢をぶつ飛ばすと爽快なのもそうだつたりする。

いろいろあつて奴らはどこかへ消えた。

はぶられいやじめられた人物は、呆然とこちらを見上げている。私は敬礼を行い、緊急回避で次の戦場にむかうことにした。せつかくの制空権を無駄にしたくないのでね。

合流はまたの機会とさせていただく。

次に向かつたのは、壁外を見渡せる切つ先のところだ。

どうやら内部では、巨人を襲う巨人がいるらしくいろんなものがぶつ飛んでいるのが見えた。

あれは死ぬ。

孤立無援な今、私が気絶すればだれが私を助けるのだろう。

最悪武器は取れないので、牢獄にぶち込まれそうだ。

兎に角外部へ目を向けてみると、キャリアーが数隻と蟻と蜘蛛がはるか後方で待機しているのがわかる。

あ、動き出した。私は『ルールオブゴッド—5』を要請し、その遠方にいる地上のフォーリナーを爆撃する。

一掃することはかなわなかつたようだが、十分に被害を出すことができた。

蟻共は私がいる壁へ向かつてこなかつた。むしろ壁とは違う方向へ走つていった。

何があるのかわからなかつたが、そこはマザーシップに丸投げしておこう。

この制空権を自ら捨てるのは、自作行為と考えている。

だから今は動かない。

再びマザーシップの主砲を動かすには、敵が足りない。

せめて巨人にF因子が入つていると確認できれば、巨人どもを殺すことができるのだが……。

私は来るべき時のために、外部への出入り口であるところで待つておく。

すると大きな岩を担いだ巨人が、門の方へ向かってくる。
さらにその巨人にほかの巨人が集まってきていた。

私はここで考える。彼らを守るべきか。

EDFはフォーリナーに対する攻撃は許可している。

またその世界の問題は、その世界の住人に処理させるようにしてい
る。

しかしEDFはF因子の発見にともなって、その世界の一般論と結果論でいう敵にF因子が付着した場合、その敵をフォーリナーとして排除することも容認されている。

また過程としてその惑星世界の主人公と邂逅し、EDF側またはフォーリナーを擊破する側に回ることを確約させることが必要だ。
主人公はその場の苦難を仲間とともに乗り越えるため、放つておいても大丈夫だ。

むしろ放つておいた方が、結果的に良い方向へ転じることもある。
だがそのままでは我々の優位を示すことができない。

それではEDFの基本方針から外れてしまう結果になってしまふ。
そんなことになれば、確實にその主人公達をこちらに誘導すること
ができるないし、こちらの優位性を見せつけることができない。

今は一人だから何とでもできる。

むしろ援軍が来れば、どこかのバカが力業を使い、産業時代以前の
経済体系を蔑ろにする可能性がある。

こうすれば相手は意味が分からずとも、侮辱されたことを理解する
だろう。

こうなつてしまえば、この世界で築けたであろう一つのつながりが
完全に断ち切られることになる。

目の前の巨人は、大岩を担いでいる。

ほかにも以前の戦闘で垣間見た三次元機動戦闘を行う組織員が、巨
人を狙う巨人を自身へ狙いをつけさせて誘導している。

ここで放つていいのか？目の前の餌を逃しているぞ？

私はEDF隊員だ。EDFの優位に立たなくてはならない。しかし、ここで介入していいのか？

いや、私は何を悩んでいるんだ？

誰が餌になるかという順序に悩んでいるのか？

餌はあるのに食いつけない餌。その餌は餌たり得ない。

私は自身がえさになるのを拒んでいるのか？

今まであらがう獲物になつていた。だから、ただの情けない餌になりたくないってか？

今の私は餌か？餌であるはずがない。獲物だ。だが、ただ受け身で受け入れる愚者ではない。

私は生態系の頂点すらかみ殺す、獲物だ。

「な、なんだ!?」

「一体どうなっているの？」

私は彼らを襲う巨人に、『ボルケーノ3A-14』を放つ。

再生能力が素早くても、やけどによる細胞を焼かれては再生すらままならないだろう。

そしてそのまま頸椎を焼き切る。

巨人は頸椎をやられたからか、そのまま地面に伏した。

近い敵に対しては、『AF-15-39』が火を噴く。

こいつで頸椎の部分を削り取った。

〈壁外にて対巨人組織員を発見しました。フォーリナーに襲われている模様〉

「救助だ。アルゴと地上制圧可能な飛行ビークルを投入せよ」

私はマザーシップを本格的に戦場で働くのは、今回が初めてだ。

上からの砲撃はキヤリアーの装甲が弾いてしまう。だから、近接支援が適当だと思ったんだ。

次にアルゴは低位置からの射撃も可能で、爆破範囲が狭く入射角も低いアルゴでしかできないことがある。

またビーグルはビームで狙撃し、打ち抜くことができる。ゆえに現在制空権の優位を得ている私たちは、非常に優位に立っているといえる。

空中にエフェクトが入り、アルゴが宇宙転移してきた。アルゴは遠方にいる蟻に向かつて粒子砲を放ち、破壊活動を開始する。

またマザーシップも飛行ビーグルを5機発進させ、問題と化しているフォーリナーに熱烈歓迎を行う。

そして大岩を担いだ巨人は、その大岩を私の足元にある城壁にある出入り口に蓋をするように岩を下す。

蓋をするのを確認した。

その時、なんだか見たことのある人物が壁上に上がってきた。

しかしレーダ上に例の対巨人組織員が、結構な速度で壁に向かつてきているのがわかったのでそつちに視線をやってしまう。

また彼らがやつてきた方向から、フォーリナーがトレインされてきた。

これはまずい。

巨人どもはこの壁に這い上がりにくいだろうが、あいつらはどこだろうが躊躇なく上る。

ここで得策とされるのは、ここを飛び降りること。もちろん壁外だ。

「おい、どうなつてやがる」

いつの間にか対巨人組織員が、私と同じ壁上にいた。

さらに見たことのある人物が、近くにいるのも分かつた。

「私はEDFのレンジャー1結城です。これより、フォーリナーの撃滅に移ります」

「……チツ、勝手にやつてろ。おい、テメエら戻るぞ」

青年は壁上に来る組織員を連れて、壁内へ戻つていった。
壁上に残る人物は既知の存在。

「君は、あの時の？」

「いろいろ事情があるんだ。ここは見逃してくれないか」

私は壁外に見える敵を見る。

飛行ビークルがタゲをとつて時間を稼いでいるが、キャリアによる逐次投入も相まって全く数が減らせていない。
むしろ数が増えている。

「あれは……」

「あれはフォーリナー。私たちの敵だ。君たちには悪いが、ここから先はEDFの時間だ。」

介入すれば、確実に死ぬ。援護しないでくれ

「でも、どうやって向こうに行くんだ？」

私は彼、アルミンから距離をとつて壁外へ緊急回避して落ちる。
「な!?」

私は地面にそのままの態勢で落ちる。バウンドもダメージもない。
普通にスタッツと落ちた。

普通とはあり得ない挙動。しかし、これがEDFだ。

〈結城！援軍の編成が完了した！レンジャー1結城が隊長のレンジャーチーム。

エアレイダー田中が隊長のブレイクチーム。

ウイングダイバー伊東が隊長のバンカーチーム。

フエンサー藤原が隊長のフォートレスチーム。総計23名の援軍

だ〉

主任からそんな通信が来ると、宇宙転移が私の目の前で発生する。

空間歪曲しそこから出でてくるのは、23名の兵士たち。

「H a l o ! 久しぶりDeathNe！」

「初めまして。お話は伺つてますよ、結城さん。私、伊東といいます、よろしくお願ひしますね」

「応、若いの。戦争しようや。儂は藤原、鮮血の甲冑とか呼ばれとる。ようしゅうな」

皆さん、血氣盛んですね。

すぐ怖いです。主に最後のフエンサーの方々。すぐ土気が高いですね。

めちゃ怖なんですが。

私は皆さんに自己紹介をした。いつもの恒例行事なので、さくっと終わらせる。

「これより殲滅します。レンジャーが引き寄せるため突出しますので、皆さんには引き寄せられた敵や漏れた敵を殲滅してください」

皆さんがそれぞれうなづく。

今回の戦闘では強力な兵器は送り込めないということで、エアレイダーは戦車かヘリコプターになる。

そんな中突撃をかます。

「「うおおおおお!!」」

皆さん士気が高いなあ。

私は何も叫ばず、皆さんにタゲ取りをしてもらう。

本当に勢いだけはいい餌だ。これだけ生きのいい餌は、なかなかいなんじゃないやないか？

私は向かってくる蟻や蜘蛛型巨大甲虫に、ロケランをぶちかまし大量を減らしていく。

仲間も勢いそのままに、ゴリアスシリーズで爆撃していく。

たまに後ろを見るが、ウイングダイバー伊東らは『MONSTER』で狙撃しているのがわかる。

フェンサー藤原達は、『ブラスト・ツインレイピア』・『ジャベリン・カタパルト』で硬直キヤンセルやスラスター移動を行い、一撃離脱を敢行している。

敵の攻撃は『リフレクター』や『ガリア重キャノン砲』で、面制圧するところが見受けられる。

エアレイダーはヘリコプターによるクロスファイアや戦車による曲射榴弾砲で、

レンジャー前方にいるフォーリナーを駆逐してくれている。

これのおかげで、功績が蓄積することになる。

接敵の前に、『ルールオブゴッド—5』を発動。

多くの敵を撃破することに成功。

爆散する敵の肢体。心地のいい爆破音が、私の心を満たす。

「行くぞ、皆の者おおおお！」

配下である5名に大声で敵の恐怖を打ち消して、勢いだけで押すよう張り切らせる。

ここからは遠近交えた混戦になる。

糸が取れない状況はウイングダイバーの狙撃銃により、事前に阻害されることになった。

それでも敵のサンダーを食らうのは、ショットガンをまともに受けのと同様に非常にまずい。

実際まともに受けた隊員は、その場に崩れ落ちた。

しかし最大4回まで修復可能なアーマーを持つ私達は、彼らを救助して近接武器で処理していく。

幸い空中にはヘリコプターがいる。

彼らの機関砲は頼もしいの一言で、遠くにいたキャリアーを速攻で撃墜させ周辺のフォーリナーを食つていった。

レンジャーは一塊の時が非常に強い。だから離れないように、常に足を動かして敵を攻撃した。

タゲも一番取れている。

それなのにウイングダイバーやフェンサーの方へ漏れ、一部被害が行つてしまつた。

フェンサーはともかく、ウイングダイバーは一名蜘蛛に食われてしまつた。

あれでは助からない。

まあ仕方がない。EDFのペイルチーム以外雑魚だから。
実際ペイルチームも奇跡的に生き残った悪運の強いだけの無能の
集まりだしな。

よくエネルギーを無駄遣いしたり、蜘蛛にわざと食われに行つてい
るかのような行動をしたり。

まああれは機械の一部にフォーリナーを使つていて、それが自分の
意志で敵に使われようなら死んでやる！の精神で食われに行つたん
だとか。

当時を語る人はそう言つていた。

ストームチーム専属のウイングダイバーは、異常で変態。以上！

あ、レンジャー4も4回目の酸攻撃だ。

あー、アーマーが再生しようとして失敗した。

赤蟻のほおばり攻撃（噛みつき）が、捕食に変化しそのまま食われ
た。

市民とかそういうのは、そのまま連れていかれたんだが戦闘兵は別
のようだ。

やはり一名でも抵抗勢力は消すべきという考えだ。

嗚呼、やはり殺すべきだな。技術はすべて根こそぎ奪つて、奴らに
阿鼻叫喚を見せてやる。

敵を4時間の戦闘の末、殲滅することができた。

レンジャー二人死亡・ウイングダイバー四人死亡・フエンサー一人
死亡・エアレイダー二人死亡。

敵との比率を考えれば、かなり少ない犠牲だと思える。

「レンジャー、ウイングダイバー、フエンサー、エアレイダーチーム。
よくぞ耐え抜いた。上層部から褒章として、功績が1・5倍になつ
たぞ！」

主任からそのように言われた。

私の功績は、蟻ら合計2万を超えていた。

これだけの戦力が投入されたということは、この世界はそれだけ侵略するに値する世界だつたということだ。

これは一大事。

私はこの世界を強く監視するように通達する。

「大丈夫だ、結城。ここはすでに上も目をつけている。

そんなに心配しなくとも、現地の市民と連携をとるつてさ」

それならばひとまず安心といえるだろう。

私は原点種子を見るため、『制御温室』に向かつた。

私はこの場所に向かつたのだが、不思議な光景を見て驚愕してしまう。

それはアプリコット…実を付けた杏を中心に、キンギョソウとシャボンソウが植えられた場所からあふれんばかりに生育していた。

そしてその杏には、たつたひとつだけ不自然に色が違う果実がついていた。

他人のところに入れないようになつてているので、この果実を食われることはない。

だから次にあの世界に行くときにもつていこうと思う。

さて、功績を沢山もらえたので、仕送りと武器強化を行おうと思う。今回の敵だけれども、『ボルケーノ3A—64』に強化されたロケランでも後半3発すべてを当てて三回で吹っ飛ばせた。

『AF—15—100』も有効射程やリロード・全体改良でリロードと最大弾数の強化を図っているが、後半にててきた鎧蜘蛛への攻撃力が全く足りなかつた。

黒蟻も結構耐えてきていて、一体にマガジンを4分の3も使つていた。

これはまだ使えるかも知れないが、今後未知なる脅威のため新たな武装を購入しようと思う。

まずはロケランだが、『OゴリアスD2—1』を購入。

先頭に『O』がついているのは、『O』r i g i n a lだからだ。つまり頼んでオーダーメイドするより、すでに作られてあるオリジナルメーカーを購入した方が安い。

それに私はまだオーダーメイドを頼めるような功績を積み重ねていないため、まだオリジナルメーカーしか購入できない。

今回のゴリアスの特注部分は、威力の増大だ。

通常威力は、1200しかないが今回のOにより3500と大幅に強化されている。

さらに使われているのが徹甲榴弾らしく、一撃で倒せない敵にあたるまで貫通し地面などに当たれば爆発するという効果。

次にアサルトライフルだが、今回はスナイパーライフルにしてみた。

EDFのストーム1曰く、強くなるには最強の遠距離爆発物と一撃必殺の遠近対応武器が必要と聞いた。

だから彼の持つライサンダーZを見習つて、私も『ライサンダー2—1』にしてみた。

なかなか威力が高いが、連射モードも遅い。うまく立ち回れるだろうか？

とにかく爆発で怯ませ、そのすきにライフルをぶつ放すということが肝心か。

私の功績は『O』を買うと、すっからかんになるくらい高いライサンダー2を購入したので、残りはフォーリナーに費やすことにした。

私は今回の巨人の世界で、制空権の優位が如何に大切なのか改めて思い知った。

そこで私は『蜘蛛型巨大生物5—1』を5セット購入した。つまり『蜘蛛型巨大生物25—1』だ。

ちなみに地上巨大生物を購入すると、初回特典でキャリアーを一種類につき一機のみ特別にくれる。

キャリアー自体、転移して出現する巨大輸送船よりも、耐久や速度などが低い廉価品なので無料で配布してくれる。

それにキャリアーもデフォルトだと、宇宙転移装置をもつていな
い。

しかしEDF印があるので、宇宙転移は可能だ。

だが敵として出現しているキャリアーは、マザーシップとともに宇
宙からはるばる訪れてきた。

よつてキャリアーとマザーシップは、転移装置を持つていない。
ゆえに戦力の逐次投入となつて、負けたことになつていて。

実際アースイーターから投入されていることが判明しているので、
転移機能は必要なかつたのかもしれない。

とにかく私は対空要員として、蜘蛛を配置につかせた。

あとは彼らへ何か補助を付けさせねば……。

ふむ、『糸の最大射程+』にしておこうか。

ちなみに購入したのは、『蜘蛛型巨大生物2・凶蟲バウ25-1』が
正式名称になつている。

つまり攻撃能力や対空能力は非常に高いが、走破能力は蜘蛛型巨大
生物の中で一番低いのだ。

レタリウスはジヨロウグモだから、蜘蛛型には入らない。
いや、種類でいえば蜘蛛だが、分類では違うのだ。

さて、私は次の任務まで休んでいるとするか。

近況報告。U=装備中。AP:2736

ロケラン:

『ステイングレイM1-100』

『ボルケーノ3A-64』

U『OゴリアスD2-1』

アサルトライフル:

『A F—1 4—1 00』

『A F—1 5—1 00』

スナイパー・ライフル：

U『ライサンダ—2—1』

後方支援：

U『ルールオブゴッド—5』

フォーリナー：

『マザーシップ—6』（飛行ドローン5—1／飛行バイクル5—1／最大形態変化3）

『アルゴ—1』

『蜘蛛型巨大生物2 5—1』（『糸の最大射程+』）

全体改良：

『最大弾数強化—1』

『リロード速度強化—1』

他：

『制御温室』（アプリコット／キンギョソウ／シャボンソウ）

10：ハチさんのおうち

「主任、突然どうしたんですか？」

「うむ、貴殿に辞令が来たようでな。貴殿の担当惑星に緊急が来なければ、総合時間一週間分の休日が確約されたんだ」「なるほど。では比較的時間進行が同等の世界へ赴いて親交を深めたり、いつたことのない惑星へ赴き新たな友好者を

たててきます」

「うむ。では、行つてきなさい」

「はい」

休日。

私には想像のできない事だ。

なにせ三か月は経過している中、いきなりの休日を組み込んできたのだ。

焦ることはしなかつたけれども、なんというか驚愕した。

そうだな……。

実家に帰つても邪魔扱いされそうだし、あの世界へ行つてみるとしよう。

あの世界は四季色めく花の庭園よりも、危険だと思つている。

服装は戦闘服だ。何時何が起こるかわかつたもんじやない。

それに紋章があれば、基本的に戦闘区域から無意識に退散してくれる認識阻害効果もある。

だから気軽に戦闘服をかなぐり捨ててはいけない。

私は倉庫へ向かう。

10個中6つが埋まっている武器格納庫。

こちらも功績で枠を広げなければ、あらゆる状況に対応できなくななる。

次はこちらの開放を狙つてみようか。

武器はゴリアスとライサンダー2。

こいつらがあれば、大半のことに対して対処できるだろうと思つて
る。

ただまだ戦闘能力を把握していないので、訓練場に向かおうとした
んだけあいにく貸し切られていた。

貸し切っている人の名前は、『飯綱』という人。
どこかで聞いたことがあるような……。

私は宇宙転移広場にやつてくる。

多くの隊員がここから出撃したり、帰還しに来たりしている。
さらにたまにだがほかの世界で友好を結んだ人物を、こちらに連れ
てきていることも確認できる。

なんでもスカイガールズやストライクウィッチャーズといった空戦
部隊の機体を調べ上げ、

それらの長所をEDFの武器や装備に反映させようとしている、と
技術技師さんが言つていた。

「そうなんですか」

「ああ。まだ我々は三次元飛行に関して無知だ。ゆえに、ほか世界か
ら技術の輸入をしている。

如何に国家機密だろうが、我々には確固たる措置がある。
それ相応の対処を行う。それで、どこにいきたいんだ」

「はい、えーと……」

私は技術技師さんに行きたい場所を伝えて、宇宙転移を行つた。

私が行くのは、久しぶりか？
まずいくべきはあの場所だろう。

私の故郷と同じく、ベッドタウンとして栄え発展し続ける海鳴市に
やつてきた。

あの時からどのくらい経過しているのだろうか？
少なくとも10年ほど経過していないと確信できる。

理由は以前立ち寄ったマンション群が、すでに入居可能状態に移行していることから推察できる。

ただ一部頓挫しているのが、廃墟模様を呈している。

そして決まっているのは、『翠屋』へ訪れることだ。

ここへ訪れれば、最初に行うのはシュークリームを購入しほおばること。

やはりここのはおいしい。

あつちのは普通のクリームで手軽な菓子だった。

しかしこちらのは、甘さ控えめでミルクといえるくらい濃厚な味わいを示している。

まさに高級な菓子といえよう。

私はほかのものも注文する。

モンブランやショートケーキを、為替で功績を硬貨交換した『円』で購入した。

「あ、結城さん！」

周囲から変な目で見られている中、明るい声が聞こえる。

聞き覚えがあるが、ユウキという名詞や固有名詞は多く存在している。

故に変に反応せずとも、私に用があるなら私の方へ来るだろう。そしてその人物は私の前に、姿を現す。

彼女はサイドアップツインテールを揺らしながら、快活な足取りで私の席に来る。

「お久しぶりです。あ、座つてもいいですか？」

「ああ、かまわないよ」

手を使つて座つても構わないように、対面の席へ促す。

「あれから何か月経過したんだ？」

「うーんとね、三ヶ月ちょっとかな？」

なるほどこちらよりも時の流れが早いな。

しかしあまり変化した感じは見受けられない。

「あの外来種は？」

「ユーノ君は野暮用。あ、そーだ! ジュエルシードが、やつと6つになつたんだよ」

「ほほう、頑張つたんだな」

「うん! あーでもね、今日を付けてるやつがあるんだけど、厄介な人にわたつていてね……」

話によると時空管理局・なのはさん・フェイトでもない一般人に、ジュエルシードが渡つていって

いろんな意味で取り返せない状況に追い込まれているとか。
まあ、記憶操作すれば記憶の欠如から、いろいろとまざい方向へ流れれる可能性もあるしな。

そこはしようがないか。

「ならば、排除しにいこーカ

「だめ、ダメだよ!」

「どうしてなんだ?」

「だつて、人の恋路を邪魔しちゃ悪いもん!」

嗚呼なるほどカツブルが持つてているのか。

あ? ちよつと待てよ? ジュエルシードは確か、持ち手の気持ちや思
いに応えてやらかすんじやなかつたか?

「人の恋路以前に、未来に起こりうる最悪の可能性を考慮して動くべきだ。

たつた二人の人間なんぞ気にしていられない

「わかってる。でも、ね?」

「知らぬ存ぜぬ。結局赤の他人だ」

端の一席で物騒なことを話しているため、隣の席の人が早急に席を立つて去つた。

いや別に食い終わつた可能性もあるが、隣の席の奴らは平和という甘美な砂糖水しか啜つたことのない学生だ。

だからこちらの血濡れを感じさせる何かを感じて、さつさと去つたんだろう。

「さて、なのはさんも何か食うかい?」

「いいの?」

「子供は年上に甘えときなさい」

「結城さんつて、本当に12歳なの？」

「当然」

ただ周囲に大人しかいないため、彼らに影響されてこうなるしかなかつたと私は思う。

それに私はただの子供であることを捨てた。

いや今でも扶養を受けるべき子供だろう。

だが、この世界はこの世界であつて、私は私の世界の都合がある。だからどんなに子供らしくしろとか、さつさと家に帰れとか言われても知らんとしか言いようがない。

あんたらの常識で価値観を測り、己のエゴを他者に押し付けんなど。

「お待たせ、なのはちゃん」

「ありがと、昌さん！」

私は平和を享受する目の前の少女の姿を目に焼き付ける。

これがいつなくなるかわからぬからだ。

くそつ。似すぎなんだよ、アイツと……。

「どしたの？」

「なんでもないさ」

「なんでもなくないでしょ？」

ほら、結城さんが奢るんだから、試食は大丈夫だよ」

スプーンとフォークが合わさったその銀の匙に、一口サイズのケーキが載せられている。

「はい、口開けて」

「赤ん坊じやない。やめてくれ」

「えー」

「自分で食べるさ」

私はEDFアーマーを着ているが、頭のヘルメットは脱いでいる。

長髪な奴は私しかいない。それで判断がついたのだろう。

ピンポイントだ、全く。

私は匙を持つなのはさんの手を握つて、そのケーキをもらう。

他者に食わせてもらうのは、自身の摂食能力がない時だけに限る。

「ん？ やけにうれしそうだな」

「えへへ、間接キス」

ほほを赤らめそのように言う9歳児。

もう恋愛か。早いな。

「結城さん、ソレ何？」

私の隣を見るのはさん。

私は壁に立てかけている武器を見る。

こいつに指を指し示すと、彼女はうなずく。

『ライサンダー2』、スナイパーライフルだ

「狙撃銃だよね」

「よく知っているな」

「お父さんたちがそういう仕事だから」

そういえばエージェントだつたな。

いろいろ緊急出動があつたから、失念していたな。

「そういえば、結城さんはお父さんやお兄ちゃんに挨拶した？」

「いや、仕事でこつちに来たわけじゃない」

「仕事じゃないの？ ジャあ、なんでこつちに？」

「休暇だ。暇だつたから……」

どういう言い訳にするか。

まあ気楽に行きたかったが、彼女も恋愛に興味があるようだ。

そこで返答を少々変えようと思う。

女性は聴い。

ゆえに言動で相手の機敏を探るのは、容易だろうがほぼ無表情で自身を目的に来たといえどうなるか。

試してやるか。

「まあ、『翠屋』でシュークリームを食いたかったのもあるし、なによりなのはさんに逢いたかったからね」

「え」

「ん？ なんだ。私がただの殺戮マシーンと思つたか」

「お、思つてない、思つてないよ。ただ、意外だなーって」

意外か。なるほどな。そういう印象か。

現地民の印象を聞いておいてよかつた。

親交をより深めるためには、おのれを少し壊してでもやらねばならぬことがある。

どこまで行つても、私はEDF隊員だからな。

「私は友人などいない。年の近い子供もない。

そして平和な世界は、ここしかしない。

だから、一番安心するなのはさんの世界にきて、逢いに来た。

これで十分か？」

「そこまで聞いてないよ！？

でも、うれしいな。私男の子の友達いないし」

む、これまた意外だ。

快活で笑顔でありさらに寛容や性格が良ければ、人は自然に近づいてきて仲間を多く作ることできる。

そういう印象を抱いていたが、学校では……そういえば私立か。ならば『良い子』という名の己を抑えている、抑圧社会に進出しているわけか。

そうとなれば結構……将来的に大丈夫か？

まあいい。どうなろうが私には関係がない。

「それに……」

私が思考しているとき、彼女はさらに続ける。

なにやら試案しているが、何か気を遣わせているのか？

ああ、社交辞令な感じにしてしまったから、その返事か。

よからう、聞いてやろうじゃないか。

「ああ、ううん、なんでもない！」

なんか焦っているな。そんなことで情緒不安定になれば、戦場で身が持たんぞ？

私はなのはさんといろいろ談笑していると、いきなり彼女が表情と話題を変えてくる。

「結城さん、ホシが外にでた。ちょっと行つてくる」「待て、私も行こう」

すぐにヘルメットを着用し、支払いを済ませる。

なのはさんは店の外だ。

すでにレー・ダーに仲間の青点として表示されており、どこへ行こうがついていける。

なぜかわからないが、彼女は全力で走っている。
む、私を拒否しているのか？

確かにEDFは当地の財産・文明を破壊する。

だからといって、結果論とすればフォーリナーの方が恒久的脅威になる。

そして私達と違つて、生産性のある人間を殺してしまう。
現場に存在する財産・文明と私達の介入によつて救われる50年ほど生産性のある命。

どちらを選ぶか明白だろうに。

「どこへ行こうというのだね？」

「はやつ!?

たかが9歳。さらに肉体をそれほど鍛えていない。

いや、効率的な筋力をつけているようだが、まだまだ足りないな。
私は一瞬で2・5Mを緊急回避で移動することが可能だ。

というよりも、レンジヤーならば普通にできる所業である。

私達から離れたければ、50M走にて7秒でも出すんだな。

私達が来たのは、商業地区だ。いや、ビジネス区と被つている高層ビル群の街といえる場所だ。

そして彼女は人目につかない場所に移動して、瞬時に変装する。
変身するらしいが変装じやないのか？

「今から屋上に行きますけど、結城さんはいけますか？」

「ああ、私のことはかまわない。先に行つてくれ」

「はい、わかりました」

なのはさんは先に、このビルの屋上に向かつた。

もちろん裏路地からの侵入に他ならない。

私は近くにビルのつっぱりがあるか、いろいろ観察してみた。

一定の高さ毎に窓の先が出ている。

これはいけるか？

EDF隊員は一般家庭の1・2階に、相当する跳躍力を持つている。

ビルとしてもあまり変化はない。いけないことはないか？

やつてみるか。

私はEDF隊員が絶対にできる空中制動を用いて、空中での姿勢を変更し真上にでっぱりがあつたとしても、迂回してそのでっぱりに足をつけることができる。

これを利用すれば階段がなかろうと、屋上へ乗り込むことができる。

よつと、屋上にウエルカム。

「来たぞ」

「やつと来た。あれだよ」

アレつてなんだよ。

私は彼女が杖で差す方角を、ヘルメットの高倍率を利用してカップルと思われる組み合わせを探す。

そしたら青に輝く石を持つ男女の組み合わせを見つける。

「あの青いやつがそうか？」

「うん。ユーノ君が別のビルから監視しているけど、別に強い思いを抱くことはないみたい。

でも結城さんのいうとおり、被害が出る前に長距離砲撃で遠距離捕縛をやろうとおもつてゐるんだ

よくわからないが長距離のアドバンテージを得てゐる今なら、それは可能なかも知れない。

だがその砲撃に気づけば、どうなつてしまふのか。

ちゃんと考えたうえで行動しているのか？

一応人間だから、危機的感知をするはずだ。

だから何か攻撃をしければ、すぐに命の危機を察知して何か思いを抱くだろう。

たとえば死にたくないとか。

この願いだけでもジユエルシードとかいう遺物は、反応をおこしてしまう。

いやそれよりも、だ。何故士郎達を呼んで対処しなかつた？

「なのはさん、士郎さん達に任せた方が確実じやないか？」

「お父さんは外国だよ。お兄ちゃんたちも、今は学校」

「なるほど」

隣で足元に魔法陣を展開させ、長距離砲撃の準備を行つてゐる。 実に勇ましいことだ。

そして桃色の光線を放ち、彼らとその周辺を巻き込む。 結果、案の定のことが発生した。

〈なのは！異常な魔力波を感じしたよ！〉

なのはさんの隣に、緑色の光球が遠方から寄つてきてそこから声を 発する。

この声はユーノのものだ。

そしてその異常な魔力波というものが発生したとき、私のすべての 視界が真っ白に染まり切つた。

物理的なホワイトアウトを食らうが、一瞬でかいふくする。

私達EDF隊員が被るヘルメットは、異常な光量はすべてはじき出 すか阻害するのだ。

さすがフォーリナーの技術を流用・改良した新型ヘルメット。

とまあこのように賛辞を贈るのだが、私の目の前遠方でひどい有様 が巻き起こっている。

わたしがいるのは、ビルの屋上。

そこから見えるのは、なかなか優美な景色……なわけがなく、非常 にコンクリートジャングルだ。

だが確実にはつきりと見え、理解できる範疇で言葉にするならばま ずいといえるだろう。

遠方に見える山の山頂には、實に立派なインセクトヒルがみえる。 さらにそのインセクトヒルの小さな穴から、青い光が漏れ出してお りジユエルシードがそこにあるということを示してゐる。

この光景は周囲の混乱を助長させた。

なにせインセクトヒルの出現のほかにも、このビル街で複数のビルがあのインセクトヒルと一直線上になるようにまつ平にされていたのだ。

そして眼下に見える人だつたものの残骸や瓦礫が数多、財産・命・文明・権力が一気に消滅した。

この一瞬の出来事に、となりの人物は大きく狼狽えている。

まあ狼狽えている暇なんざないがな。

インセクトヒルは遠目に見えるが、そこから出てくる蜂の軍団は隠しきれないほど大量に出ていているのがわかる。

ニュースでの速報が、一面を飾るだろう。

インセクトヒルから出現した蜂は、山の麓にある町を襲っているのがわかる。

執拗に針や噛みつき、連れ去りをおこなっている。

私は『ライサンダー2—1』を構え、連れ去ろうと一定速度で安定した航行を行つている奴を狙撃する。

奴は絶命し、餌を落とす。

蜂どもは私の銃声が聞こえたのか、こちらへ大勢立ち向かつてくれる。

『OゴリアスD2—1』を構えるのと同時に、インセクトヒルへ『ルールオブゴッド—5』で攻撃させる。

すると巣は土煙を上げながら少々傾く。

そして地上にいきなりポップする女王蜂と大量の蜂が、遠方で一気に湧き出す。

「うつ、『デイバインバスター』！」

桃色の光線をまともに受けても、ぴんぴんしているフォーリナー。きつとジユエルシードの影響だろう。

対魔力攻撃に耐性を持つてしまつた以上、物理攻撃が最大の攻撃になりそうだ。

『OゴリアスD2—1』で遠距離射撃を敢行する。

結構な爆発範囲と威力でもつて、8匹位吹き飛ばした。

しかしたつたそれだけしか撃破できなかつた。

ほかにも撃破するべきフォーリナーがいる。

奴らがここ以外を攻撃し始めている以上、この町への移住を考えている人は躊躇するだろう。

すでにマスコミやそのヘリコプター、警察部隊の出動が見えていく。

これが肥大化すれば、ますます他人ごとではない事態へ移行してしまう。

「なのはさん、一旦退却し恭也さんと美由希さんに合流しよう。

このままでは私はともかく、なのはさんとユーノ君が危ない」

「でもつ、このままじゃっ！」

眼下で繰り広げられるパンデミックも、非常に気になる。

蜂が人に近づき、針ではなく紫の液体を吹きかける。

そうすると吹きかけられた人間が、正常な人間を襲う。

きっとF因子で人間に敵対的になつたんだろう。

F因子はただONとOFFを促しているだけなので、気絶や痛覚が優先されるはずだ。

フォーリナーでさえ、ダメージに苦痛を受けるのだ。

それでも襲つてくるのは、F因子で痛覚を受けても本能でそれを覆す氣力を発揮しているかららしい。

「ああ、餌が有能なうちに逃げよう。どうせ、戦闘区域外になれば蒸発するし」

「何言つてるの!?」

「とにかく逃げよう

「いやだ！」

なのはさんは『デイバインシユート』とかいう多弾頭魔力弾を放つて、

複数数多のフォーリナーを撃破しようとしている。

だがFORKよりも威力が低そうなそれで、奴らを撃破できると思つてゐるのか？

実際奴らは何とも思わず行動している。

私は彼女の杖を握つて、攻撃をやめるように物理的に阻害する。そして彼女を抱えてここから飛び降りる。

重力による加速は発生せず、そのままの態勢で地面に降り立つ。

私たちがいたビルの屋上は、多量の針が刺さっていた。

女王バチが長距離狙撃を行つたようである。

この世界だと奴らの認知距離が異常に上昇したように思える。

あの者らの願いは、他者に邪魔されない空間だとでもいうのだろうか。

そうだとしてもフォーリナーはやりすぎだろう。

どこでこいつらを知つたんだ？

それともすでに細工されていたのか？

今それを知る方法は全くなき。よつて、今は逃げに転じるとき！

私は彼女を離さず、緊急回避で逃げていく。

本人は暴れているが、当たり判定がおかしくなるのでやめてほしい。

世界の常識を覆すことになるぞ？

「恭也さんへの通信手段を持つているんだろう？ならば、今すぐに連絡を」

「やだー！これは私が解決しなきやいけない事案。だから、いやだ！」

「どうか。じゃあ、こいつら殺せるか？」

私は緊急回避をやめて、彼女を下ろして振り向かせる。

その先にいるのは、パンデミックを受けた人間ども。

ゾンビのように手足をダラダラしているわけじゃない。

それぞれが最高の武器を持つて、進行してきている。

数はぼちぼちだが、これが将来的に軍隊もびつくりな数量になると

思うと、

なかなか愉快な事態へ陥るだろう。

F因子へ対抗する武器の調達を早めなければならぬかもしけない。

例えば意味不明なゾンビ行為をやめさせた人間として、協力体制を

築く可能性をさらに上げるとか。

ん？ 有情はないのかつて？

私達はEDFだ。そんなことにわざわざ思考を割く余裕などない。

私達を感じたのか走り寄つてくる人間、

なのはさんは逃さないように襟を掴んで、その場に拘束している。

そして一定の有効範囲に来れば、『OゴリアスD2—1』を射撃して退避する。

パンデミックな人間、F人間はこちらの影響を強く受けているのか、全く骨折や四肢粉碎・血液の噴出を行わなかつた。

そのかわり四肢があり得ない方向へ曲がるなど、ハヴオツク神が輝いているのがわかる。

あ、ガクガクしてる。

「あ……あ……」

なのはさんは愕然としながら、口元を抑えている。

そんなに吐き気を催すものか？

狙撃銃で複数の障害物となつてている元餌を、邪魔という名目で排除する。

役割を失つたオブジェクトは、さつさと失せろ。

メモリを無駄に食つて、世界をフリーズの波で襲うのはやめる。こつちの努力が無駄になるだろうが。

「おかしい、おかしいよ……」

「まあ、遠距離で撃破するだけの砲兵隊にとつて、知らぬ世界だろうさ。

だがこんな風に、現場の空気を感じるだけで、どんなことになつているのか知るのは非常に良い勉強になるはずだ

私は不調を訴えているなのはさんを連れて、後方へ撤退していく。さて私は撤退する最中、彼女にとあることを聞いた。

それは市民の命と自分の命、どちらが大切なのかということだ。

「……」

「早くしろ。その間に、お前の自分勝手な妄想で命を失う、老若男女が

いる

「自分……」

「OK」

私はマザーシップに、第二段階への武装転換を要請する。

（目標は蜂と女王バチ、およびインセクトヒルの殲滅を開始します）

ここから先は、殺戮の世界だ。

ユーノ君はいつの間にか、なのはさんの頭の上に帰つてきていた。長距離転移というものらしい。

私はこの戦場に『蜘蛛型巨大生物25—1』を投入した。

宇宙転移で出現したキャリアーは、ゆらゆらと戦場に近いところに移動する。

そして下部のハッチを開放し、25匹の蜘蛛を投下。

上方から接近する蜂は、キャリアーの圧倒的防御で防ぎ蜘蛛が無防備などろを守る。

蜘蛛が敵を感じて移動し始めたとき、キャリアーは蜂の攻撃を受けながら宇宙転移して消えた。

そしてそれと同時に、蜘蛛による蜂の大量殺戮が開始された。いきなり町の一区画から、大量の糸とともに絡まれ落ちていく蜂を確認。

さらにマザーシップによる第二段階への移行により、レーザー砲とプラズマ砲・ジエノサイド砲が雨の様に降り注ぐ。

大量のビルの倒壊・インフラの破壊と引き換えに、F人間・蜂・女王バチ・インセクトヒルの殲滅を確認した。

投下された蜘蛛はキャリアーに回収された。

これを確認した後、第二段階へ移行したマザーシップは周辺を警戒しながら、敵性勢力の壊滅を判断。

マザーシップは通常段階へ戻る。

ちなみにマザーシップは、スクランブル発進した戦闘機の中で攻撃してきた奴だけ落としていた。

だがパイロットがベイルアウトできるくらい、システムを維持でき

るほどの損傷にさせたのは良い判断だと思う。

この後は空中に浮かび続けるマザーシップへ、多くの関心が寄せられる中今回の被害についていろいろ話し合われていることがニュースで分かつた。

幸い都市の中心部やなのはさんの住まう場所より遠くの山間方面が、より多くの被害を受けたためそんなに甚大な被害と評価するには色々足りないらしい。

インセクトヒル自体もジユエルシードによる産物なので、生まれたF人間や蜂たちは撃破されると通常の状態へ回帰したり消滅したり空間が空虚に戻つていった。

「さて、なのは。酌量は必要か？」

インターネット回線を用いて、ビデオカメラによる通信で兄や姉・父親に囲まれるなのはさん。

なのはさんが家に帰つてきてまず行つたのは、風呂に入ることだった。

まあこれは飛ばしていいか。

この間帰宅していた恭也さんや美由希さんに、いろいろ私が通達した。

これにより今現在、なのはさんは説法を受けている途中だ。

私は任務が終わつたので、さつさと帰還したいのだが桃子さんに引き留められている。

また私の装備を盗る気なんじやないか。

そう思つて拒否しようとしたが、なのはさんが悲しそうな表情をしたのでやめた。

現地民との交友はしなければならない。これはEDFの決定事項である。

む、三人が帰還したのか三人分の足音が聞こえる。

私は縁側にて待機中だ。

するとガラツと扉を横に開いて、なのはさんが縁側に出てくる。そして私の隣に座る。

「どうだつたんだ？」

「ちよつと叱られちゃつた」

「まあ今回でちよつとは懲りろ」

「でも……うん、ごめん」

鈴虫の音色がいいなあ。

半月の月光に照らされながらそう思う。

で、なのはさんは、猛省中か？だといいがな。

「謝ることはない。だが、やりかたは誤りだな。今回は私が危惧して
いた通りのことが発生した。これからジユエルシードを持つ者には、
容赦ない攻撃を敢行せよ。

そうしなければ、次はお前たち家族の番だ」

「うん、頑張るよ」

「ならばよし。まあ、なのはさんもそんなに気負わないことだ。気負
うと大事な場面で、不調を来すことがある。

無駄な被害妄想はほどほどにしろよ？」

「わかってるよ。あ、そうだ。お母さんが結城さんを呼んでたよ？」

私は彼女とともに、中へ戻る。

結局用はなんてことなくて、恭也さんや美由希さんによる謝辞
だった。

私はEDF隊員として、当然のことをやつただけと伝える。

恭也さんは私の仕事への従事っぷりを褒めるが、フォーリナーの脅
威に少人数で対応している状況だ。当然である。

すると特大の爆弾を落としてきた。

「なのはをEDF隊員として、あずかつてくれないか？」

「不可能ではない。しかし、こちらの都合があるのでないか？」

私は対象になつている本人へ目を向ける。

その本人はなんとも読めない表情をしている。

「今ジユエルシードを狙っているのは3つの組織だ。

すべてを集めるのならば、なのはも対象になる。

ならばなのはには、EDFで精神や肉体ともに成長してもらいた
い。

そうでなければ、今後の戦闘で生き残る確率が下がってしまう。それは家族として非常に気に掛ける案件だ」

「ふむ……では、EDFに一時的に籍を置く。そういうことでいいか？」

「ああ、それで構わない」

「というわけで、なのはさんを私の名義でEDFの一員になることが決定した。

もちろん元の世界のことがあるので、戦闘スタイルはこのままで行つてもらうことが確定している。

まあ、入隊してくれるのならば、それに越したことはない。

だがもうもろの事情を無視し、同情で入るくらいならば元居た星へ帰れ！と相成る。

それくらい、ここは生存率が低い。

どこかのバカだつたか。

これらの惑星が割り当てられ、ハーレムを作るとかほざいてた愚か者。

そいつはきつかりとその世界の敵に瞬殺された。

埋伏の毒らしかったようだがな。

そういうわけで世界は厳しい。

私が生き残っているのは、その担当世界がもろもろ優しいまたは自己解決できる能力を多分に持つているからだと思われる。

実際魔法の世界であつたり、花騎士という武力に秀でた機関がある世界だつたり、三次元機動ができる世界だつたり。

どれを見ても立派な戦闘集団が、育成されている惑星だ。

フォーリナーが出現しなければ、私達が介入しなくとも勝手に世界が進んでいくようになつてている。

面倒が少なくて、非常に楽な星たちだ。

しかしその反面、助ける場所が少なくEDFに協力を取り付けるための隙がなかなか存在しないことがわかつていて。

私の様に何かが起きる前に、その世界で既知の存在となつていればある程度融通が利くようだ。

強すぎるというのも考え方だな。

さて、高町なのはのことを主任に伝えなければいけない。私は外の海岸線にある防波堤の上で、ヘルメット機能にある無線で極東支部に連絡する。

「おお、レンジャー1結城殿！作戦終了したか！」

「はい。終了しましたが、EDFに仮入隊したい者が出来ました」

「『仮』か……わかった。上に話しておく。

そのものに大して、EDF支部にきて破壊活動をしないよう念入りに武装解除をしておくように。そして一応の相談役とビデオカメラにて、対面してもらう。

対面は君ではなく、その仮入隊する者のみに限定される会話にてわかると思うが、表情はよくても裏で考えているバカがEDFに牙をむいたことがある。

それにより欧州支部が、一時半壊状態になつたと連絡が入つてゐる。

この事件によつて、技術員でも関係なくEDF内に入つて来るときは、絶対に腕輪をしておく事と武装解除をしておくことだ。

さらに加わつたのはその世界の大まかな情勢や秘密などを、包み隠さず話すこと。

そうしなければ、確実に消される。

この事をなのはさんには伝える。

最後の“消される”ところで、表情を強張らせた。

まあ正直に話せば何事もなく、すべてが滞りなく終わるから安心するようにと伝える。

変に離反されると、EDFの最高戦力に殲滅されることも留意しておくようにともいう。

それと国民性によるのか、宇宙転移で成功している支部は少ない。失敗したところはクレーターレベルで消滅している。

これ以上の失敗は許されないどころか、EDFは潜在的恐怖に対して防衛の名を付けた攻撃ができなくなる。

結果、予想以上のフォーリナーの技術や理解不能なほど多い物量に、やられてしまうかもしない。

なのはさんなら大丈夫だろうが、F因子がついていればどうなつてしまふことやら。

因子は遠隔操作ができる。体内に入っているが、体内じやなくとも可能ならば非常に大変なことになる。

だがEDF隊員の裏切りは、今までなかつたのでこの線はないとおもわれる。

まあ、アーマーのおかげで、因子の効力が発揮されていない可能性もあるが。

今まで伝えていなかつたのは、EDFの信頼性につながるわけだ。そして、現在なのはさんを含めた宇宙の人類を、EDFの一員として利用しようという輩もいる。

私はEDF隊員として、一部の歪曲しきつた思考を持つ者は許せない。

いや、実際に討伐指令すら出ている始末。
結構内ゲバがあるんだな、これが。

私はここらへんを伝えて、EDF内にいるEDF至上主義からの暴言は無視してほしいと伝える。

「わかりました」

「では行こう」

腕輪に宇宙転移の座標をリンクさせて、EDF極東支部の宇宙転移広場に転移する。

転移した後多数ある宇宙転移のゲートの中から、なのはさんを探し出す。

ちゃんと私立学校の制服姿なので、わかりやすかつた。
EDF隊員なら、外見が同じで分からなかつただろう。

一応頭上にネームタグが出てくるから安心だ。

ほかの隊員からの視線がある中、彼女を連れて主任のところへ行く。

途中技術技師さんと顔合わせをしておく。

「ただいま戻りました」

「帰つてきたか。いつもの場所で、主任が待つていてる」

私はなのはさんを連れて、よく主任と話している多目的室に来る。主任は上からの面接の承認を得たので、さつそくなのはさんを連れて行こうとする。

「お、そうだ。私はみんなから主任と呼ばれている者だ、よろしく頼む高町殿」

「高町なのはです。面接受かつて見せます！」

「うむ、その息だ！」

そういうて、会議室へ行つた。

私は廊下に出て、新発売のアシッドドレモンを購入して飲んだ。

——面接——

「キミのお名前なんですか？」

「聖祥大付属小学校三年、たかまちなのはです」

「席にお座りください」

「失礼します」

「最初に一般人と違つて、何か特別な力はありますか？」

「魔法です。魔力を集めて、砲撃したり拘束、障壁を作り上げたりできます」

「えー、EDFと接触した時を教えてください。また、どのように感じたか詳しく述べてください」

「約半年前にロストロギアという過去の遺物をめぐつての闘争の時、フォーリナーが出現しました。それを一瞬にして倒し、さらに私の家族を救つてくれました。

フォーリナーだけを殺すのが仕事だと言いながら、私達の心の傷を埋めてくれる素敵な方に出会えたと思っています」

「何故EDFに仮でありながら、入隊しようと思つたのですか？」

「フォーリナーの数や質、共に異常性を持つており将来的に私達の次元世界を脅かす存在として認識しました。

そこでフォーリナーと長らく戦闘しており、十分なノウハウを培つてゐるEDF様に入隊しその知識や技の恩恵を教授していただくため、結城さんに頼んでここに参りました」

「貴方はここでどんなことをしたいのですか？」

「先ほど申し上げたようにノウハウを知り得る事や既知となつてゐるフォーリナーの存在などを知り、全力全壊で忌まわしいやつらをぶつ殺したいです。――

もちろん得たものは母国へ帰り、周囲の者へ教え伝えます

「ふむ……わかりました。これにて、面接を終了します」

「ありがとうございました……失礼します」

お辞儀をして、扉を開けて出ていく。

「結城さん！」

私はTVでEDF極東支部が放送しているニュースチャンネルを見て、暇つぶしをしていた。

そんなとき、二つの足音が廊下から聞こえてきた。
別にここまで普通。

この支部は人数が少ないととはいえ、宇宙世界から人を連れてくる人がいなきともないからだ。

その連れてくる過程で、会議室での面接が隨時行われていて、だからこの程度の音は別に何とも思わない。

それでもその足音の一つを発する人が、自身への呼びかけをしたとなればそれに振り向かない者はいるか？
あまりいないだろう。

私は明るい顔で息を切らせて走つてくるのはさんを、席に座りながらその方向へ首を動かし確認する。

その表情を見て、いい感じだったんだろうと思いながら席を立ち、彼女と連れて行つた主任を迎える。

「首尾はどうなんだ？」

「うん、受かつたよ！」

「そうか、共に行動できるな」

私はなのはさんに、手を取られ握手している状態になつていて。彼女と視線を合わせ、その報告をちゃんと聞いてから前方へ目を向ける。

そこには主任がいるのだが、彼はなんだかニヤついている。

いや笑顔なのだろうか、非常に朗らかな感じだ。

あまり私にとつて不快感な感じは見受けられない。

いや、感じ取れないか。

「それで、主任。どうなんですか？」

「高町殿が言うように、面接に受かつたのだ。

そしてこれより、レンジャー2としてレンジャー部隊の一員になる。

もちろん結城殿の下でね」

「ありがとうございます」

私は主任にお礼をする。

私はこの後なのはさんを連れて、支部内の案内をする。

そして私とともに飯を食い、明日のための宿泊場所と武装の準備を行うこととした。

なのはさんはきっと今頃、EDFについての知識や装備について一部制限解除をされているためソレを学んでいるころあいだろう。

私はそれらの知識や実戦はここに入る前にすべて執り行つたので、いろいろ免除され三年程度で表に上がつている。

まあ、私の過去などだれも知りたくないだろう。

今回使用した『OゴリアスD2—1』と『ライサンダー2—1』は、『OゴリアスD2—3』と『ライサンダー2—2』となる。

やはり倒した数の絶対数が、異常に少ないとということだろう。なにせ今回は、完全にマザーシップだよるとなつてしまつたからだ。

功績は今まで通り入るだろう。

それでも武器の性能が上昇しなければ、全く意味がない。

もしもこのまま急激なパンデミックが発生すれば、私は躊躇なくそのF因子に侵された人間を殺すだろう。

罪悪感がないというわけではない。

なにせその国的人的資源を根底から破壊することになるのだ。

これがなくなつていけば、確実にその国の基盤が崩壊する。

そしてその世界は戦争が発生するだろう。

私はその戦争が発生すれば、絶対に逃げその世界をブラツクリストに入れる。

壊してしまつたとはいえ、たつたそれだけで壊れる国も国だな。

関係のない私にとって、役に立たない人形はただの物質でしかない。

よつて、罪悪感があろうとも、EDFやこの地球に危害を及ぼ差ないため早急に、

その世界への扉を閉じるのだ。

おつと、こんなくらい話はなしだ。

私は功績を自室にあるコントロールパネルから、情報を知る。功績はなかなか溜まつたようだ。

今回私が選んだフォーリナーは、『甲殻巨大生物』だ。

通称黒蟻。

そのままの意味で、酸をショットガンの様に散布する。

またEDFによる地獄の訓練のおかげで、噛みつきと酸布（酸+散布）が同時に見えるようになつた。

さらにF因子のニオイを発する敵を、確実に殺すようになつている。

ちなみにこの訓練された黒蟻は、標準の買い物ではないので若干高めになつていて。

しかし殺されにくいので、非常にお買い得だ。

『甲殻巨大生物4・1・黒蟻111—1』といつもの『キャリアー』を随伴して、

私の指揮下となる。

それと『蜘蛛型巨大生物25—1』は、『蜘蛛型巨大生物25—13』となる。

この後私は休暇だつたことを思い出して、『制御温室』に向かつていると

後方からなのはさんがやつてきた。

「結城さん、 大変だよ！」

「どうかしたか？」

「ユーノ君がいないの！」

そういうえば、説教中もこつちに来てからもずっと肩の上に載つていったような気がする。

私はこの事を主任にいうと、フェレットだつた彼は今技術的な意味で協力中らしい。

よくわからないがフォーリナーの危険性と人類の兵器に関して、図星となるような指摘を受けて技術技師さんとともに改良と開発を行つてているとの事だ。

しばらくの間会うことはできない、となのはさんに伝えるとなんか笑顔になつた。

なんというか、憐れだな。

「ところで、どこいくの？」

「ああ。今、『制御温室』へ……つまり、人工的に管理されている田畠に向かつている」

「へー。あ、じゃあ、茶葉の大元とか育てられる？」

「今、温室はひどく草木で満載だ。一応EDF隊員だろう？自分の功績で購入してみな」

「うん！」

そして購入方法とか、功績の一部譲渡を行つて購入の仕方・配置や起動・停止・排除などの方法を教授する。

私はなのはさんが、いろいろな項目を見ていろいろ購入しいじつているとき、この温室のところへくる。

例の色違ひ杏は、さらによくわからない色へ変化していた。

腐っているとは思っていない。きっと、大丈夫だろう。
そうやつて自身の温室内で、いろいろいじつていると温室外から声
を掛けられる。

「Hey! お久ぶりDeathNe, YouKeySun!」

私はエアレイダー田中を視認した。

「ひ、久しぶり……」

「Oh? 元気KleineDeathNE」

お前のおかげで単語一つ一つを解読しなきやならんのだ！

しかも無いとか言つておきながら、それはドイツ語だ！

だからお前と会話するのは疲れるんだ！

「そんなことはないですよ。ところで、その筒はなんですか？」

「YorkぞKeyて呉真下ね！これぞ、AirRaiderの必需
品！無限発煙筒です！」

これがいれば、AirForcessによるBombsDropOut
tで、Ant, sDestroy！」

なるほど爆撃できるのか。

しかし地球限定だろうな。なにせ宇宙転移先は、ある程度のことが
なければレンジジャー以外の派遣を許可されないからな。

「とYou訳で、Give you This weapon！」

「I, 11はどこいった!?」

「I, m Japanese. 英語なんて無理デスネ！」

「仕方ないな」

というわけで、『無差別爆撃支援・効果範囲+10』をくれた。

「気にしないでください。MeからのPresentです

「口調変わつてるぞ？」

「Oh, ナンの事DeathCar?」

悪意はないようだ。

しかしどうつかうかな……。

しかたがない、いつか使おうと思う。

そうだ。原点種子から生まれた、杏・シャボン・キンギョはさらにもつさりとしていた。

生命力がみなぎっているようで、何よりといったところだ。

「あ、結城さん！やつと見つけられたよ……。緊急事態みたい！」

「わかった、今すぐ行こう」

私に支援武器の譲渡をしただけで、そのままどこかへ去つていったエアレイダー田中。

入れ替わるようになのはさんが入つてきて、緊急の知らせを行う。

私は今の装備のままで、宇宙転移広場へ行く。

「なのはさんの初仕事だ。気を抜くなよ」

「もちろんです！」

拳を握り、やる気に満ちている。

これならなんとかなりそうだ。

では、行こうか。

近況報告。U=装備中。AP:2736
ロケラン:

『ステイングレイM1—100』

『ボルケーノ3A—64』

U『OゴリアスD2—3』

アサルトライフル:

『AF—14—100』

スナイパーライフル:

U『ライサンダー2—2』

後方支援:

U『ルールオブゴッド—5』

『無差別爆撃支援・効果範囲+10』

フォーリナー:

『マザーシップ—6』(飛行ドローン5—1/飛行ビーグル5—1/最

大形態変化3)

『アルゴー1』

『蜘蛛型巨大生物25—13』(『糸の最大射程+』)

『キャリアー・2』

『甲殻巨大生物4・1・黒蟻111—1』

全体改良：

『最大弾数強化ー1』

『リロード速度強化ー1』

他：

『制御温室』(アプリコット／キンギョソウ／シャボンソウ)

「飯食つてきたか？EDFの解放武器選んだか？行先詳細見たか？遺書用意したか？」

功績と行先の貨幣の交換したか？仕事と意識してるか？EDFの宇宙転移基本装備一式へ換装してるか？うだぐだ」「言われなくとも、ちゃんとやつてますよ結城さん」

「それならよかつた」

「武器倉庫の拡張、やりました？」

「!?’

11：蜘蛛さんのおまつり…？

緊急事態。

これを聞いて、技術技師さんが宇宙転移を発動してくれた。私達が到着したのは、何の変哲もない建物の内部だった。

「ここは？」

「周辺の様子を鑑みるに、どこかの学校だろうな」

そう、名称だけでみれば、ただの学校だ。

しかし一番可笑しいのは、真昼間だというのに人が一人もいない事。

そして大地を含め、建造物などいろんなものが破壊されていることだ。

ここはどんな世界なんだ？

私が来たことがある世界ならば、きっと対応できるはず。しかしどう見てもこれはただの崩壊ではない。

どこをどう見ても人が住んでいた場所だ。

いろんな形式の家屋。

どれもこれも観光名所にありそうなものばかりだ。それなのに、道端にある言語表記が日本語だ。

ここはどこだ？

私はなのはさんに、上空から人間を探すようにお願いした。探索中。私は大いに動き、周辺のクリアリングを進める。

そのうち、宇宙転移してきた『マザーシップ』が、ヘルメットと連動し周辺のフォーリナーを表示した。

範囲は1キロ平方メートル。

おかしい。

普通ならば餌の市民がいるはずだ。

住宅団地が遠方で確認できるのに、全く存在を確認できない。フォーリナーもいるにはいる。しかし数がそんなに多くない。

そして極めつけは、画面端にてぎりぎり表示されている2つの青と7つの青・1つの青……。

合計10の青点が、このレーダーに表示されている。

三つの地点の特徴。

それは2つの青は大量の赤点・7つの青は移動が激しい複数の赤点・1つの青は2つの白点と邂逅していること。

「結城さん！」

「どうだつた!？」

上空にいるなのはさんが帰ってきた。

話によると赤点と邂逅している勢力は、すべて女性でフォーリナーと交戦。

もう一つの方は、魔法で確認したらしく子供一人を大人二人が囲つているらしい。

うーん……。

子供ではなく女性の方を確認しよう。

子供は建物の中に居て、なおかつ安全ということが分かった。

なにせ魔法で盗み撮りしなければ、その状況を確認できなかつたんだから。

「なのはさんは7人の女性の方へ向かってくれ。私は二人の女性がいる方へいく。

それと会話はEDFの標準装備に、『無線』があるからそれで連絡してくれて構わない』

「うん、わかつた」

「では、作戦開始！」

私どなのはさんは、散開する。

私はなのはさんはよりもかなり遅く現場に到着した。

最短距離を進んでいたのだが、途中の段差に引っかかってしまつて

……。

おかげで数分ロストしてしまった。なんてこつた！

それと数年前からのアーマーは、かなり前からある旧型アーマーよりも不便になつていて。

まあ得している部分もあるんだが、今しがたEDFニュースで新型アーマーができたという。

その能力は兵科によつて違うんだそうだ。

詳しい話は戻つてからにするが、レンジャーは持久戦がやりやすくなつたと報道で言つていた。

非常に楽しみなんだなこれが！

つと、私は大量の敵と戦闘している二人の女性を発見した。

市民だつたら躊躇なく爆撃しているところだが、青点である仲間である以上誤射はやめたい。

なにせ相手を削るための肉壁がなくなるからな！

私はロケランを放つ。

黒蟻とたまに混じつている緑蟻、蜘蛛を爆散させる。

私の攻撃に爆発で気付いたのか、射線先にいる私に顔を向ける女性二人。

しかし量が多いな…。引き撃ちするしかなさそうだ。

私が引き撃ち体制に移ろうとしたとき、刀を持っている女性が圧倒的火力を持つ蜘蛛糸を切り裂いた。

普通なら不可能なはずだ。

しかしそれが可能ということは、フォーリナーが弱いのかそれとも設定介入が弱いのか。

それでも有利になるのならば、そんな些細なことは気にしない。

私とその女性二人は、ここにいるフォーリナーを殲滅。

それから私は彼女らに話しかける。

「そこの方、ご無事ですか？」

「はい、おかげで助かりました」

黒髪の少女はそう答える。

日本刀であり得ないくらいの斬撃を、フォーリナーに向かつて放つ

ていた。

そしてもう一人、傍らにいる細目の長身の女性。いやマザーシップからの解析によれば、年齢は二人とも同じという結果だ。

私は一人に何が起こっているか聞いてみる。

「おつと申し遅れました。私はＥＤＦのレンジャー1結城と申します」

「ゞ、ご丁寧な挨拶痛み入ります」

先ほどの斬撃や目にもとまらぬ攻撃。

あれはアーマー値が吹き飛ぶのは確定なので、少しでもより良い態度を示してみる。

ＥＤＦ隊員や市民は別に、故意の射殺だろうと誤射で済む。

しかしここは私が住む世界じゃない。

だから少しでも強力な戦闘力を持つ人物と協力体制ができるような雰囲気を醸し出しておく。

そうしておいた方が相手にとつて、都合の良い何かを得ることができるかも知れなからだ。

私はそういう考え方をして行動を起こした結果、相手方からよりよい言葉を貰えた。

「えーと、結城さんってことは……ネギ先生を知っていますか？」

「ネギ？ああ、ネギ・スプリングフィールドなら知っているよ」

「やはり！それはよかつた。ぜひ、私達と協力してください」

「待ってください。状況が分かりません」

ネギは以前ライブ会場らしきところで、紳士風の人物と戦っていたのは知っている。

私はマザーシップからの写真画像を受け取り、そこからこの少女らの事を知れるか確認する。

するとその中から、目の前の少女と同じ姿が確認できた。きっとネギが私の話を色々したんだろうな、と思う。

だから私が自己紹介した後、姿勢が軟化したんだな。

「私は『桜咲 刹那』です。ネギ先生救出に協力してください」

「拙者は『長瀬 楓』。よろしく頼むでござるよ」

「よろしく、お嬢さん方。では、状況確認をお願いします」

私は桜咲さんと長瀬さんに、こうなつた経緯を教えてもらつた。

細かい部分は飛ばさせてもらおう。

この世界の学園祭にてボスであり、ネギの生徒である人物が世界を塗り替える魔法を放とうとした。

それを阻害するため、行動を起こしたネギに協力する生徒たち。

しかしその途中でいつの間にか未来に来ていた。

その未来ではすでに魔法が認知されている世界になつてしまつていて、世界中が大混乱。

その混乱の要因がネギの生徒であり、既に行方をくらましている。さらにネギは、現状把握の前に一時解散しており、行方不明である。そんな時に何時ぞやみた生物に多数襲われてしまつた。

それによりネギの生徒たちは、全員ばらばらになつてしまつたとの事。

現状、彼女二人が大半を引き受けており、他の非戦闘員である生徒には対処できる程度の生物に追われているとのこと。

私はそれを聞いて、私はネギの生徒で屈指の戦闘力を持つ生徒に出会つたという事を知る。

更になのはさんは向かつたのは、非戦闘員である生徒の方に向かつたことも分かつた。

レーダーに映る青点の意味が漸く分かつた。

これでもう、彼女たちに敵対する意味は皆無となる。
さて、善は急げだ。

すぐにマザーシップに、ネギがいるであろう場所を座標で割り出してもらい、そこへ行けるようルート検索をしてもらおう。

そしてなのはさんとも合流してからいこう。

なのはさんは隊長ではなく、合流待ちの隊員だから合流した方が効率的だ。

「わかりました。では、彼女たちと合流しながら、ネギのところへ行きましよう」

「え、場所がわかるんですか？」

「はい。それに、私の仲間もいます」

ちょうどこの時、無線に感あり。

合流できたようだ。

私は発煙筒替わりに、『OゴリアスD2—3』を上空に向けて放つ。噴進弾なので煙が帶を引く。これで過去となつた今の現在位置がわかるだろう。

さあルートも分かつた。行くか。

「ではついてきてください」

「お主、歩きか？」

「ええ、まあ」

一応緊急回避で走るより早いが、歩きと同義だろうな。
脚を回転させるという意味ではな。

「拙者がお主を肩車したほうが、早いでござるよ？」

「ではお願ひします。では、『OゴリアスD2—3』にて道案内をさせていただきます」

「誤射は堪忍でござる」

「ええ、もちろん」

忍者な長瀬さんに肩車をしてもらい、『OゴリアスD2—3』の煙にて方向を示す。

レンジジャー自身に反動があるだけで、肩車をしている長瀬さんにちよくせつ反動は行かない。

ヘリコプターのローターにのり、いくら反動武器を使つても自身が影響を受けるだけというのと同じだ。

さて…。移動中になのはさんと無線で話をつける。
向こう側は非戦闘員が多数というのもあって、早急に話をつけることができた。

魔法無力化がどうのこうのと呼ばれたらしいが、魔法の構造どころか世界や位相・次元レベルで違うので、この世界の常識が通用しないのは当然である。

しばらく行くと教会にたどりついた。その時、なのはさんを含む残

りのネギの生徒と合流することができた。

「私はEDFのレンジャー結城です。よろしくお願ひします」

……

さて、困ったことになった。理由は後に説明しよう。

あの後ネギ一行と合流し、ネギ・スプリングフィールドを救助した。そしてその足で学園内にある世界樹の根元から、過去へ共に連れて行つてもらつた。

ここまで順調だ。

まあ途中で魔法使いや西洋龍に急襲されてしまつたが……。

私達はともかく、転移で空中に飛ばされてしまつたネギ一行は、ネギの渾身の浮力魔法により難を逃れた。

さてこの転移は無事、成功したかと思つたらそうでもなかつた。実は目的とされていた日ではなく、学園祭の最終日に飛んでしまつたらしい。

つまりネギの生徒でありボスの作戦決行日だという事だ。

私はあまり華やかな事は好きではないが、ここぞとばかりなのはさんが一巡りしたいらしかつたのでついていつた。

場所は東京の都心近くで、世界樹が丘の上に立つているのを中心広げていつた学園。

更にその規模が一つの学園といえるものではないので、総称として学園都市といわれている。

ネギが先生として通勤している学校は、女子校と言われており女性のみが通つてゐるらしい。しかも年齢は12と若いのに、二人、三人の同居同棲を学生寮で行い通勤通学するんだと。

規模はあり得ないくらいでかく、公共交通機関が路面電車が数両しかない。

景観同調とか健全で健やかな生徒の心身の成長のため、あえてこのような形なんだとか。

この学園、麻帆良学園の歴史とか言われるブースにて、閲覧可能な

情報だった。

「スゴイ人！ コスプレもできるんだね」

「樂しむのを止めろとは言わないが、いつフオーリナーがやつてくるかわからない。

「心まで緩慢にさせたコスプレは止めておいた方がいい」「えー。でも、かわいいし……」

「好きにすればいいさ」

さてなのはさんが衣装を選んでいる間、少し考へることがある。時間跳躍マシンである、カシオペア。

此れの状況を見たが、どう見ても一般界隈では直せそうもない。そしてこの技術は、当のEDFでも開発されていない。なにせ魔法なんて存在せず、技術面でどうにかして大量の電力を使つて再現できている。

それに技術とはいっても、結局は鹵獲技術に過ぎない。改良することはできても、開発することはベースマシン・ハードの面で劣っているからできない。

よつて個人携帯できる時点で、敵の優勢は決まつていて。なにせあのカシオペア、故障率・精密性も相まって使用はあと二・三回が限界だろう。

その来るべき時、ネギをこちらの腕輪を使って帰還しつつ再度機械を使つて過去に転移すべきかどうか。

……とにかく、何が緊急事態なのか全くわからない中、フオーリナーとの関連性があるだろう今、気を抜くことはできない。いや、今現在真昼間だ。

そしてこの世界の主人公はおそらくネギだ。

だからこの世界に於いて異端なEDFは、全く相手にされないだろう。

それに今回の敵は、ネギの生徒だ。

確実を喫し、この世界の常識を上書きしようとするならば、周到な準備と時間帯・演出といったものをするだろう。

ましてや学園祭だ。下手な事をすれば、魔法世界はともかく現実世界にまで敵を増やすかもしれない。

きっとその生徒も、そうなつた場合のシミュレートはしているだろう。

深慮の末の結果、学園祭最後のイベントの時に仕掛けてくるだろうと至った。

だがもしものことがある。気を抜くことはしないが、気を張ることは止めておこう。

「結城さん、できましたよ！」

そう結論付けたとき、ちょうどなのはさんが出てきた。

仮装ということもあって、年相応のかわいらしい服装だ。

私はなのはさんはと束の間の休戦を楽しんだ。

そして冒頭の困惑の理由が、そのイベントにある。

この学園祭最後のイベントにおいて、火星ロボ軍団と戦うことになる。

ここまでいいのだが、この火星のロボの中にフォーリナーレ似の蟻と蜘蛛が田中といわれるロボと隊列を組んで沿岸から急襲してきた。その数は合計3400。

非常に敵が多かつたが、私どなのはさんがネギの生徒に頼まれてヒーローユニットになり戦闘に参加したことで、何の障害もなく撃破できた。

そのあとも順調に撃破していくと、ヒーローユニットを中心に未来送りの弾丸が撃ち込まれてしまうという現象が起る。

幸いネギの生徒たちは、その弾丸に巻き込まれなかつた。色々端折るが、ボスとなる超鈴音「チャオリンシェン」がいる場所まで、私達二人とネギが出向く。

私は母船に乗り、なのはさんは魔法で飛んでボスがいる飛行船の上に行つた。

主人公格が居れば勝てると思ったが、勝てなかつた。

結局ネギはカシオペアを吹き飛ばされ、未来送りを食らつてしまふ。

もちろん私達も無抵抗で食らつてやつた。

なぜか。主人公格のネギにカシオペアがない今、どうやって過去戻りできる要素があろうかということ。

ただでさえ量子力学やワームホールが未完成で、理論上な技術力にどうして過去に戻れると思おうか。

よつて巻き込まれてやつた。

いや、それは詭弁だな。

本当はそういう言い訳にしたかつただけなんだが……。

「おやおや、偉大なる魔法使いのご子息のほかに、EDFもきているではないか」

「む。我々の事を知つているのか」

「もちろんね。100年後の火星は、そのEDFの庇護下にありモノリスを受け取り時空の跳躍ができるようになつたね。

更に火星の技術と魔法で、時空跳躍技術を個人携帯できるレベルにまで達したネ」

「ほほう。ならば、敵対する必要はあまりないわけだが……」

「君たちになくとも、私達にはあるね。私たちはEDFの停滞した技術レベルを追い越し、F因子の解析とそれを操ることができた。

更にF装甲をも私たちは解析し、それを作り上げることができた。つまり、フォーリナーを旧型から新型まで操れるようになつたね。

私達火星の住人は、この技術を使いこの宇宙空間に存在する全ての可能性を拾い上げた。

そして、搾取され苦しむ者たちでEDFに対して、反旗を翻したのだよ」

まあ見てわかる通り、私が半信半疑のEDFがまさかのやらかしようである。

きっとこの情報も、私がこの時点で真実を知りすぎたという名目と発見者は消すという理由で、口を滑らせたに違いない。

さすがに私も死にたくないの、なのはさんと共にネギの後を追つて未来送りされる。

未来送りされた先にて、絶望するネギを発見する。
ネギが居ない事で、全世界が魔法を知るという未来は変わらなかつた。

これによりネギは主人公だと確信するが、今ここで彼に腕輪を渡すほど私はバカじやない。

「ネギ。一体どうするつもりだ？」

「……あの……ＥＤＦって時空跳躍できるのは、本当なの？」

まあ、いきなりで不躾なのは仕方がないか。

今まで友情・努力・死闘・勝利していたのが、嘘だというような展開だからな。

「ああ。本当だ」

「じゃ、じゃあ……借りたいなあつて……」

「駄目だ」

「ですよね」

「しかし、条件によつて、貸すこともやぶさかではない」

意外というようなネギの表情に、私は希望を見出させる。

残念ながら私達ＥＤＦは、その世界の事は全く知らないしどうでもいい。

結果的にその世界に奴らが住み着き、特殊な技術や特性を身に着け量産化されなければどうでもいいのだ。

だからその世界に手を貸し、全ての分野において総合的に強化されフォーリナーに対抗できればいい。

よつてネギ。君にはこちらの都合を盛り込んでお話ししよう。

何、君の命を貸してもらうだけで充分だからさ。

「ＥＤＦの一員になる？」

「ああ。私たちはフォーリナーの外的要因による進化を食い止めるべく、世界に進出している。

よつて、そのフォーリナーが関係していなければ、私たちは技術的にも関与しない。

たとえ100年後の火星が、EDFに対しても喧嘩を売ろうともフォーリナーが増えなければどうでもいいのだ」

「い、一員つて、どうやるんですか？」

「例えば今の立場、世界を捨てEDFの隊員になるとか」

こういうとネギは顔面蒼白になる。

つまり、偉大なる魔法使いとか父の背中を追うとか、この世界の教師やら諸々捨ててEDFに所属するというものの。

「そして、たとえばというように、もう一つある」

「！」

俯く顔をがばつと上げて、こつちを見る。

まあ、上げて下げてあげたからな。

「それはなのはさんのように、一時的にこちらに加担するというものが」

なのはさんはEDFの腕輪を見せる。

「ネギ君、こつちの立場の方が断然楽だと思うよ？私も夏休みを利用して、こうしてバイトに来てるわけだし」「命がけのな。

「9歳の少女がそういうつているぞ、10歳のネギ君」

そういうとネギは驚愕した後、気を引き締めて口を開ける。

「ぼ、僕もEDFに参加させてください！」

「ああ、いいよ」

未来の学園は通常業務であるため、授業中である時間帯に誰もいない場所にて腕輪をはじめ込ませる。

未来的デザインの意匠である腕輪を見て、目を輝かせるネギ。まあそんな猶予なぞないわけで……。

「主任。一度戻してもらつていいですか？」

「状況は把握している。どつちに転んでも絶望しかない。よつて、正

史に戻すため、転移装置の再使用を認めよう!」

「ありがとうございます!」

無線で会話した後、私達三人はEDFに戻る。

EDFに戻ると相変わらずの忙しさと騒がしさ、熱気にこちらが酔いそうだ。

ネギの探求心が刺激されたのか、貪欲に周囲を見てどんな風に動いているのか見ているようだ。

だが時間は待ってくれない。すぐに向かうぞ。

「なのはさん、ネギ君。これより同じ世界線にある世界の過去に転移する。

時間帯はカシオペアで転移した時と同じく、正午に値する。

タイムパラドックスを避けるため、戦場を別途に指定している。

また、再度失敗することも考慮して、行動のタイムスケジュールも作り上げた。

各自確認してくれ

このスケジュールというよりアルゴリズムは、全て母船が作り上げたものだ。

フォーリナーの技術をほとんど使いまわしているので、人類未踏の領域である計算によつて一瞬で作成された。

更に性格面や各人物の性格を取り入れた行動計画を入れてくれているので、お互いの時間軸に干渉しないよう緻密に組まれている。

ただネギ君はその世界において教師であり、事前に行われた大会によつて顔が割れている。

そのためある程度自由に活動されるのは織り込み済みだ。

「では行くぞ

「休憩なしですか!?

「当然だ」

下手をしなくとも半日以上の連続戦闘になるEDFのレンジャーを嘗めない方がいい。

今回は急の事であるため、説明不足は否めない。

まあ説明は学園に行つたときでいいだろう。

とまあ転移して奴らに攻撃を仕向けたのはいい。

実にいい。だがそれ以上の問題がある。

戦闘の都合上、前のネギと私達が未来送りにされてからでないと攻撃ができないという事だ。

そうしなければ、タイムパラドックスによる事象異常が起こつてしまう。

更にこの問題を解決するには、以前の私たちが認識しない場所で待機するしかない。

よつて超の計画が完遂してしまった可能性が高くなってしまう。

そこでピンポイント時空跳躍を行つた。

これは転移する際、条件をはるかに厳密にしたもので電力を食う。

更に私達自身も疲労してしまう。

いや。私はともかくなのはさんやネギ君は、EDFの仕様になじめない子供だ。

よつてその疲労が受け継がれたまま、その世界で戦闘してしまう。しかもカシオペアも連続戦闘により、完全に崩壊してしまつた。

一応EDFで解析してもらつているが、時間がかかるという事らしい。

そこは専門家にまかせるが、現状かなり難しい。

そしてもう一つ問題がある。

再三いうが、それは電力だ。

今回のピンポイント跳躍だが、かなり電力を食う。

おかげで二回と三回目の接続準備で使つた時、停電と共に跳躍が使用できなくなつた。

「ええっ!? 何でですか!?

「ネギ君。君は大学卒業の首席なんだから、少しくらいわかるだろう?」

この世界線・位相・時空・時間跳躍は、時と場合によつて使用電力

が大きく異なる。

未来や現在進行中である世界にいくのは、電力的に省エネで済む。未来は少しかかるがそれくらいだ。

しかし過去。これが問題だ。未来は現在の結果によるものだが、過去は現在の0以下1秒前の世界だ。

さらに今現在でさえ計算方法がわからない、量子の揺らぎがある。そのため計算のため、電力が多くいる。

つまり、電力は過去・現在・未来の順に必要なのだ。

未来と現在の順番が逆なのは、時と場合による。

位相・世界線・次元の他に、時間経過の差異がある。

これは私が今まで行つた世界にあつたように、数か月空けていると6年の歳月が経過していたとか。

なのはさんの世界の様に、ほぼ同じ速度で進行していたりとか。ちなみになのはさんがいうミッドチルダは、未来にあたつていて私達の世界より進行速度が遅かつた。

私の主観なのだが、この地球世界の時間軸を中心にはじめ世界は加速しており、技術的な意味でも未来に行つている世界の時間経過は遅いとみている。

今は20XX年。しかしネギ君が居た世界は、199X年代。

更に巨人の世界は、蒸気機関の世界だ。時代の進行が早いのもうなずける。

そして花の世界は数か月空けていたのにも関わらず、一週間程度しか経過していなかつた。

あそこは異世界であり、未来なのかもしれない。

最後になのはさんの世界は、200X年代で技術的にもEDFを除けばほぼ同じである。

よつて時間的差異は、ほほないと言えるだろう。

ちなみに現在地球の過去にさかのぼつても、干渉した時点で並行世界となるため介入しても全く意味がない。

だがモノリスの受け渡しにより、世界的ブレイクスルーが発生する

ことになり世界中が混乱し、歴史がおかしくなるだろう。

他にも色々制約があるが、普通に過ごしていれば関係ないことだ。で、だ。

私たちは今現在、停電により身動きできない状況にある。そこで私は二人と共に、訓練室に行くことにした。

ああそうだ。今のネギ君は、なのはさんの父親とおなじような感じである。

よつてEDFの一員なれど、協力体制を築いている現地民であるという認識だ。

その為主任に報告して、EDFの人事と面会する必要性は皆無である。

まあただの現地民のために、停電させてまで正史に戻す価値があるのかといわれるとな。

しかしそのまま行くと、その世界が結果的にフォーリナーと戦闘するためのモノリスを入手できない世界線になってしまう。

そんな可能性を秘めているため、結局主人公絡みの歴史改変は元に戻さなければならない。

「さて、訓練場に来たが、二人の魔法はどんな風に発生させているか見させてもらう

「わかりました」

「うん、いいよ」

なのはさんの場合、リンカーコアとかいうもので空気中の魔力を人間が使えるように変異させて使用する。

ネギ君の場合、空気中の魔力を魔法陣と口上に乗せて発動する。

二人の魔法の差異を見ながら、停電の時稼ぐ事にした。

……

「主任。今回の停電の事ですが……」

「結城殿、心配しなくていい。君は十分によくやっている。だから、何も心配せずやつてくるんだ」

「はっ！　ありがとうございます」

私は主任に二度以上の連續過去への転移使用について、謝罪しにいった。

我ながら不甲斐ないことをしてしまったと反省している。

なにせ停電によつてEDFが批難を受けてしまったからだ。

今回の停電は転移の過剰使用として、国内の電力会社や国民から転移を止めるように言われた。

だが上層部は今回の転移は非常事態による大規模転移であり、国民の皆様には大変申し訳なく思っています、と説明している。

またその言葉の後には、今回の停電に関する舞台裏を話していた。

「作り話だ。気にしなくていいぞ？」

「本当に、申し訳ありません」

ストームチームと元EDF幹部が、頭をひねつて結論を出した結果がこれだ。

おかげで過激は以外は、ある程度納得しているようだ。

よかつた。本当に。

愚かな国民で、本当によかつた。

今回の放送を多目的室のテレビで見てている。

なのはさんやネギ君は、今現在なのはさんの世界へ送っている。

理由の一つとして、停電の復旧作業中は直近の世界へ時間つぶしと見分を広めてもらうためだ。

実際はこの放送や現状を彼らの目に留めさせない事と、外来生物ユーノがネギ君の魔法理論を教えてもらいたいという諸事情も抱えている。

私も一人がやつている間、直近の世界に行つて時間を稼ごうかと思う。

「後何時間ほどかかりますか？」

「少なくとも一週間はかかるてしまうな」

「それは……」

「気にしなくていい。君はフォーリナーが勢力団の版団を広めない事と技術の向上を防げるよう、頑張つたらいいんだ」

「わかりました。行ってきます」

私は太陽光発電等で発電される非常用電気で、直近の世界を探しそこに行けるよう技術技師さんに無線で頼んだ。

「頑張ってくれよ、レンジャー1 結城殿」

去り際、主任の声が聞こえた気がした。

私はその世界に行く前に、『制御温室』へ行き杏に実っている果実を握りしめ千切り取る。強引にやるのではなく、枝を抑えてから取つた。

おかげで枝を折ることなく取得できた。

この果実を仕舞つて、宇宙転移広場へいく。

今回は全くというわけではないが、戦果を取ることはできなかつた。

一応敵の部隊を撃破したということで、報酬はあるがとても使えるような額じやない。

これくらいの額ならば、仕送りに使つた方がいいだろう。

というわけで仕送りをした。

この仕送りをしたとき、電子メールの受信項目に一件初めて追加された。

見てみると母親からの無事を祈る手紙だつた。

「元気か、か……。ああ、元気だ。皆元気だろう。さ、行こうか」

母親からの電子メールの内容を思い出しながら、次の任務への意気を込める。

「8番がお前の転移場所だ」

「了解した」

武器は変更せず、そのまま行くことにした。

なにせその世界は援護さえすれば、どうにかなる世界だからな。私が直接手を下さなくてもいい世界。

だが、この果実はなんなのか、聞いてみる必要がある。

さあ技術技師さんが指定した場所に行つて、その世界へ行こう。しかし非常電力で、直近の世界に行けるのは非常に便利だな。

近況報告。U=装備中。A P : 2759

ロケラン：

『ステイングレイM1—100』

『ボルケーノ3A—64』

U『OゴリアスD2—3』

アサルトライフル：

『A F—14—100』

『A F—15—100』

スナイパーライフル：

U『ライサンダー2—2』

後方支援：

U『ルールオブゴッド—5』

『無差別爆撃支援・効果範囲+10』

フォーリナー：

『マザーシップ—6』(飛行ドローン5—1／飛行ビーグル5—1／最大形態変化3)

『アルゴ—1』

『蜘蛛型巨大生物25—14』(『糸の最大射程+』)

『キヤリアー・2』

『甲殻巨大生物4·1·黒蟻111—2』

全体改良：

『最大弾数強化—1』

『リロード速度強化—1』

他：

『制御温室』(アプリコット／キンギョソウ／シャボンソウ)

12：たべられちやつたみんなの世界

EDF極東支部。晴れやかな今日、定期的に行われる主任クラスの者による会議が行われた。

その会議の後は、すぐに解散することになる。

しかし例の主任は、自身が持つ地獄耳にお得な情報を仕入れてきた。

その情報は心にしまい込み、絶対に他者にばれないよう優秀な兵士である結城に伝えることにした。

表情や行動に焦りが見えないように細心の注意を払いながら、多目的室へ向かう。

もちろん無線で結城に連絡はよこしてある。

「お疲れ様です、主任。いかがいたしました？」

「うむ、この事は内密にお願いしたい」

「分かりました。して、その内容は？」

神妙な顔をした主任を見て、結城はいきをのんで様子を見守る。

「イクリップスって知っているか？」

「侵食ですよね」

「うむ。話によると、他の世界線を集合させ、よりよい世界を残す技法らしい」

「……どういうわけです？」

結城の顔はヘルメットで隠れて見えないが、明らかに声が暗くなつた。

主任は話を続ける。

イクリップスは、最近見つかつた事象だ。

どのように見つけたのか。

日本以外の国連の常任理事国を含めたEDFの支部・本部がある国が、

新たな新天地や人材・資源を求めてランダムにいろんな世界に人を飛ばしまくった。

その宇宙転移はEDF隊員のレンジャーやほかの兵科・他職員全てを動員した人海戦術にて行われ、

様々な過去・未来・並行・位相の世界線をめぐつていた。

そんな時だつた。

とある大層汚染で有名な人トツブケラスの国のEDF陽員の
人が、

“俺の世界線がないんだけど”と叫ひながら周囲に広報した

別はそれくらいならピニーレマンがモードだと思って、紺綺は全く気がしなかつただろう。

世界 残った世界綱は、その世界の中でより「アフリカ」が根付きを苦しめている世界だった。

幸いな事に統合された殆どの世界は E.D.H の設定介入がその世界の設定より強い影響力にある。おかげで、フォーリナーと手を組んでいるその世界固有の敵性勢力が、弱体化していた。

れていない。

更にこの世界紛糾一か 我々はどこでどう景響てるかも分かってい
ない。

「どうわけで、結城殿にとある世界に行つてもらいたい」「どこでしようか?」

「うむ。その世界は極東支部が最も多く世界線を開拓している世界に行つてもらいたい」

こうして結城は主任に言われた通りの場所へ調査しに行くことになつた。

• • • • •

やあ皆久しぶり！ レンジャーライド結城だ！

え、そろそろレンジャー1じやなくて、別の部隊名にした方がいい

いつて？

いいや。まだまだ極東支部は人手が足りない状態なんだ。

このような部隊名でも、2・3年は行けるだろう！

さて……最近は生真面目が過ぎたから、ふざけてみた。

後悔はしていない。決してな！

それはそうと、一か月ぶりの宇宙転移だ。

今まで私は他世界から伝授された技術を使って、火星あたりでフォーリナーを撃退していた。

なのはさんやネギ君は、元気にしているだろうか？

まああの二人ならなんとかしているんじやなかろうか。

今回主任から言い渡された調査任務だが、また同じ世界に行かねばならんようだ。

嫌というわけではない。しかし丁度いい機会だと思つた。

きつとあれもできている頃だろうからな！

ふう……テンションを上げ過ぎた。

今回行く場所は、例の四季彩る馨しい世界だ。

そこで今回の武装は……新たに『ストリンガーJ2-1』を購入し、

ロケランの『ボルケーノ3A-64』に戻した。

理由として、害虫が思つたより弱く物量作戦でくるからだ。

更に今の花達は、完全な軍事国家となり部隊の集中運用と編隊の組み入れをしており、かなり強くなっている。

よつて無駄に高威力であると、誤射した時軍事国家にEDFが責められその世界に居座りづらくなる。

もしその世界に介入できなくなれば、私の夢が叶わないどころかフォーリナーがその世界に根付き、F因子を花騎士に埋め込み我々の世界に投入してくるだろう。

これは看過できない。

というわけで、弱めの威力でありコストパフォーマンスやお財布に優しい武器を選定。

ストリンガーは貫通能力があるので、設定介入が生きている限り消滅するまで貫通するだろう。

これで木つ端共は吹き飛ぶだろうな。

「準備できたか、結城」

「はい、技術技師さん」

「では行つてこい」

「了解！ レンジヤー1結城、行きます！」

私は電力供給が完全復活した活気ある宇宙転移広場で、普通に転移していった。

一
な
!
?

「危なー！」

「おこと
失礼しました」

一隻を付けてなれ！」

私はこの世界に転移した瞬間
青色のマントを羽織った男性と物理的に合体しそうになつた。

たい。

•
•
•
•
•

復旧作業一日目。

私は原点種子から芽吹いた、アブリコット・キンギョソウ・シャボンソウのうちアブリコットのみ発見された果実をもつて、これの効能を知るため直近の世界である此処に訪れた。

花騎士という武人を、各国配備している連合国家。

いる元帥がいる。

元帥はアロツサムヒル出身の名家の子供。

その子は国全体かはぐれ害虫の被害にあつた際の損害があつたことに懸念を抱いた。

昔に起こつた戦により、少数精銳の傭兵システムの尊重が発生し

これにより相互共線が発生せず、メリットをデメリットのみで塗りたくつた。

結果がそれだ。

さすがに元帥もそれじやまざいと思つて、新たな戦闘のシステムを作り上げることにした。

更にこの時、被害を真っ向からうけたりリイウッドでも、花騎士という個人でなくシステムに問題がある、と一部が思い行動に移した。そして幾年が経過し、その子は戦術思想である『連隊構想』を作り出す。

その子は名家であるおかげで、進言が容易に通つた。

しかし通つたとしても、それをそのまま使うということはしなかつた。

よつて実証試験を行つた。

試験が成功し、その最中に出会つた人間により渡された兵法書を用いて、更に構想を練る。

その完成した『連隊構想』は、元傭兵たちに受け入れられた。

結果、害虫駆除に役立つとともに、前戦争で失われた男性の仕事が復活した。

さて、その子はいろんな功績と未曾有の事態・混迷の時代に移り変わることを考慮して、

初めての試み、初代男性『元帥』として連合国家の軍事力の舵取りを任せられた。

そんな偉大な彼と友人として何故か花騎士兼団長『蠍火』として、共に戦場に立つている。

彼は基本的にブロッサムヒルにいるようだが、不在だと駐留していたギンランに言われリリイウッドに来た。

此処は原点種子を貰つた場所だから、色々と好都合だつた。

「元帥と面会を……」

「誰だ貴様。最低階級の団長ごときが、元帥と面会を賜ろうとは身の程を知らぬ者ようだな！」

行つたとき、なんか黒い帽子を着た、全身真っ黒で刀を持つ女性にすごまれた。

あれ？ あいつってそんなに偉くなつたのか？

まさか、よくある強い権力を持つたことで、闇に堕ちたとか？

「なんですか？ 今は元帥様と女王様、元老院の老害蝗共が会議の中ですよ。

無礼者であるというのなら、ここで貴方の頭を一瞬で消し飛ばしますが」

装飾していえば非常に丁寧であるけれども、変に威圧感があるサクラさん。

胸にある虹色の勲章を見て、すぐに退散した。

どこもかしこも厳戒態勢で、入る隙がない。

団長の部下や配下、私を知っている花騎士はいないしどうしたものか。

そう思つたから、先に果実をもつて私に原点種子を持たせた人の家に行く。

しかしその人がいたと思われる場所周辺は、隕石が落下したのかと思えるほどクレーターとして存在していた。

まあ、不思議な種子を貰つたことは感謝している。だから安らかに眠つてほしいと思う。

情報はほしかった。しかししようがない。あの時だろう。

元帥となつた団長が初めてその姿を見せる公開演説の時に、フオーリナーと害虫共が開戦猶予時刻を設けたうえで宣戦布告してきた。

その先遣部隊は、リリイウツドの厳重な警戒の中、熟練した傭兵を各個撃破していくた。最終的に私や元帥の部下やその派閥に属する精銳中の精銳の花騎士が、周囲を鎮圧した。

勝利したが、その対価はすさまじいものだ。

公開演説に来場した一般人、貴族、花騎士になりたい普通の子供。

そんな大事な餌を無駄に消費させた。

そこからか、無駄にこの国をピリピリとさせているのは。

私はこのクレーターを一目見て、何も思い返すことなく去つた。

「あれ、ちょ、蠍火、なんでこんなところにいるのよ!?」

「ん？　ああ、なのは、久しぶりじゃないか」

「久しぶりね。じゃなくて、何でブロッサムヒルにいなかつたのよ！」

「私はＥＤＦの人間だからな。ここにいない事もあるだろう？」

「ほんつと自由人よね、アンタ！」

「そう褒めるなよ」

「褒めてない！　それより、団長が探してたわ。案内してあげる」

偶然街中で哨戒をしていたアブラナが、私を見つけて声をかけてきた。

私はどれが元帥団長のアブラナかわからなかつたから、非常にありがたかつた。

描写していないが、鈍色じやないマントを羽織つている団長とその部下や配下が、

何やら上司と部下の壁を無視した如何わしい雰囲気で街中を闊歩している。

その中でアブラナとかワレモコウとか知つた顔の花騎士達が、いろんな仕事に大童であつたので話しかけづらかつた。

見た目では全く分からないので、積極的なアブラナが元帥団長の配下であることに感謝した。

「しかし団長も大役を任されて、色々大変だなあ」

「大丈夫よ。あれでもブロッサムヒルの一領土を治める大貴族の息子なんだから」

「……なあ、市民と貴族の比率おかしくないか？明らかに住居地区が少ないように見えるんだが」

「貴族といつても色々あるのよ。あまり貴族と一般市民の差はないわ」

「なるほどな。それで、団長が貴族の息子であると、面倒なことは起らないのか？」

「私達、団長直属の配下が、身を呈して守つてるつての！」

私はアブラナに連れられて、先ほど刀装備の女性のところに来た。するとアブラナが通行許可証を取り出して、その女性に見せたところ私も共に入る事を許された。

「あの人は誰なんだ？」

「あの人はクロユリっていう、元傭兵の王宮騎士筆頭、その一人よ。

前の『公演会戦』にて右目を負傷し、女王や元老院を身を呈して守つ

た功績で今の地位についてるの。

分かると思うけど、超怖いわ」

あー、納得。

しかし眼帯は気付かなかつたな。全身真っ黒だから同化していたのかな？

後ろを振り返つて再度見ると、彼女の突き差すような視線と今にも惨殺するかのような威圧感が、周囲に漂つて見えるほどすごいを感じた。

世界花の幹回りを歩いて登り、王城に到達。王宮騎士団が出迎え、再度証明書を見せる。

ついに団長がいると思われる会議室に来る。

アブラナがノックする。

「団長、アブラナと蠍火、二名が参りました」

「入つていいよ」

入つてみると、そこには厳格な雰囲気を醸し出す服を来た男性がいた。

男性そのものは非好戦的な雰囲気を出して、いかにも安全なようにみせかける見てくれを作り出している。

だがその時たま見せる素顔に、狡猾さを思わせる様相に少々身震いしてしまつた。

「なんか、雰囲気変わつたな、団長」

「あ、ごめんごめん。色々あつたからさ」

そういうつて態度を崩してあくびをする。

「座つていいか？」

「あ、うん、いいよ」

面会場で一人残つてゐる元帥は、私とアブラナに席に座る許可を与える。

「偉くなつたなあ、団長」

「あはは。あんまり嬉しくないけどね」

「色々合わなさすぎだぜ」

「よく言われる」

和氣藹々とした雰囲気。

「蠍火、団長に何か用事があるんじゃないの？」

「そうそう。団長に少し、調べてもらいたいことがあるんだ」

そういうつて私は不気味な色を醸し出す果実を、机の上に置く。不気味と言つても、黄金に輝く果実なんだけれど。

「これは……」

「なにこれ」

団長は見た瞬間に、深く考える。

アブラナはけつたいなものを見たというような、怪訝の表情を見せる。

「なあ、蠍火。正直に答えてくれないか？」

「ん？ ああ」

以前は好青年だったが、今では王宮の政治とかにもまれてすっかりその目はくすんでしまつていた。

だからこそちよつとした声質変化で、どんな猜疑心に満ち溢れているかある程度把握できてしまう。

「これ、バナナオーシヤンの『キルクの遺跡』で発掘したのか？」

「いや。それ以前に私は、バナナオーシヤンとか言われる場所？ 国

？には行つたことがない」

「そつか……」

「で、団長。正直に答えたんだから、教えてくれよ。その、キルクとの不気味な黄金色の果実についてさ」

「いいよ」

そして団長から言われたのは、憶測だけれども文献の歴史年表を見るに信憑性が高まるちよつとした真実だつた。

大昔の大戦以前の話。

バナナオーシヤンという、リリイウッドの南に位置するその名の通りの南国があつた。

その南国と今のリリイウッドの境界付近に、賢者とも魔女ともいえるキルクがいた。

彼女はただの一般人であつたが、あるとき極大な力を持ち始めた。それが全ての始まりだつたらしい。

彼女が住んでいたのはただの掘つ立て小屋らしいが、徐々にそれが置き換わつて大きな城や信仰・魔力的なものを集中させるため祭壇を作つた。

その祭壇には、どこからか手に入れられた黄金の果実が祀つてあった。

その果実は徐々に羨望の目が向けられた。そう、あの魔女だけが口にすることが許されている神の実だというのだ。

信仰が果実となり、これを食すことによつて神としての力を増し、信仰する者に恵を分け与えるというもの。

しかしその口伝は、徐々に誇大・誇張され始めた。

その結果、戦争が発生した。

圧倒的な力を持つ魔女は、その神といわれる手腕により勝利へと導いた。

だがその結果小さな小競り合いや内紛等によつて、果実が奪われてしまつた。

それ以降果実は行方不明になつてしまつたが、黄金の欠片というものが歴史書に記載されるようになる。

ちなみにこのころから、害虫という言葉も出てきた。

今までは不定形の生物とか虫、人ならざる者として紹介されていた。

それがキルクの黄金の果実を失つたころの年号と照合された、数々の歴史書はこの年の異変を如実に書き記していた。

主にコダイバナといわれる太古の大昔、花騎士システムが生まれる更に昔から言われる其れの輝きが次第に減少。

結果的に、害虫と呼ばれる存在が周辺区域に出没し、初めて人同士以外の戦闘が発生した。

そこから激動の時代。

技術革新が始まり、浮島とか神の光、コダイバナの力を収縮した光線兵器の出現、世界花の力を食い荒らし力を増す害虫の出現。

最終的にコダイバナが枯れる事と引き換えに、世界の平和は一応約束された。

その平和に至る為の過程は、コダイバナの恵みを一気に解き放ち、巨大害虫の強制封印とキルクの浮遊城塞の破壊。

そしてコダイバナの機能を、他の世界花に分散して各個機能するようにして完成している。

ちなみにこの各個機能によつて、それぞれ国家と季節が発生したと
いう。

昔はコダイバナの機能により、大陸中が平均気温に維持され世界花もただの地域の個性化のための印に過ぎなかつた、と

団長が取り出した文献にのつてあつた。

今現在もバナナオーシャンに、過去の傷跡が残つてゐる。

例えばキルクの遺跡。それはここ最近、やつと花が咲いてきたこと。

最近まであの遺跡近郊は、低木や雑草しか生えていなかつた。

だがここ数年で、やつとヒマワリが自生はじめたんだと。

二つ目。それはバナナオーシャン周辺の地形。離島だつたり小規模の諸島があるが、

あれ全て浮遊城塞の破片。オーシャンキングダムとか言われていた君主制の国は、世界花と超絶な力を秘めた宝石により、空中に大地諸とも浮かんだ。

それが害虫との戦闘やコダイバナを使つた決死の破壊活動によつて、一気に破碎。

世界花はコダイバナの力によつて、五体満足だつた。それ以外は各地に分散。

昔はそれはもう、大きな半島だつたといわれている。

今現在各所に見られる湖は破片により発生し、川も大地浮遊と落下、上流の水の流れで形成されたもの。

それでもあまり各地に傷跡が見えないのは、コダイバナの恩恵の消

失と機能移転による気候変化。

夏という豪雨と強い日差しに充てられた植物は、すぐに生い茂り大
地を隠した。

「なあ、世界地図をみたけど、ここ、大陸の端っこじゃないか。外はど
うなつてんだ？」

「荒廃しているよ」

「本當か？」

「本当さ。コダイバナが蒸発して、害虫がはびこつて花騎士が殺されることによつて、

ワーガーデンは、滅びる。

なんか色々、聞いてはいけない事を聞いた気がする。

「おれ何知ってんだ?」

卷之三

「わ、わかりました」

静かに聞いていたアフラナは、冷や汗をかいだ。

「で、この黄金の果実なんだけど、今からたぶん私は本当の団長になるんだろう？」

か
?

「そういう途中だつたね、忘れてたよ。それとその提案は乗るよ」

配下につけられていない。

だから団長は許可したのだろう。

「次来るときまでには、見つけておくよ」

そういうつて、僕らは笑いあつた。

そりやそうだろう。なにせあの禁断の果実なら、こいつらに利益が

ある。

だが我等 EDF も黙つちやいない。腕輪を持たせれば、EDF の仲間になつて いるという事で優先させられる。

無限の弾丸や兵器をもつて脅し、奴らの優位性を覆してやる。

…

ふう。以前やつたことの復習は完了したぞ！

情報整理もできたし、何が起こつても柔軟に対応できるはずだ。
ああそ うだ。主任から言われた、エクリップスの影響も調べなければ
ならない。

私は一路、リリイウツドへ足を運んだ。

13：三途の花園

リリイウッドとブロッサムヒルをつなぐ白百合街道を歩いて、リリイウッドの中央区へ向かつて歩く。

その最中さつそく違和感を覚える。

それはリリイウッドの城郭都市が、6芒星城塞都市となっていた。更に上空に待機しているマザーシップから、カメラを通じて城塞都市を上から確認してみた。

するとその内部は以前リリイウッドの城郭都市そのままでありながら、多種多様な守りやすく攻めにくく仕掛けが満載な建築構造が見て取れる。

ほかにも以前あつた商店や家屋の配置が若干違つていたり、草木の茂り・連合軍以外の紋章等相違点があつた。

まさかと思うが、団長もエクリップスの影響を受けていなくなつたとかやめてくれよ？

もしもいなくなつたとすれば、あの奇妙な色の果実が虚無へ返されたことになる。

そうなればこの世界においての抑止力、それもかなり大きな力がなくなつたということだ。

さすがに以前の『公演会戦』のように行かないと思うが、大きな被害を出してしまつている。

その傷はたつた数か月で直ることはない。だから今奴らが再度威力偵察をしてくれば、設定介入が勝つた中で、元帥たちがいなければ確実に敗北してしまうだろう。

「まずいな……」

「何がまずいんですか？」

「何つて、元帥が……」

私は足を止めていたようで、誰かに呼びかけられた。

そして声がした方へ頭を向けると、セントポーリアがいた。

「……何かかわりました？」

「実はですね、昇進しちゃいました！」

「へゝそれはすごいじやないですか。あれから切磋琢磨したんですね」

「元帥団長の威厳のために、頑張つちゃいました」

「そうですか。ちなみに自由戦闘ですか？」

「そうですね。それとですね、団長さんが呼んでますよ」

よかつた。団長いるんだ。

ほつと安心。さて、道案内を頼もうか。

「どこにいるんですか？」

「ここですわあ」

此処つて……嗚呼、ここね。

私はいつの間にカリリリイウッドの花騎士学校の門前にいたようだ。なるほど、家屋配置等が変化していたのは、コラテラルダメージ……立ち退きのためか。

今は授業中だから生徒の出入りがないわけだ。

「それでセントポーリアさん。よく私を見つけられましたね。集合場所なんて聞いてませんでしたよ」

「そこはこれで何とかしますよ」

セントポーリアが片手に持った黒い奴を指さす。

それはどう見ても無線だつた。

あれ？ いつの間にこんなに文明が進歩していったんだ？

「こちらセントポーリアですよ、蠍火さん発見ですわあ」

「わかつた、戻るわ」

〈発見です？ 即刻撤退〉

〈了解、戻るぞ〉

うまく使いこなしてんな。

「というわけで、行きますよお」

「頼む」

私はセントポーリアの後ろについて、この大規模な公共施設に入つた。

大きな校舎が何棟かあり、状況に合わせた訓練所や大規模な運動場がある。

更に弓場や道場があり、何人かそこに滞在しており射撃訓練を敢行していた。

私が連れていかれた先。

そこには多くの生徒がいた。

ただその生徒が全て女子や女性で、男衆が全くいなかつた。まあ当たり前っちゃそうなんだけども。

しかしここに唯一の男がいる。

それは多くの女共の視線の先、尊敬や畏怖、他の感情もありそうだ

が威厳や異彩を放つ人物がそこにいる。

そいつは一人の花騎士と戦闘していた。

正直言つてあそこまで渡り合えるのはすごい。

しかも例の固定戦闘じやない。自由戦闘だ。

相手はあのウメ。レイピアによる一瞬の突きやペントガーゴンアタックが、そいつに容赦なく襲い掛かる。

だがそいつは剣の腹でうまく受け流して、膝や拳で上手く反撃している。

肉弾戦過ぎて以前の固定戦闘をしていた花騎士たちとは違う様相に、少し笑つてしまつた。

というか、笑つているのは私だけのようだ。

皆食いつてみている。

うーん。しかしこのウメ、どこかで見たことがあるような気がする。

あ、二人とも一瞬笑つた。こりやあ、あいつ負けたな。

そいつの剣や拳、脚を避けさせ最後の突きを放つ。

しかしそいつは、ウメに自身の着る羽織りを投げ、更に剣も投げる。流石にウメも少し驚くだろうな。でも、熟練した兵士は、そんな小細工なんて一瞬で悟れるもんさ。

ほら、チエツクメイト。物理的な意味の胸三寸で、レイピアの切つ先が止まる。

「参りました」

「フツ……」

その瞬間女学生の黄色い声の応酬。

「凄いな」

「ああやつて、たまには正規軍の力を見せているんですよ」

「……正規軍？」

「実はですね」

話を聞くところによると、連合国家の軍として花騎士を動かすこと自体は成功した。

しかし軍人になるばかりで、周辺の討伐とか色々おいつかないという。

更に軍人ということで、害虫退治以外は杜撰になつてしまつて地元住民との諍いも発生。

そこで一か月前に、騎士団という地元の花騎士ではない男性によって構成される自警団が、害虫やその他の雑務の兼用が難しいので退治だけでも花騎士に任せたいという要望がよせられた。

もちろんクレームという苦情も来た。

現地のトラブルは物資輸送の観念で言えば、懸念すべき最優先事項。

なにせ当地の住民によつて、これらの輸送等が滞りなく行える。

もしもこのまま花騎士の信用が失墜すれば、名声や威儀では發揮されない住人達の応援や援助がなくなってしまう。

最終的には住人によつて、物資の強奪が発生するかもしれないからだ。

そこでウメと対峙していたあいつ、元帥は考えた。

連合国家の軍を戦闘に特化した正規軍と住人の信頼関係をつなぐ警察機構を作ろう、と。

それが今の連合正規軍と騎士団というわけだ。

そして囮いはできたが内容だ。

基本的に戦闘能力やセンスで決定している。

根本的に戦闘が上手い花騎士は正規軍へ。その逆でほとんど戦闘せず、住民の安心安全のため働くのが騎士団だ。

また、こうやつて分割すると、住民の信頼や土地勘・戦闘の腕に関してばらばらになりがちなので、

全ての花騎士は一応非常時を考慮して、正規軍と騎士団の配置転換を行わせている。

周期は三か月単位。

まだ発足してそんなに経過していないが、成果は上々とのこと。

「きやあつ!?

「おつと」

いきなり子供の声が聞こえた。

その子供は吹き飛ばされていて、私の方に来ていたので受け止めた。

普通は吹つ飛ばされるとと思うだろうが、攻撃判定や吹き飛ばし判定もないで普通に立ち留まれた。

「元帥団長、何があつたんだ?」

「ごめんごめん。ウメとの立ち合いを希望する者に、手合いをさせてたんだ」

元帥はこつちに駆けてきた。

「あのウメさん、例の戦闘処理の時味方になつてくれた元傭兵だろ? 大丈夫なの?」

「いけるいける。あの人優しいから」

「そつか。なら安心」

お互に笑つた。

「さて蠍火。そのこが君の花騎士だ」

「へえ。まだ餌に……あ、いや、役立てるほど強くないな」

「(餌?) しかたないよ。あの果実の適合者が彼女しかいなかつたんだから」

「そりやしゃーない」

危ない危ない。思わず戦闘方針を言い出しそうになつた。

私はこの子の髪の手触りがいいので、触りながら話す。

「で、どんな戦闘能力を持つているんだ?」

「え、ステータス確認ボタンっぽいのないの?」

「は？」

「本当？」

私はこつちの世界の事、全く知らない事を思い知らされた瞬間だつた。

しばらく沈黙した後、おもむろに元帥が口を開く。
後ろではウメさんが、手合いの続きをしている。

「緑の『キヤラ』つてのを見るか押して」

そういわれても、何もないんだけど。

〈設定介入の順序を変更し、この世界の仕様を発動します〉

マザーシップがものすごいことを言い出したと思うと、目の前にいろんな表示が出てきた。

そこで緑枠の『キヤラ』を見る。

「あ、出てきた」

「じゃあ、『キヤラ確認』

「はい、押した。アプリコットが一本、一匹、一人いるけど

「詳細」

「あいよ」

すると現状のアプリコットの容姿が出現し、好感度や出身・所属國家、数値化された戦闘能力、アビリティやスキルを確認できた。

「年齢はないんだな」

「まあ、そんなに必要な情報じゃないから」

アプリコットの戦闘能力は、子供の時点で階級が☆1を考えれば普通……なのかな？

「ちなみに、彼女の出身国家見てみてよ。口には出さないでね」
出身？

あ、コダイバナになつてるじゃないか。それになにやら神々しい霸氣もでているし、なんだこれは？

「気付いたと思うけど、その霸氣は素質だよ。それは団長でしかわからぬ仕様だから」

「仕様つて……まあ、深く突っ込まない事にする」

「そうして。お願ひ」

お互に黒歴史を見たかのようなくらい雰囲気になつてしまふ。
しかし手元にいた元気の塊が、唸り声をあげる。

「うああああっ！」

「ん？ どうした？」

「あなた、わたしの団長さんなんですよね!?」

「そうだよ。初めまして、蠍火です」

私は彼女の目線に合わせるように座つて会話をする。

これは旅館でお母さんに、お客様への対応として教えられたものだ。

当時は小さな物で、お手伝い感覚だつた。だから気軽にできた
なあ。

「え、あの、えつと、アプリコット……です。戦闘はちょっと苦手です
……でも、団長さんが励ましてくれたら、

頑張りますので！ あの……よろしくお願ひします」

「うん、よろしく」

私は彼女と握手した。優しくなんざやらない、ちゃんと握る。そして頭を撫でてから立ち上がる。

正直ヘルメットをかぶった奴が団長だなんておもわないし、素性も見えないし伺えないから怖いだろう。

だからその胆力を褒めるため、撫でただけだ。他意はない。

さて、餌になるよう、教育するか。

「よーし、最初の花騎士が決まつたついでに、騎士学校を見ていく
れないか？」

「騎士学校。養成所か。これから必要なものだからなあ。見ていこう
か」

「流石蠍火。誘いに乗ってくれると思つてたよ」

そういつて次の休み時間まで、ウメの戦闘術の講義を聞いて暇つぶ
しをした。

この戦闘術はある一定の範囲に収まつてゐる花騎士しか通用しな

いらしい。

例えば、持つている武器の特性が槍やレイピア等、突くことに特化しているまたはそれに適している武装。

上記の武器を持つている花騎士見習いが、この講習を受けている。

また、こういう上級騎士による講習は、結構な頻度で行っているとのこと。

まあ元帥なら余裕ができる事だろうし、この騎士学校自体が元帥が押し通したものだろうと思おう。

「ここは花騎士未満の見習いが、自分を高める場所だよ。クラブとか部活とかって名前で活動してる」

長期の休憩時間なので、昼食を取つたまたはとろうとしている子がそれぞれの活動内容の主要拠点である

部室に集まっている。

そこでは自分たちが好きな事をして自分らの特性を掴み、花騎士として成長できるよう精神も養う場所らしい。

確かに好きな事をしているが、花騎士は花言葉につながる人間にならなければ、花騎士になれなんじやないか？

そんな疑問を元帥にぶつけてみた。

すると元帥は過程を吹つ飛ばして、とある場所に連れて行つてくれるという。

それはこの学校のある課程を修了した見習いを連れてくる、特別で神聖な場所であること。

その場所は校長室から地下へ直に行けるが、校長である人間、つまり元帥がいなければ扉どころか地下への道は開かない。

暗くジメジメした場所。しかし途中にある鉄格子にある扉や壁と思つていた扉が開いていくにつれて、

空気が重くなり湿度や温度が適温になつていくのを感じた。

マザーシップとの交信は問題ないな。さすがフォーリナーの技術を流用しただけある。

「ここがその場所だよ。外ではこここの主を、主水司つて呼んでいるんだ」

「……なるほど。そりやそう呼ばれるだろうな」

アプリコットは、外でウメさんと共に待っている。

その理由は神聖だからという意味もそうだが、ここは花の力が強すぎるんだろう。

目の前にはリリイウッドの世界花が咲いていた。

大中小そろいそろつて開花している。

周辺には澄んでいる水が溜まり地下水が湧き出でて、苔や淡く光っている草木が生えている。

中央には例の世界花が生えていて、まばゆい光を放っている。

「分かつてると思うけど、男は『基本』花騎士になれない。それは花とは種を作るものだから」

「しつてるさ」

ここに光を浴び、水を飲むことで自身に一番合う花の力を授かる。もしもそれがないというものはない。それは元帥が見極めるからだ。

だが例外が少なくともいる。その場合、花騎士の力を受け止められる器がなつておらず、

花言葉そのものが自己を侵食し自分が自分でないように思い、自己嫌悪に陥つたり自己崩壊を齎してしまう。

崩壊が発生するより前に、花騎士の力が抜けることが多い。

しかし抜けなかつた場合、自分の容姿も相まって廃人になるといふ。

「容姿？」

「外で花騎士の力が漏れ出したアブラナたちがいたでしょ？十分に自分に合つていれば、容姿の変化は全くない」

他にもその一族であれば、容姿の変化は全くない

「ちょっとまで、一族？ どういうことだ。今まで思つたこともなかつたが、花のあの容姿はどうやって決めているんだ」

「……」

話によると数年前の戦争で、花騎士の前身である花使いの血筋が粗方死んでしまつたらしい。

だから人為的な処置を施して、『花の力』＝『世界花の恩恵』を与える害虫を殺せる強大な力を取得させ、

戦力を増強させているんだとか。

そしてその花使いこそが、この花ごと決まっている容姿の大元だということだ。

「そういうえば、トイレに鏡なんてなかつたな。そういうことか」

「そういうことだよ。そんなのあれば、自身の顔が変化したと気づかせれば発狂待つたなしからね。

だからどんなに過程が終わっても課程を修了しなければ、ここに来られないようになつていてるんだよ」

三年間でとれる単位を一年で取得しても、飛び級できずにそのまま三年まで過ごして卒業できるということと同義だ。

「花騎士は自身に花の力を保持できる性格になる。性格であるだけで、個人の好き嫌いとか個性とかは死ににくい。

たとえば恋に臆病になつても、部屋の掃除は大好きだとか。そういうのは変わらないもんだ」

他にもマイペースだつたり寛容であつたり、器が大きい尊大な人物であれば容姿の変更はないらしい。

今までそんな奴見たことがないんだけどなあ。

「一応この騎士学校は前からあつたんだけどね」

「あつたんかい」

「それの所有権を統帥権で使つて、僕に移譲させたんだ」

「元々、花の力を軍事的に使わせるための育成所ではなかつたんだろうな」

うな。

民間事業で退治や護衛のための学校のような側面があつたらしい。

だが時代が時代なので、早急に方針転換。このように軍人養成所になつた。

「さて、花の力を直に受けたんだから、蠍火も見えてくると思うよ？」

「何が……ん？」

肩になんか、童話に出てくるような何かが乗つてた。

「…………なんだこれ」

「驚いているようで何より。彼らは妖精、または精霊つていつてね、花騎士の花の力を伸ばす役割があるんだ」

「だがそんなことをすれば、自己崩壊になるんじゃないか？」

「だから経過を見てやらないといけない。花騎士はその力を充分に發揮または、保持し続ける素質を持った人間だ。

その為いくら精霊たちの力を吸収させても、あまり異変がない。容貌の変化はありそうだけど」

ほかにも服の変化や上方の変更、場所ごとに違う精霊によつてその土地固有の性格になつたりすることもある。

色々複雑なものだ。

「また、アンプルウという花の液を使えば、自己の補強もできる」

これは本体の素質や能力の底上げらしい。また精霊や妖精は、生きた年齢ではなくその恩恵や精霊自身の強さによるレベルがあり、

大きく花騎士を手助けしてくれる。

使用または吸収した場合、精霊本体は消滅する。だが自我を持つている精霊や妖精はほぼいない。

だがコダイバナの力を受け取つている奴だけ、自分の意思で動く。

外で見られる種は植えてもよし、食べて体力や花の力を回復するのもいい。

花の力は受けるための器があり、そいつの補強や回復をしなければ害虫相手に脆くなつてしまふ。
あの公演会戦で桜やほかの花騎士が、結構あつさり殺されたのはそういうことだ。

基本的に花の力という強化値があつて、それが削られていく。しかし自身の器が最低限の力は維持できるようにするが、種等で回復できなければ最終的に花の力は霧散する。

「種？」

私は元帥に地上へ戻る道すがら、反復して聞いてみる。

話を聞いているとき、よくわからなかつた重要な単語の一つだ。

「種というのは、花の力が具現化したものなんだ」

「具現化ということは、具現化していないものもあるんだな？」

「そうだよ。そして、それも使う事ができる」

「どうやつてやるんだ？」

元帥は服にある内ポケットから、淡く光る種を取り出して指でつぶす。

すると種が消え、光の粒が出現。それが元帥に吸収された。

私は光の粒が吸収されるたびに、光の粒の大きさや輝きによつて元帥の周辺が淡く光つたことを認知する。

「僕は初代団長で、特別に女王から団長任命権を譲渡されている。団長としての素質がある人物だけを選抜、任命して国と軍に従属するように言い渡している。

その為の契約の一つとして、花の力を疑似的に扱えるようにしたんだ」

そしてその花の力を扱うというのが、先ほどのキャラ確認という仕様ステータス・花騎士のみ効果がある好感度視覚化。

上記の他に、戦闘中に花騎士の援護ができるソーラードライブを使うことができる。

種や花の力を食つた害虫を殺すことで、団長に振り分けられる花の力。

一定の力が溜まると、念じた場所に攻撃できる。

ほかにもこのゲージを消費することで、下がり続ける花騎士の継戦能力を回復・維持することができる。

別に消費するわけでもなく、害虫を倒しまくれば花騎士に花の力が戻つてくるから安心だ。

「種つて、そんなに重要だったのか」

「勿論。種にも種類があるけど、一定以上の数がないと使えないんだ。しかもその種は花騎士を作り出すことができる。でも、種の力は不安定だから、素質が低い花騎士になりやすいし、

精神が安定していなければ、一般人に帰化することもあるんだ」

しかもその特性を生かして、一般人男性が花騎士の力を手に入れて強盗なんてこともしていたという。

あまりの力と精神的な疲弊が大きすぎて、廃人とかして見つかった

とか。

勿論戦闘した花騎士は、ぼろぼろの状態で帰還している。

団長のシステムがなかつたころ、男性は色々犠牲にすることで花騎士になれたようだ。

「だけど、もう、無理なんだろ？」

「いいや。団長になるというのは、ソーラードライブも使えるという事。

これは世界花の力を正しく還元しているという証左でもあるから、団長になれていない人はみんな等しく花騎士になつちやう」「ということは、私もなつてしまふんじゃ？」

「そうだね」

「でもさ、団長任命権を持つているんだろう？」

そういうと元帥は笑つた。

なんと、『連隊構想』の実現化のお礼ということで、ブロッサムビルにて元帥と同じように女王公認の団長にしてくれるという。

「……それって、何か変わるのか？」

「各国の首脳とほぼ対等な地位になるわけど、どこかが不満？」

E D F にとつてこの上ない条件だと思うけど

「あー、E D F について話していたかな」

「リリイウッドに行く前のカフェテリアで、お互に情報交換したじやないか。もう忘れたの？」

色々あつたからなあ。忘れていてもしようがないだろう？

まあ、よくないがな。

そうして話しているうちに、地上に出てきた。

そしてこの校長室を去つて、外に出る。

「お待たせしました」

「おかげり。では、ブロッサムビルへ行こうか

「もう行くのか」

「何事も早い方がいいと思うがね」

それは同感だ。

私はアプリコットに、アプリコットになる前の事を聞きながら、百合街道を東へ進む。途中害虫が出現したが、設定介入をEDF側になるよう調整されたので、各自自由戦闘になつた。

おかげでウメさんの強襲突撃と元帥の剣技によつて、即座に討伐された。

本来ならば花騎士が巡回しているはずなのだが、今の時間丁度巡回間隔に隙間が空いたようだ。

「ふむ……元帥」

「分かつてます。騎士団に取り次いで、こちらとの息を合わせられるようになります」

つまり巡回できるだけの花騎士が、騎士団の方へ分割されたのになくなつたという事だ。

多数いたはずの花騎士が、『公演会戦』で殆ど戦死。

更に騎士団への戦力分散で、更に周辺の治安が低下しているようだ。

「今はまだどうにかなつてゐるけれど、もしもまずければもつと徵兵して種で仕立て上げるといふ事もできる」

「だがそれは最終手段だ。あとまで続かないぞ」

「分かつています」

花の力を代々使える一族は、幼いころからでも花騎士として戦える能力を持ち合わせている。しかしその血筋がほんなくなつていつてしまつてゐる現状では、花騎士は量産型となつてゐる。

だから種なくして花騎士の量産は、時間や量がなくなつてしまつらしい。

元帥は今現在、巡回間隔が空いてゐる事を懸念して、無線で応援を呼んだ。

「——はい、お願ひします。呼んだから合流と到着を早めるため、速く行こう」

「と言つても、初級花騎士が一名。早急にはいかんぞ」

「ええ、可及的速やかに行きましよう」

というわけで、私はアプリコットの手を握つて、離れないように連

れていくことになった。

彼女が花騎士になる前は、花の力と漢方を合わせた新たな薬剤で、人の治療をさらにやりやすくするという研究をしていたんだとか。彼女はもともと漢方屋と医者の娘で、両方の特性を活かせる何かを作りたくて、いろんな国を巡る機会がある花騎士養成学校に編入したとの事。

親は花騎士ではなく一般の生まれなので、娘が貴族相手にポーカーフエイスができるか、と心配してくれたんだと。

流石に学校側もバカではなく、貴族組と庶民を一組にしてそれぞれの対応を教えてくれた。そのおかげで、上級花騎士やほかの貴族に、変な目で見られたことはほとんどないという。

「こう見えても、ファイールドワークは大得意なんですよ！」

「そつかそつか。ならば、日にちをまたいで不眠不休で歩いたことは？」

「流石にないです」

首を横に振つて、そんなことあり得ないみたいな顔をされた。

そつかあ。こっちの花騎士は、ずいぶんとぬるくなつたんだなあ。まあ紛争なんてなく、害虫に対しても昼と晩の交代制で当たつていたら、自然とそうなるだろうな。

それに大規模な戦争なんて、約千年前に終わつたらしいしな。
しかし、後8か月程で全面戦争になる。

それまで、どれだけ花騎士を補充し、稼働率を上げられるか。
見ものだな。

私はしばしばトランシーバーを使う元帥を見ながら、ウメさんとも話した。

主にアプリコットの戦闘能力に関してだ。

意外に評価が高く、視野の広さ・目線の鋭さ・勘の良さでいえば、トップクラスのこと。

しかし継続した戦闘や広範囲での戦闘・伍長としての指揮に関していえば、

どうあがいても無理という見解。

だがそんな能力でも、実際に自分の命がかかわってくれば自ずとそんな能力を得るだろう、と

ウメさんはそのように評価した。

「至急！至急！ 極限指定害虫と交戦せり！ 直ちに応援を求む！」

トランシーバーから、雑音と戦闘音まじりの急報が知らされる。流石に応じない訳にもいかず、私・元帥・ウメさん・アプリコットで現場に急行した。

向かう途中、爆発音や閃光が見えた。

「私が先行するから、戦闘準備を。元帥は二人を連れて、安全な域から後に集まるであろう応援をまとめ上げてくれ」

「了解！」

元帥がそういうと、ウメさんはポケットから種を取り出して握りつぶす。

種から出た光は、この4人に吸収される。

アプリコットの頭に飾つてあるカチューシャに咲いている花が、淡く光りだして彼女の魔力を操作する腕輪も光り輝きだした。

それを見届けて、ウメさんはものすごい速度で戦闘域へ向かつていった。

私も既に持つていてロケランの『ボルケーノ3A—64』を『ストリンガージ2—1』に持ち替え、遠距離戦闘ができるようにする。

最初にボルケーノを出していたのは、雑魚が出てきた場合の保険。面制圧ができるため、取り逃しがなくなるからだ。

「——イチゴ、攻撃の隙に援護射撃！」

「はい！」

「ボピー！ハクモクレンの花力解放後、隙をついて攻撃しろ！攻撃対象を変更させるだけで構わない！」

もし失敗しても、ウメ殿が埋め合わせてくれる！」

戦闘指示を出している従軍軍師。そんな彼こそが、団長だ。

彼は元帥に気づくと、指示を出しながら近づいてくる。

「状況は？」

そんな彼に状況を聞く元帥。

「私の部隊でなんとか凌いでおりますが、びくともしません。反撃に出られると、

手も足も出なくなるかもしません」

「わかつた。すでに応援は出されている。だから、ここは足止めだ。いいな？」

元帥が私達にも確認を取る。

しかしそんなことを言われてもなあ。すでに攻撃しているんだが。

「キイツッ！」

ドズンッ

音速よりも速い弾速。奴の反応の方が、音よりも早かつた。流石に確殺をセールスポイントにした武器だ。反動が強い。

敵というか、カマキリ。黒いカマキリがよろけている隙に、今の鎌の可動範囲外からウメさんがペンタゴンアタック。

しかしカマキリはそれを飛んで回避し、羽の風圧で怯ませた。

ウメさんは風からすぐに逃れて、空中へ突撃し片方の羽を破壊する。

奴は落下し、その間にほかの花騎士が追撃していく。

正直、あまりの脆弱さに欠伸が出た。

すぐに戦闘終了するだろうと思つた。

だがそうではなかつた。

奴が両手の鎌を、小さく振るうと団長の花騎士が大きく吹き飛ばされた。

「お、おい！」

「大丈夫だ、問題ない」「大丈夫です！」

ハクモクレンとイチゴは、心配する団長に声をかける。

団長は安心したのか、地面に膝を落とした。私と同じ茶色のマント。

きっと任命されたての団長なんだろう。

ん？するとなんだ、あの極限指定害虫は、経験皆無な輩に倒されそ
うになつてゐるのか？

私が思案している合間に、ウメさんは羽を攻撃して一撃で壊した。

羽が弱いのはわかるが、極限指定害虫だぞ。

もつとよく見てみると、羽がそんなに大きくなく、脚が太く大きい。
これじゃ重くて、ほとんど飛べない。

実際に先ほどは風圧を起こすだけで、傭兵ウメさんに簡単に抜かれ
ている。

私が打ち抜いた事を抜きにして考えてみれば、奴はもともと地上戦
特化な奴だとわかつた。

つまり、攻撃を受けてしまつたあの団長の花騎士は……。

「よし、コンビネーションアタックだ！」

「はい！」「わかつた！」

花騎士が動こうとした瞬間、団長の花騎士に細い光が幾重にも走
る。

その瞬間、花騎士の肉体が16分割された。
「へ？」「え？」

団長と元帥が、あつけらかんとした表情を浮かべる。

その間に地面に転がる16*3の花騎士の欠片から、大量の血液が
噴出し地面を真っ赤に染め上げた。

「ヒツ」

アプリコットは青ざめた表情をして、口に手を当て後方にある茂み
に入つていった。

ここは平原なので、その様子は簡単に見て取れる。
「ふーん。で？」

私はストリンガーで、奴の目を射撃する。

カマキリ野郎は態勢を崩した。その隙にウメさんがペントゴンア
タックを決める。

またカマキリが態勢を整えたとき、攻撃する部位や足を執拗に射撃
して攻撃阻害を行つていく。

「嘘……嘘だろ……イチゴ…ボピー…ハクモクレン……！嘘だ、嘘だ

「……！」

うずくまつて地面を殴りつけている団長と歯を食いしばり拳を強く握っている元帥。

私は彼らが花騎士に對して抱いている感情は、殘念ながら兵士に對してしていいものではない。

兵士は数字だ。人間ではない。

元帥はわかっているだろう。しかし、少數人であればあるほど、感情が向きやすい団長はまあ、訓練だと思えばいい。

寧ろよかつただろ。後に味わう感情を今、味わつておいてさ。

今は傭兵とEDF・元帥がいる。だから安心して絶望し、悲しみ怒れ。

それを次の機会に活かせればいい。

私は慣れたのかつて？

大事な人を目の前で食われた私にとつて、そんなことどうでもいい事だ。

「対象の撃破を確認」

ウメさんが奴の頭を切り飛ばし、奴の肉体が崩れ落ちた。

奴の肉体から光の粒が出てきて、大地や団長・元帥・私に吸収される。

そして黒いカマキリ『切り裂くモノ』は、徐々に透明になつていきこの大地に還元された。

〈遠方に威力偵察の枠を外れた害虫が向かってきています。
また元帥が周辺に張り巡らせてある探索網の一人、アブラナが一分後に接敵します〉

嗚呼なるほど、元帥はこいつらを呼ばなかつたんだな。

呼んでいれば、『早く呼んでいれば助かつたのに！』だろうなあ。
くだらない。

多数の命（地球上総人口95%損失）が散りましたが、フォーリナー
を撃退し

宇宙転移技術を鹵獲出来たので問題ありません。

汝曰く、戦略は戦術を上回る。

「元帥。団長を退避させてくれ。今から第二陣が来る。さつきのは威力偵察だ」

「何!?

「ウメさん、アプリコットを頼みます」

「わかつた」

「待て、蠍火。救出に行くのか!?」

元帥。今それを言うのか?

ほら、団長が元帥をにらみつけている。

「何を言つているんだい、団長。私は威力偵察をしてくるだけで、何もこれらを通つてはいる『行商人』の安全を確保しに行くわけじゃないんだぜ?」

私は少し大きく団長に聞こえやすいように、ある程度ゆっくりかみしめて言つた。

流石に強調部分が伝わったのか、元帥は頼んだといつて団長を後方へ移動させに行つた。

『ルールオブゴッドー5』

扇状に飛んでいく光線は、この草原の奥にある春の季節咲き乱れる木々の中に潜む敵を一掃した。

しかし更に奥から敵が来ている事を、レーダーにて赤点の量で判断した。

またレーダー範囲外だが、私が向かっている方向に仲間が一人いる事を青点の数にて確認する。

これがアブラナだろう。

接敵していたが、先ほどの砲撃で敵が吹き飛んだようだ。だが次の敵とぶつかっているようで、戦鬪音が聞こえる。

私は『ボルケーノ3A-64』に持ち替えて、周辺を制圧していく。

木々が焼け落ちようが知つたことではない。

我等地球防衛軍は、地球を守る事が第一任務である。

財産・命その他もろもろは、我等の守備範囲外だ。

壊れないように、神にでも祈つて置け。

「なのは、いるんだろ！」

「あたしはアブラナよ！　つて、またあんた？」

「分かるだろう？」

「あたしをそう呼ぶのつて、蠍火しかいからわかりやすいわ。
兎に角、害虫の討伐を手伝つて」

「言われなくてもするさ」

こんな乱戦になるなら、アサルトライフルを持つてくれればよかつた。
幸い『チョイヨワ虫』が、私のもつボルケーノで確殺なのがよかつた。

レーダー上軽く百は超えていそうだ。

「私が突っ込む。なのはは、私が漏らした害虫を仕留めてくれ
「わかつたわ。やつてるつての！」

アブラナは周囲の雑魚を蹴散らして、後方へ下がる。

私はボルケーノを射撃しながら、最前線へ赴く。

これからするのは、一般的な攻略方法。

たかつてきた奴を自身もろとも爆破させることだ。

ドカアアアン!!

心地よい音が響く。

次いでに私の体も爆炎に包まれるが、ドロップしている光の粒と回復アイテムを入手することで、即座にリカバリ。アーマー値を全快にしてやつた。

「ちょつ!? 無茶苦茶するわね！」

「これがEDF、レンジャーの戦い方だ」

戦闘していると、レーダー上に不自然な塊が見えた。

私はすぐにストリンガーに持ち替え、そちらに向かつて射撃する。すると赤点の塊は晴れて、移動を開始していた。

私はできる限り撃ち込もうとしたが、奴はいつの間にか私の隣に来ていた。

「なつ……！」

私は反射的にその場から緊急回避する。

そしたら私がいた場所に、鋭利な刃が振り下ろされていた。

奴は女王蜂だ。体色は紫で、名前は『シユツルムガイスト』。

正直言うと、レッドカラーよりも速い！

ドゥン！

ストリンガーが音速を超えていたため、一応女王蜂にあたる。

しかし当たればの話で、ほとんど当たっていない今、今後の展開はまずいことになると思われる。

まあ非常に良くなないね。

奴が速過ぎてアブラナが対処できていない。

私も反応できるが、振り向く速度よりも速く移動するため、照準を合わせられない。

「くそっ！」

アブラナが目の前に来た蜂を攻撃するが、雑魚に攻撃され怯んでしまう。

その隙にシユツルムガイストの鋭く大きな刃である前脚が、彼女を襲う。

流石にアブラナもタダではやられないのか、その刃を受け流してそのまま流し切りを決める。

成功したが、片方の前脚も忘れていたようで、アブラナは片腕を負傷する。

「なのは。応援は呼べないのか？」

「無理よ。皆、何かしらの敵と対峙中。無線に誰一人出れないわ」

これは危機的状況だ。

マザーシップからの応援？ バカ言うんじやない、EDFのしかも敵となつている筈の生物を出せるか。

EDF隊員のみならまだしも、この世界じゃ蜘蛛も蟻も敵だ。

もしも出してしまえば、確実にEDFはこの星からはじき出され

る。

はじき出されなくとも、敵対的な態度を取られてしまうだろう。
それはなつてはならない状況だ。

ならば生物ではないフォーリナーは？
残念ながらアルゴはでかすぎる。のが大きいことのデメリットは
わかりやすい。

そのせいで彼らには一方的にやられるだけで、時間稼ぎなんざでき
ない。

期待するだけ時間の無駄だ！

「……アブラナ。お前は戦略的撤退をしろ。私がこいつを引き付け
る」

「はあ？ バカ言うんじやないわよ」

「馬鹿を言つているのは……っ！ お前だ！」

私はボルケーノで適当に雑魚を処理しつつ、遅い来る女王蜂の斬撃
を爆発によるやられで無敵判定になりつつ回避する。

そして奴の眉間に、ストリンガーの射撃を食らわせてボルケーノに
よる、タクティカルファイアを敢行。

射撃の反動を消して隙をできるだけ無くし、奴の攻撃から逃れる。
アブラナのほうは、手に持つ剣で周囲の雑魚や少々強いだけのイモ
ムシ？を切り倒す。

偶に花力解放をして、まとめて撃破しているが第二波の威力を削る
ほどの効率ではない。

「私はEDFのレンジャー1結城だ！」

EDFとは、市民を守り、地球を守り、誇りをも守るもの。

フォーリナーは地球を支配するため、全てを攻撃した！

我々は母なる星を守る為、逃げも恐れもせず立ち向かつてきた！

殺せ？ もちろん。 死ぬ？ だからどうした。 刺し違えろ？
上等だ！

ぶつ殺してやる。 死ぬことになつたとしても、後の奴がやつてくれる

私は本来守るべきEDFの矜持を、その場でアブラナを守りながら

叫ぶ。

回復量をダメージが覆しつつある。

光の粒を溜めても、『ソーラードライブ』の使用方法がわからない。様々な要因が重なって、私は『死』というものを感じつつあつた。だからこそ、私はこの世界から消える前に、戦力を温存させるために特攻を仕掛けることにした。

初めてだ。

いや、そうでないかもしれない

でも、これは、酷く懐かしく、私を殺した、一つの感覚。

“痛み”

「グッ……！」

『シュツルムガイスト』が『チョイヨワ虫』や『戦闘ブンブン』を、指揮するかのように波状攻撃を仕掛けてきた。

私のボルケーノで焼き殺すよりも早く、その海嘯は私を襲つてき

た。

目の前に集中してしまつたことにより、目の前以外から攻撃を食らつてしまふ。

それは攻撃でもなく、一つの嵌め殺し。

緊急回避の先に、『戦闘ブンブン』の死体が沢山積み重なつていた。殺しまくつたことにより、浄化がおいつかないのか単純に死体消滅する猶予秒数が足りていないので、詰みあがつていく死体。これに引っかかってしまい、私は女王蜂の攻撃を受けてしまう。

その瞬間、アーマーの一部に映像のブレのようなものが走つた。

それが私を変え、殺した原因である感覚だ。

攻撃を食らつた部分が酷く熱く、やられた部分から電撃的に全身に痛みが走り渡つた。

味わつてしまつた、設定介入。

思い出してしまつた、過去を。

「ぐあっ……がっ……うあああああ！！」

強烈とか痛烈とか、そんな言葉では表せない痛み。

脳が危険を知らせてくる。裂傷から、見たことがないような真紅の液体。

熱い。味わったことのない鼓動が、胸の奥から鳴り響きそれが一鳴きするたびにその赤いものが外へ出していく。

ドサツ

私は地面に倒れ、武器を手放してしまった。戦場では一度たりとも、武器を放した事がないのに……！

痛みによつて、私は目の奥から何か熱いものが出てくる。
それが口に入る。 塩辛い、液体。

私は目の前が突然暗くなつたことに驚き、上を見た。

そこには『シユツルムガイスト』が、二つの刃である前脚を持ち上げており一気に終わらせようとしていた。

「させらわけには、いかないのよ！」

そういうと、アブラナが私と奴の間に割込み、花力解放をする。
しかし奴の体に少し傷を入れる程度で、奴の前脚によつて軽くあしらわれる。

これによつてアブラナは武器毎打ち払われ、私の近くに落ちた。
彼女の武器は真つ二つに折れてしまつていて。

アブラナはその剣を見ずに、ずっと女王蜂をにらみつけている。
そしていつの間にか落ちていた『ストリンガーJ2—1』を拾い上げ、胴体を撃ち貫いた。
体液が飛び散る。

緑色の鮮やかな体液。それを私達は、まともに浴びる。

そう、『ザントガイスト』というサソリの体液を。

奴は先ほどの攻撃が急所にあたつたのか、その間に入つた勢いのまま近くにある桜の木にぶつかつてへしやげた。

そして目の前には、『ストリンガーJ2—1』の反動で動けないアブラナと、

首をはねようと前脚を振り上げている『シュツルムガイスト』。私はただ女王蜂への殺意を持ったまま、痛覚の海におぼれたままだつた。

何もできないまま、終わってしまう。

くやしさと悲しさの中、奴への恨みと憎しみをさらに強く抱く。

そんな中『ストリンガーハード』の反動とリロードで動けないアブラナは、

私の方へ振り向いて困り顔か泣き顔かわからない表情で、ただ謝つていた。

「ごめんね」

「クフッ」

何か言おうとしても、痛覚の中で全身の感覚が抜けていき体の重さにだるさを感じてしまつていた。

しゃべろうとしてもスースからヘルメットへ私の体液が入つてきており、

しゃべる事ができない。

鉄の味を噛みしめながら、徐々に痛覚から気分の良い感覚に包まれて意識を放しそうになつてしまつた。

「キシャシャ」

目の前の蜂か？ アウトしていく、何もわからない。

とにかく終わつてしまつた。

ごめん……なさい、お母さん、お父さん。

そう彼は非戦闘員の団長を送った時、丁度そこに居合わせた騎士團と連合軍、そしてその長官を連れてきたのだ。

彼らはマザーシップの攻撃可能範囲内に入っている。

しかし元帥団長の持つEDFの腕輪により、敵性勢力として除外されている。

そのため花騎士は敵ではなくなっているのだ。

だが敵はどうだ。

実際に結城を手にかけており、花騎士を撃破している。

まあ腕輪云々の前に、情報管理はマザーシップに任せていたので、

腕輪なんてなくとも簡単に勢力の見分けがつくというものだ。何よりも、敵とされる害虫全てからF因子が検出されている。

〈星系惑星内原生生物に、初期F因子とは異なる因子を観測。

ただちに回収し、『研究所』へ送ります〉

??? 「確認した。解明を急ごう」

〈殲滅、第一段階開始〉

マザーシップは、上を見上げ理解不能として行動をしない害虫を一掃。

その瞬間害虫全てが、マザーシップを襲い始めた。

そこらかまわず体当たりしてくる害虫。

おかげで少々の被害を受けてしまう。

「「キシヤアアアア!!!」」

『戦闘ブンブン』や『シユクーラ』、『ライヒーン』といった雑魚が、悲鳴をあげ一気に墜落していく。

統率者である『シユツルムガイスト』は、それを行つた者を発見する。

決して、人ではないが。

〈『蜘蛛型巨大生物2・凶蟲バウ』を含めた、全フォーリナー。結城救出のため、殲滅を開始する〉

「◆◆◆◆◆ツ！」

輸送船であるキャリアーが、アルゴや飛行ドローン・飛行ビーグルに護衛されながら宇宙転移してくる。

そしてハッチを開け、先行した『凶蟲バウ』に続いて『甲殻巨大生物4・1・黒蟻』を投下する。

大わらわとなつたEDF側フォーリナーの軍勢に、雑魚共が蹴散られる。

しかしそれで終わるはずもなく、『シユツルムガイスト』を含めた極限指定害虫が

フォーリナーを少しづつ削り始めた。

「このままではまずい……！」

劣勢に気づく元帥団長。

「ふむ……元帥。お主は先にいるという配下の生存を確認してくるのだ」

「し、しかし……」

荷馬車の馬にのる元帥団長に、荷車にのる女性が声をかける。

そのものは正規軍や騎士団とは一線を画した存在。

服装や口調、元帥に対する態度で、格上の身分であることも窺い知れる。

「このままではお主の仲間が滅びることになる。

我等はあのフォーリナーとやらを削る、『シユツルムガイスト』を殲滅しよう

「騎手は……」

「アタシ、女王直属のモモがやるわ」

「分かった。後は頼みます、『マツバギク』女王——！」

「ああ、任された」

元帥団長は種を碎いて、花力を補充。

それによりバーストランを実施。馬並の速度で、増援部隊より駆け離れていく。

騎手がモモに代わり、女王率いる援軍はその隊列を崩さないまま戦場へと向かう。

「勝利は勝ち取るのではない、もぎ取る物だ。行くぞ！」

「「応!!」」

「「はい！」」

女王は花騎士と彼女らを率いる団長と共に、混沌の渦中へ向かつた。

⋮⋮⋮

さて、急に話が変わるが、結城とネギ・なのはが会わなかつた話をしよう。

あれは一か月程前の涼しい夜だつた。

なんてこともなく、結城とネギ・なのはが分かれた時。

そう、ピンポイントで、結城がその場からいなくなつた時だ。

「あれ、なのはじやないか！」

「この声は……ユーノ君！」

EDF隊員がごつた返すエントランスホールで、近隣の故郷に帰ろうと準備をしていた。

そんなところに高町なのはの同郷である、ユーノ・スクライアが声をかけてきた。

ネギ・スプリングフィールドは、彼がだれなのか全く不明である。

「えーと……」

「あ、君がネギ・スプリングフィールド君だね？」

僕はユーノ・スクライア。ユーノつてよんでもいいよ、よろしくね

「あ、はい。よろしくユーノ」

握手をする。

「ネギ君、軽口でいいよ。堅苦しいのは苦手だからね」

「うん、わかつたよユーノ」

ユーノはネギの言葉を聞いて、うなづく。

「そういえば、なんでネギ君やなのはは、どうしてここにいるんだい？」

「それがね……」

ユーノはなのはから、事の顛末を聞く。

するとユーノは彼女に、一度ネギ君の魔法使いつぱりを見てみた
いつてことなので、

同行してもいいかみたいなことを聞く。

「うん、もちろんいいよ！」

「よし！ ジャあ、ちょっと上に報告してくるよ！」

そういつてユーノは、しばらくの間いなくなることを告げて二人の
前からいなくなつた。

ただ彼が向かう方向は、上司がいるといわれる方向ではない。
むしろなぜ無線を使わないのか。

疑問に思う事はなかつた。

なのはとネギが待機する中、ユーノは走つてすぐ人が少ない通路
の角に移動する。

「はあつはあつ……く、くく、アハハ！」

最高だよ、なのは。こんなに早く、実験ができるなんてね」

あまりの興奮に声に出てしまう。

周囲に人がいない事をちゃんと確認しているのかいないのか、それ
はとても不思議に思える。

「楽しそうだな、ユーノ」

いつの間にかユーノの後ろに、EDFの人間がいた。

服装がスカウト部隊用戦闘服である。

「そりやあそうさ。なんてつたつて、僕らの悲願成就に一步近づいた
んだから」

「へそつか。ならば、正銘してみせよ。貴殿の外出を認可する」

「ありがとう。それはそうとして、いい加減遠隔口ボットを使うのや
めたらどうだい？」

日光にあたらないと、ビタミンを生成できないよ？」

「〈明日本氣出す〉」

「それ、ダメなパターンじゃん。じゃあ、コネクトしといて」

—— ZZ ——

??? 「了解した」

—— ZZ ——

ユーノとスカウト部隊用装備を身にまとう人型ロボットは、そこで別れた。

そしてなのは達の下へ向かう。

「やあ、おまたせ。それじゃ、行こうか」

「うん！」

「行こう！」

三人は宇宙転移広場にて、技術技師に報告し近隣の世界へ転移する。

転移した先は郊外。

停電して非常灯以外の明かりがないEDF支部から一転して、さわやかな風が吹きすさぶ晴天快晴の世界。

丘の上から望む海は、非常に煌びやか。

「わ～ここが、なのはさんの故郷なんですか？」

「うん。ここが私の故郷、海鳴市！」

一通り腕輪の動作を確認して、なのははネギとユーノを連れてお店である『翠屋』の方へ行く。

『翠屋』で家の鍵を貰つてから、帰宅することにした。

なん十日か空けてしまっていたので、施錠に関しては全て家族に任せているのだ。

「う……女人ばっかりだ……」

「ネギ君、くしやみしないでね？」

「頑張るよ！」

なのはに言われて、意気込みを語る。

因みにユーノは外来生物となつて、なのはの肩の上にいる。

「じゃあちよつと事務所行つてくるから、二人はここに居てね？」

「うん、いつてらっしゃい」

そういつてなのはは、店の事務所へ向かっていった。

残された二人は、気まずそうにする。

というより、ネギがユーノをじーっと見ている。

「えーと……驚いてる？」

「むしろカモ君にてるというか……」

ユーノはネギの発言に頭を傾げる。

その人の事をユーノが聞く。

「えーと、人じやなくてオコジョなんだ。

初心者魔法使いの使い魔ついわれててね、いろんな罰を受けた時
オコジョにされたりもしてて、

魔法協会つていう組織の中でもかなり不思議な形態をしているんだ

「へえ。僕のは仮想の生物を作り出しているんだ。人にとって一番抵抗力のない姿だね」

抵抗力を無くすため愛嬌を上げた代わりに、その他諸々の性能は格段に落ちている。

しかも魔力も消費するという変身魔法。

二人はほかにもいろんな話をする。

待っている間、魔法の形態やどんな感じに発動するのか。
根掘り葉掘り聞いていると、なのはが戻ってくる。

「お待たせ、ユーノ君・ネギ君」

「よし、それじゃあ行こうか」

「そうだね」

三人は高町家へ向かう。

今はまだ昼ほど。学校や仕事で、誰もいない実家に帰宅することになる。

「ただいまーって、だれもいないよねー」

玄関を開けてなのはがそういう。

本当にがらんとしていて、静寂に包まれている。
仕方ないと彼女は重いながらも、少々悲しくなる。

「残念。今日は学校が休みなんだよー」

「ふえ!?」

「わつ！」

なのはは誰かに抱きかかえられる。
柔らかな感触と良いにおい。

後ろを振り向くと、ネギとユーノが驚く姿と自分の姉の姿が目に映る。

「美由希お姉ちゃん！」

「おかえり、なのは！」

久しぶりの邂逅に、喜色を表す彼女たち。

勿論男性陣もそれに会うのだ。

「ようこそ、ネギ君。ユーノ君」

「え？ え？」

「……お久しぶりです」

いきなり自分の名前を言われることに戸惑うネギ。

そして変身状態でそのまま来ているユーノは、自分の正体をばらしていることを一時的に忘れていて反応が遅ってしまった。

彼ら二人の後ろに出現したのは、高町恭也である。三きょううだいの長男だ。

「凄い……俊勳を使えるんだ……」

ネギはこの二人を超人として認識することになる。
実際一人は超人なので、間違つていない。

「つてあれ？ 何で僕の名前を？」

ネギは自分の名前を呼ばれたことをぶり返す。

「それはね、お母さんがうちに電話してくれたのよ。
びっくりさせてみてつてね？」

美由希が後ろを振り返って、ネギに微笑みかける。

年上の女性が好みなネギは、彼女の雰囲気に若干呑まれそうになる。

「へ、へえ……そうだつたんですね！」

「さて、積もる話は中でしようか」

恭也はほか全員に意見して、リビングに向かうことになる。

なのはとネギ・ユーノは、恭也と美由希に訪問した理由を伝える。ホームステイもあるけれど、一番の理由がEDFが一時的に活動不能になつたことだ。

この事を伝えると、フォーリナーの脅威と影響・暴力を知つている兄と姉は心配する。

そこらへんはモノリスなどで、その世界に対処法を伝授しているため、

一時的なEDFの不活性状態でも何とかなる、とユーノは伝えた。この話の後、なのははEDFの復旧中にこつちの世界で、力を鈍らせないように特訓したい旨を言う。

勿論無茶はしないし、もしものことがあればEDFを抜けて日常生活に戻る意思を見せる。

そんなんのはの強い意志とネギやユーノの後方支援を考え、恭也と美由希は彼らを応援することを決定する。

父親や母親に対しても、許可を取らなくていいのかなんて問題もある。

しかし、昔に居候が沢山いたこともある為、一人二人増えても問題ないとのこと。

「ところでネギ君」

「はい、なんですか？」

「君の接近戦の組手は、俺が相手しよう」

「え!? でも、僕のは魔力も乗せるので、危ないんですよ?」

「大丈夫だ。さ、今からやろう、今すぐに!」

戦闘狂?と思われかねない発言に、ネギはうろたえる。

しかし恭也の未知に対する好奇心の強さは折り紙付き、と美由希が呆れるように言つた。

「あはは……お兄ちゃん、いきなりはちょっと……」

「俺は用意できてる」

「……」

「なのはさん、大丈夫ですよ。準備はできますので」

残念な兄に頑垂れ呆れるのはに、ネギが心配無用と笑顔でいう。しかしその笑顔は建前で、俊動の使い手だと知つた時から強敵として認知している。

だから少しだけ、にらみつける感じになつてしまつた。

「それじやあ、表行こうか」

真昼間、燦々と照り付ける太陽。

予想外の暑さになつてきた。

恭也とネギは、表といいながら近くの海岸、砂浜にて対峙する。美由希達は防波堤のところで、日傘をさして座り観戦。

「一発食らつたら終了だ。行くぞ！」

「お願ひします！」

一見、恭也に武器が見当たらない。

両者駆けるのと同時に、一気に距離を縮める。

「『雷火崩拳』！」

拳を突き出す。

普通ならば諸に食らうが、相手は暗殺を生業にできるほどの実力を持つ。

故にその単純に伸ばされた腕は、右腕で払いのけられ左拳が腹に突き刺さる。

そのはずなのだが、ネギも小手調べとはいえ仮にも戦闘狂だ。対策として、拳を防御用に置いておくことくらい容易である。ネギは殴られた威力そのままに、後方へ仰げ反る。

「風の射手16矢！」

指にはめられた杖の代わりである指輪のおかげで、長い杖を使わなくとも速攻できる。

16本もの拘束力を持つ魔法の矢が、中距離にて恭也に向かつて放たれる。

しかしその矢は全て、何か細く光を鋭く反射するものに斬られる。

「（斬つた!? だつたら!）――！」

刹那。

いつの間にか目の前にあつた木製小太刀を、咄嗟に片手で弾き飛ば

す。

ついでに目線もそつちへ向かってしまうのと同時に、恭也が懐に入り込む。

視線を戻した時には遅く、恭也の鋼糸に体に張り巡らせたバリアを全て突破されてしまった。

そしてネギの視界が空に向くのと同時に、背中や体の裏側に砂の感覚が衝撃と共に押し寄せた。

あまりの早業に、ネギの思考が追い付いてなかつた。

「す、すぐ…！」

ネギは後に来た左足の痛覚で、ようやく自分が左足に重心を傾けて回避しようとした事を看破され、足を払われたことに気づく。考えるほどに、恭也の凄さを感じ取っていく。

「ネギ君、立てるかい？」

視界に手を差し伸べる恭也。

それをネギは手に取り、地に足をつく。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして。それじゃ、君の悪いところを洗いざらい判明させていこうか」

そういうつて、二人は炎天下の中、先ほどの演習に関して話し合う。彼らの戦闘を見ていた、なのはと美由希・ユーノ。

改めて兄の強さを実感した姉妹と圧倒的強さを目にする彼。

実家に戻つて自主練に励もうとしたことは、今後につつて良かつたのかもしれない。

こうしてネギたち三人の強化合宿が始まるのであつた。

そしてユーノは、高町士郎ら全員が集まる夕飯の後、EDFの腕輪がアップデートされたものを

訓練相手の恭也や美由希・士郎に渡す。

「いいのかい？ ユーノ」

「はい。それがEDFの決定です」

「それほど、EDF事情がひつ迫しているのか？」

未来的デザインの腕輪を撫でまわす恭也は、このような高価なもの

を無料でもらえる事を訝しむ。

この事に關してユーノは、全ての責任を上層部の所為にする。

それでもEDFに触れてきた士郎に感づかれてしまう。

「そういうわけではないんですが、フォーリナーが攻めてきてる今。こちら側の戦力を上げないといけないんです。

幸い、こちらの世界は海鳴市周辺によく出没しています。

ですので、戦えるあなた方の戦力を強化しておくのは、少數精銳の観念から理に適っているはずです」

「言い分はわからんでもないな」

士郎は腕を組んで考えるように目を閉じるが、鋭い視線を放つ片目はユーノを貫く。

怪しまれていることに冷や汗をかくユーノ。

表は笑顔のまま繕つていて、内心ひやひやしている。（EDFの志向じゃなくて、研究所の志向なんだけどね！）

「さて……明日は早いぞ？」

「あら、明日休み？」

「世界の危機に、いちいち休んでいられないだろ？」

明日はこれを使つて、皆で慣れていこうか。

構わんだろう、ユーノ君？」

「はい！ もちろんです！」

有無を言わさない威圧感が、ユーノを襲う！

フェレットはどこまでいつてもフェレットなユーノ。

この後ユーノは、この腕輪のアップデートについてなのはとネギに話す。

アップデート内容は、世界線を統合することで新たな能力を得られるようになつたこと。

つまりこの機能を稼働状態にしておくことで、なのはの魔法をネギが使えたりその逆もできるようになる。

「でしたら、起動パスワードを作つときます？」

「パスワード？」

ネギは縁側にてなのはとユーノと腕輪による、今後の能力付与に関

して話している。

「はい！ 最初はこれで魔法の発現を安定させるんです」

「そななんだ。私が使つてゐる魔法とおんなじ感じなんだね」

「あ、そななんですか」

同じことだと知つて、笑いあつた。

既に起動パスワードはあつたようで。

「どな感じなんですか？」

「基本的に、リリカルマジカルつて言つて、やりたいことを言えばレイジングハートが

勝手に処理してくれるよ」

〈Y e s, I d o.〉

首から引っさげてゐる赤色の宝石が点滅して、ネギに同じみな英語が飛び出る。

「英語かー。僕は英語圏に住んでるから余裕ですけど、なのはさんはいけるんですか？」

「大丈夫だよ。意思疎通は問題ないね。それでネギ君の方の起動パスワードは何？」

「基本的に三段活用で、僕の場合ですと……ラステル・マスキル・マギステルですね。」

この後に命令式である言葉を言えといいんです。例えば、プラクテ・ビギナル・アールデスカット」

ネギは床についている両手のうち右手を眼前に掲げ、人差し指を出す。

そして人差し指の先に、チャツカマンの最大出力程度の火が出る。

「お、本当に魔法使いみたーい！」

「あはは、なのはさんもすぐになれますよ。それで……」

二人はお互に知らない魔法の世界を知つていく。

そして深く話しあい、お互の初動を高めあう事に成功した。

英語の大元であるラテン語、ミッドチルダ型アルファベットの英語。

普通であれば世界観の違いに、翻弄されるはずだが両者は似てい

る。

似すぎてゐる為、後は魔力や氣力の扱いによつて全てが變化してい
く。

更に、天性の才能で勘による魔法陣作成ができるのは。
そして大学に匹敵する魔法学校主席卒業のネギ。

両者の特性や能力は上手くかみ合つてしまい、短期間で強くなつてしまふのだった。

「「戦いの歌「カントウス・ベラーグス」！」

士郎と弟がなのには、ハセムラ

「はい！」 「うん！」

「——マギステル——」 リリカル・マジカル——

卷之三

強大な神戻！破壊する力この腕に！」

「デイバインバスター!!」

「連弾光の11矢！」

白色の中距離射程の光線と
11本の高速矢が士郎を襲う

ユーノ君のおかげで、魔法の練りが見えるな……。

右手に持つ短刀で一振り。

それだけで光線を崩して魔力構成を破壊し光の矢を全て打ち

「ええつ
！？」

「風の障壁ならぬ、音の障壁。どうした二人とも、行くぞ？」

海岸線に爆音か鳴り響く

これをユーノが結界魔法を使つて軽減し、海で遊んでいる親子に見

せかけている。

「これはひどい」

「お父さんも元気だねー」

恭也と美由希は、父親の理不尽さに笑うしかなかつた。

こうして、ネギとなのは、ユーノ、土郎、恭也、美由希の戦力増強がなされることになる。

「棒術・八卦掌、剣術……やることがいっぱい、父さんうれしいぞ！」

バトルジヤンキー気質になる父親もここに爆誕した。

α ：もう一人の特異点

「おい、吉田とやつたことがあるか？」

「俺もやつたことあるぞ。あいつあ、インチキするからなあ。な、吉田？」

「だからそれは、おじいちゃんがやつたことで、僕は関係ないって言つていいじゃないか！」

おはようございます。

僕はエアレイダー8期卒業、ウルフ部隊に配属された吉田です。
今僕は何故かウルフ部隊で一番の下つ端です。

だからみんなにパシられます。

「今日の出撃はお前な。またMVP取つて来いよ！」

「だから無理つて」

「無理つていうのは、うそつきの言葉なんだよなあ」

くそつ、いつもこうやって無理難題を押し付けてくる。

それにこれはゲームじやないんだぞ!?

正真正銘の命がかかつた戦場だ。そんな気楽に戦功一番なんてで
きるわけがない！

とにかく僕は宇宙転移前に、作戦会議室に集まる。
その部屋には僕以外にも、いつもの顔ぶれがいた。
「さて……吉田を含む全兵士。知つていると思うが、私は中隊指揮官
の梶岡貞道である。

これより当方の実験施設より逃げたフォーリナーを破壊、または捕
獲し研究所に戻せ。

なお吉田だけはまだ我々の組織に入つて一年にも満たないので、航
空機などのマシン及び航空支援はできない。

よつて、支援武器等で任務にあたつてもらう

あーやっぱりかー。まだ入つたばかりだからなあ。

「我、春日参上！」

「遅いぞ、伍長」

「それは失礼いたした！　さてこれより、宇宙転移に入る！」

だがその前に奴が行つた世界の詳細を渡しておくので、転移前に目を通しておくといい。

またいつも通りだが、我々は『真理を超越する者』として他EDF隊員との接触は控えるようにな！」

「では、解散せよ」

皆一斉に作戦会議室から出ていった。

ここはEDF支部とは違うところにあつて、主にフォーリナーの研究をしている実験場なんだ。

実体はその通りなんだけど、『真理を超越する者』というように普通のEDF員とは違う人を集めた檻というか監視場みたいなところ。基本的な仕様はEDFと同じなんだけど、あまり故郷や実家に帰してもらえず一生をここで過ごす位過酷な状況。

でも僕もそうであるように、僕らは全員に感染すれば大変な被害を及ぼす存在として世界的に認知されていないが、上層部からは白い目で見られている。

だから僕らはEDFという恰好の組織を使つた檻を使って、監視と共に色々と掌握されている。

まあ別にいいけどさ。

パシリがあつてきついのはそうなんだけど、普通のEDF員のようにフォーリナーの版図を止めるんじやなくて研究材料を探す方面で出撃するから生存率自体高いよ。

しかも報酬もなかなかだし。

やめても殺されるだけだし。だから僕はこのままでいいかなって思つてる。

でも身も心もこいつらに染まるのはいやだから、このままの状態を維持するのもいいかな？

いや、でも、染まると後方支援をちゃんとしてくれるのはいいことだと思う。

そうなると犠牲になるのは、僕の人間性になるけど。
まあそんなだから、僕の装備はすっごく貧弱。

基本的に僕はガンシップによる、近接支援しかしてくれない。

それでもこの近接支援は、今までの後方支援とは全く別の仕様でで
きている。

最近この地球とは違う世界線の世界を、もう一つ見つけたらしくて
そつちの武器を鹵獲し改良したと聞いた。

基本的にエアレイダーの支援は、敵を撃破することにより溜まる功
績ポイントがないと要請できない。

でもその世界線にある地球から受けた影響は、エアレイダー装備に
革新をもたらせた。

そう、エアレイダーに秒数リロードが追加されたんだ。
しかもリロードが、別の武器に持ち替えている間にしてくれるとい
う優れもの。

まあこのリロードはガンシップの弾倉を、リロードしているからだ
とさ。

だからそのリロードが終わると、すぐに射撃できる。

非常に使いやすいと思うだろうが、最近のフォーリナーの数は尋常
じやない。

だから変にリロードものにするより、費用対効果が高い功績系支援
装備を持つた方がいい可能性がある。

もちろん敵が少なかつたり功績ポイントが少ない雑魚が出現する
のであれば、

戦場に宇宙転移してくる簡易基地にて、秒数リロード支援武器に換
装するのも手だと思う。

「おい、吉田」

「は、はい!?

いきなり低い声で呼ばれて背筋が伸びた。

僕変な人の怒りでも呼び起させちゃった!?
まざい!

「お前はいい目をしている。この先何があつてもあきらめるな」

視線を向けると、ごつい漆黒の装甲を着用したフェンサー達が、僕の隣を歩いて行つた。

これが僕と彼の初の邂逅だ。

彼こそがこの『真理を超越する者』の筆頭、グリムリー・パー隊隊長だ。

もともとはEDFが関わるはずのなかつた違う世界線の地球にいた。

そんな彼らをEDFはモンスターの討伐または鹵獲をしているとき、死の雰囲気を濃密に感じ取つたらしく拾つてきただしい。

彼らは連隊規模で活動していて、数多のフォーリナーを相手に無双していたという。

活動理由は彼ら曰く、『死に場所を探している』らしい。そんな厳格な雰囲気を醸し出す彼らは、僕より先に宇宙転移していった。

僕もそろそろ任務のために、宇宙転移をしなくちやならない。でもまだ武装を整えていないんだよね。

だからちよつと武器庫で装備を整えようかな。

武装は貧弱でも、種類は結構あつたはずだから。

LEDじやなくて切れかけた蛍光灯が、長い通路を薄暗く照らす。この先に僕らの武器庫があるんだ。

表のEDF連中は自室を持つていて、その中に武器収納庫があつたり支部または本部の隔離施設にて保存されている。

でも僕ら裏の連中は、それはもう厳重に集中管理されてる。

なんせ僕らの武装は、最新鋭の武器または試作武器ばかりなんだから。

表の奴らも試作武器を持たれているけど、完成度が8割超えてるだけだから。

僕らのはマスタリングがされていない、非公式な奴ばつかだからねー。

おかげで威力が高い武器があつたりするんだけど、真理を超越した僕らは死んじやうかもしない。

「吉田！」

「はい!?」

後ろから春日伍長が呼び掛けってきた。

「すぐに支度しろ！あと一分で作戦開始だ！」

「わ、わかりました！」

僕はこの裏の世界の厳しさを肌で感じながら、戦場へのお供を選択した。

そして選択した後は、極東支部が持つ航空基地へ連絡だ。

これをしないと座標確認だつたり、誤射防止だつたりできない。

それに武装の一部が第三者に任される物だから、攻撃手段がなくて絶命必至になっちゃう。

「——というわけで、お願ひします」

〈了解、支援を行う〉

これで手配完了。

「遅いぞ、吉田！」

「すみません！」

合流するころには、皆そこに集合していた。

そこというのは、この研究施設で使える特殊な宇宙転移広場の事。

一般的な宇宙転移は、一つの門につき一人から複数人が同じところに転移できる。

でもこいつの場合は、指定すれば門の範囲内にいる人全て、別々の世界へ転移することが可能だ。

よつて一般的な宇宙転移装置より、大きさや範囲が違う。

個室のような感じな一般的宇宙転移装置。

広場と言えるよう広範囲の領域が、宇宙転移の門となっている研究施設専用の宇宙転移装置。

「さて……。皆、新たな戦闘服は慣れたか？」

これよりライフリングを行う。ELP(EnterLifePass

s／Energy Lines Pointer）
を開始し、平均化せよ。そして一番スース耐久が高い者は、低い者
へ強化点数を借用しろ」

いきなり難しい言葉がいっぱいだ。

えーと、今僕らが着用している戦闘服は、グリムリー・バー達がいる世界から奪つた技術を発展させたものになつてゐる。

ELP。

これが結構画期的で、敵が死んだときに発生させるF因子の電気を使つて、僕らELPでつないだ皆の装甲を修復させるというもの。

しかも皆が着てゐる戦闘服は、敵が落としたF装甲を使つて強化されてるその上昇分を、他の脆弱な新米隊員等に分配して、生存率を上昇させるという実績を持つてゐる。

更にマザーシップがハッキングによつて乗つ取られたことがある前例のおかげで、

このELPはF因子から発せられる電気またはクイーン等から出でくる大容量の電池を取得した時にしか効果を發揮しない。

この特性のおかげで僕らは奴らに、電流による集団的ハッキングを受けることはないんだ。

でもヘルメットに外部衝撃の緩和や侵入防止効果があるから、敵のハック電流の意味はあんまりないんだよね。

「リンク完了。では全員、逃げたフオーリナーを壊すか、研究所に戻せ

!!

「「ハツ!!」」

僕は武装を見ながら宇宙転移を開始した。

近況報告。U＝装備中。AP：245

特殊兵器：

『試作型シーザー・ワイヤー——10』

『試作型デコイ「ホワイト」——5』

α —2：異世界への扉

「小隊長格は、部下の点呼をしろ！」

「「ハツ！」」

目を開ける。

そこには青々とした草原と土砂降りの日差しがあり、暗闇に染まつていた体に突き刺さった。

研究所に収容されていたフォーリナーが、脱走したんだけどもこんなところに来たのか。

そもそも、なんであの蟻が宇宙転移できるのか、凄く疑問に思う。でも僕ら下つ端は知らないんだ。

「吉田！」

「はい！」

「ウルフ隊全員います！」

「よし、小隊長格は、俺のところに来い。進軍しながら会議を行う。

その他の者は、我々についてこい。その間は警戒と行軍以外は羽目を外しても構わん。

死んでも後悔のないよう、仲間と駄弁つておけ」

梶岡中隊長は、僕が所属するウルフ隊の小隊長を含む小隊長格連れて行軍の先鋒に立つ。

暑い日差しだと思う。

スーツの中は、一定の温度と湿度に保たれているから、蒸れる事も過度な疲労がなく快適。

それに今着用しているスーツは、マスターアップを迎えていた正規アーマーの試作品。

だから快適さの他に、不自由なところや無駄なところがある。まだそれはわからない。

エアレイダーにとつて、今のところ不要じゃない。

前と違つて動きが軽快になつて、簡単な段差でも歩いて渡ることが

できる。

他にも皆の頭上にアーマー値である緑のバーの他に、その下に現在使用している装備の残弾数を示す青のバーがある。

この二つのバーの横に、赤・橙・黄・緑に光る残りのアーマー再生回数を示す光点がある。

また装備マニュアルを、ヘルメット内にあるインターフェースから取り寄せて読んでいるんだけど……。

ぶつ壊したフォーリナーに対応した功績点数の表示方法が、有名な配管工おじさんのゲームと同じように出てくる。

これいるのか？って思うものもあるけれど、死の恐怖を和らげてくれるからありがたいと思う。

「なあ、吉田」

「何、出杉？」

「またあいつらに稼いで来いって言われただろ。なんぼだ？」

「15万くらい」

「黒蟻で100功績圓程度なのに、あいつらひでえな」

「いつもの事だよ。世間の厳しさを、もつと知るべきだと思う！」

僕はあいつらの自堕落な姿を思い出していらつく。

そう憤慨していると、出杉が軽く笑い飛ばした。

「はつはつは。まあ、期待されるとポジティブに行こうぜ？」

「そうでもしないと、生きてけないよ」

なげやりに答える。

あいつら、まじで最前線に行つて来いよ。

僕は行軍中に出杉と、他愛ない会話をする。

そんな風に駄弁つていると、グリムリー・バー隊の部下がブラストして追いかけてきた。

早いなあとどうでもいいことを乾燥に抱きながら、グリムリー・バーの編成がおかしいことに気づく。

「あれ、人数少なぬですか？」

いつの間にか帰つてきていた、隊長に聞いてみる。

「ああ。今は部隊を一つに分けている」

「分けているつて……僕らは、『真理を超越する者』なんですよ？
もしも他者と接触すれば……」

「大丈夫だ。『設定操作』がある」

「設定操作をするのに、どれほどのエネルギーが使われると思つてい
るんですか？」

僕らは知つても、口にも脳裏にも出してはいけない情報がある
んだ。

設定介入に対する設定操作。

残念ながらこれらは、日記にも出せないんだ。

うん、すまない。

とにかく設定介入より、この設定操作は緊急事態でなければ使つて
はいけない。

一時的な物ならいいけれど、影響力の強い『真理を超越する者』を
中心に行うのであれば話は論外になつてしまふ。

どうしても、こんなリスクを負つてまで二つの部隊に分けて、設定
操作をするんだ。

きつと将来的に必要とされることなんだろうな。

僕程度の脳みそじゃそこまで理解できないし、全体すらしらないか
らどう楯突こうが意味がない。

此処は適当に終わらせておこうかな。

変に空気をこじらせて、グリムリー・パーの援護を受けられなかつた
ら嫌だし。

「上の決定だ」

「そうですか。じゃあ、どこに行つたか教えてもらえません？」

「副長共は、花園の世界へ行くといつていたな」

「花園？　あー、最近ストームチームやデルタ・オメガ隊が、積極的に
介入しているところですね。

なんでもF因子の新種が出たとか。裏の研究練では噂になつてしま
すねー」

花園の世界。

最近まではネウロイやヒデイアーズ・バジュラ・ガストレア・ギヤオス・B E T A・ラヴェジヤー・インベーダー・イミグラント・アグレッサーが、グリーゼ 8 3 2 c に集結しているところを、EDF がそれらの世界に関係する宇宙構造物を連れて殲滅作戦をしていた。マクロス・ガンダム・人類銀河同盟など、錚々たるメンバーを一部洗脳してまで動員。

二週間前に、第一次太陽系外決戦をしていた。

それはもう、無茶苦茶な光景だつたらしい。

資料を見たけれど、人間はそこに介入できないね。

因みに北米のストームチームこと、ライトニング・アルファチームがこれに参戦していたらしく、

膨大な功績を挙げたとか。

「暗い話は終わりだ。答えた礼として、吉田が使っている武器について教えてくれないか」

「その程度でしたら、いくらでも大丈夫ですよ」

むしろそういうてくれると、情報の再確認ができるからうれしいんだ。

そして実験台にされているという事と共に、最強（最凶）の武器を伴つて戦場を歩ける

楽しきがある事も知つてほしいな。

『試作型シーザー・ワイヤー』。

こいつは、一般に出回っている『シーザー・ワイヤー』とは違う。通常ならば、糸のような性質を持つ鉄糸が、前方へ拡散するように射出され糸にある棘などで被害を与える。

だけどこいつの場合、同じように糸を射出したあと壁に向かつてもう一度撃鉄を引く。

するとゴムの様に引っ張られ、鉄糸につかまつた奴らは壁や建物に衝突した後鉄糸に内包されている爆弾で爆死させられる。

継続ダメージじやなくて、多目的対象の掃除を目的に作られたとか思えない。

もう一つのデコイはそのまま。

だけどデコイの台座が出すフェロモンで寄ってきた敵は、内部に搭載されているモーターラーの怪電波によって拳動不審になる。撃たれ弱いエアレイダーにとつて、命綱になりうる存在だよ。

「ん？」

唐突に視線を変えるグリムリー・バー隊長。

「吉田。レーダー倍率を低くしてみろ」

彼の反応や対応がおかしかったので、仲間たちに警告を出してみる。

「いや。そこまでは必要ない」

そういつた直後、僕のレーダー上に点滅する赤点を発見。すぐに隊長と共に、赤点のほうへ向かう。

「隊長っ！俺たちも……」

「いや。害虫一匹潰すだけだ。隊列を変えずに行軍しておけ」「わかりました」

「行くぞ、吉田」

「はい」

レーダー倍率を変化させて、遠くまで見えるようにしている。

この時、行軍方向とは90度違う方向に、赤点が点滅している場所がある。

点滅の意味はわからないけど、害虫がいるならば撃破するほうが多い。

この宇宙転移先でも、こうやってフォーリナー関連の敵がいる。そういう場合は、EDFの隊員として撃破しなければならない。

これが捕獲対象ならばどれだけいいか……。

グリムリー・バー隊長は、時間が惜しいと言つて僕を片腕で抱えてジャベリンキヤンセルスラスター・ダッショウを駆使して、現場へ急行する。

その速さは自動車の法律規定速度を優に超える。

しかもその瞬間加速度は、爆発による衝撃波よりも速いんだ！さすがに設定操作をしないと、僕らは粉みじんになつてしまふ。フエンサー隊はともかく、生身だとグロテスクになつちやうな。

でも操作するには、結構なエネルギーが必要。

そこで設定介入をして、物理現象を変える事で僕らの負担を減らしているんだ。

僕は改良ヘルメットに搭載されている、望遠鏡機能で遠くを見る。すると赤点があるそこには、金髪の女性を顎で掴んだ捕縛対象がいた。

「まずい、隊長、赤点に向かつて僕を投げてくれ！」

「了解。吉田、ベイルアウトだ！」

グリムリーパー隊長は、僕をスラスター・キャンセルによる遠心力と慣性によつて遠くへ射出！

殆ど放物線を描かないまま飛ばされる。

結構速いからか、風切り音が聞こえる様で奴は前進。

そのまま水しぶきを上げて、水辺に沈んでいった。

「ぐべっ」

重力に引かれてそのまま地面に落ちる。

50Mほど地面に擦られるんだけど、アーマー値が減つてないから池しかない。

大丈夫！

すぐにローリングをして、態勢を整える。

近くにあると思われる水辺を見てみると、そこには程よい大きさの水底は見えないし、波は全然立つていません。

本当にここに消えたんだろうか？

もしも別のところに消えたのならば、本部である研究所から何かしら知らせはあるはず。

それがないのだったら……どこに消えてしまったのだろうか？

しばらく考えていると、ジャベキヤンスラスター音が聞こえる。

「吉田、どうだ？」

「全然だめだよ」

グリムリー・パー隊長が参上。

結構早かつたね。

僕は隊長に意見を具申するが、どれもこれも的を得ない。どうしたものかと悩んでいた。

「おねーちゃん！」

白髪の少年が、こつちに向かつて走ってきた。

目尻に涙を浮かべている少年は、肩を上下させている。

「なあ、こつちでねえちゃん見なかつたか!? こう、でつけえ蟻に掴まれてたりしてねえか!?

「まさか、金髪の女性かい?」

「そう、そうだよ！ どこに行つたんだ!?」

「どこつて、この池に……」

「はあ?! ここはただの裏庭の池だぞ!? 嘘つくなよ！」

あまりの事に頭が回つてないんだろうな。

それはよくわかる。僕らもその状況だから。

「嘘は言つてないよ、テリー！」

いきなり虚空から声が聞こえる。

何事だと思つて、周囲を見るとテリーのすぐ隣に光を瞬かせながら、その声の主が現る。

「わたぼう！ お前、ワルぼうが妨害と言つて召喚したのが悪いんだろうが。

お前も、奴をあおつた責任とれよ！」

「バ、ごめんつていつてるだろ？ それに協力してるじゃないか」

「モンスター・マスターになる気はないんだからな！」

なんだか仲が悪いのかよくわからない。

この感情たっぷりの会話は、僕らにとつてマイナスしかない。だからテリー君、わるいんだけどちょっと黙つてもらうね。「わたぼう。君、ここに逃げたことに関して、否定しないんだね」「うん。ここに逃げたことは確かだよ」

わたぼうはため息をついてから、僕の質問に答えてくれる。

助け船を出したんだから、ちゃんと答えてくれないと困る。
でもちゃんと応えてくれたから、よしとする。

優先順位がわかつてくれるようでなによりだよ。

わたぼうは感情的に怒るテリーを置き去りにして、この池をのぞき込む。

「ここには、この世界と別の世界をつなぐ扉があるんだ。

これをボクらは、『旅の扉』と呼んでいるよ」

「なるほど。じゃあ、入れば行けるつてわけ？」

「ぜんねんだけど、そう簡単じやない。

こここの扉は魔力の濃度が一定にならないと作動しないもの。

だから僕ら、魔力の塊ともいえるまものが、ここに魔力を与えない
と動かない

たしかに魔力のかたまりだ。

とある物質を調べる機能やアーマー値を調べる機能にて、莫大なエネルギーを誇っている事を

わたぼうを指標にして調査した。

彼自身もそうだが、旅の扉もまたそう。

「わたぼう！責任とつて、オレと一緒に姉ちゃんを探してもらうから
な！」

「そうしたいのはやまやまだけど、君一人を守つてこの扉に潜るのは
危ないからね？」

「はあ!? オレ一人くらい守れるだろ！」

「まあ待て、テリー」

「んだよ、おっさん」

テリーの周囲を顧みない発言に、隊長が耐えかねて水を差す。

「我々も君のお姉さんを連れ去つた奴を追つている。

となると、わたぼうが守るのは三人どころか、君のお姉さんを含めて4人になる

「更に言うと、むやみに助けようとすると、殺される可能性だつてある。

ここで君が無駄に問答をしている間、君のお姉さんが死んでしまう

可能性だつてある。

だからここは、わたぼうにしたがつた方が良いと思うんだけど?」「途中から入つてきたおっさんらが、しゃしゃりでてくんなよ」

僕たちの警告を聞かない、最悪な状況だ。

どうしようか。

まあ、案は一つしかない訳で。

「わたぼう、彼だけでもいいから、この扉の先に行つてみたら? きつと彼も安心してくれるはず」

「そうだね。このまま無駄に時間を使うのは、ボクとしてもよくない」 そんなわけでわたぼうが池に魔力を流し込んで、旅の扉を活性化させていく。

すると池の底にある旅の扉が光りだして、池に大きな渦ができるいく。

そしてわたぼうはテリーを掴んで、渦の中へ姿を消した。

しかし数分もしないうちに帰つてくる。

テリー少年の様子を見ると、いくらか憔悴しているようだ。

どんなようすかわからぬが、恐慌状態だつたんだろう。

ヘルメットに装着されている機能の一つを使うと、如何にテリーが味わつた恐怖がどんなものかなんとなくわかる。

「どうだつた?」

「やつぱり駄目。テリーにはモンスター使いになつてもらわないといけない。」

勿論君たちもそうだよ。変な恰好しているけど、魔物に生半可な武器は通用しない。

魔物には魔物だよ? ペンは剣より強いなんて格言があるらしいけど、

そんなもの人間のまやかしにすぎないから」 言つてくれるな、わたぼう。知つてるから。

でも、方針は決まつた。

このままグリムリー・パー隊長と共に、わたぼうとテリーについてい

こうと思う。

理由は何か。

別にこの活性化状態の渦に飛び込めば、後で宇宙転移すればいい。
しかしこの先が、宇宙転移できる場所かどうかわからない。

以前、宇宙転移ができる場所に転移してしまって、そのまま部隊
が袋叩き似合つて壊滅した、

という話を聞いたことがある。

そんわけで僕はほかの部隊には、この活性化しているこの『旅の扉』
を守っていてもらう。

と思つていたけれど、徐々に渦の勢いがなくなつていつて静かな水
面に戻る。

「魔力が切れたようだね」

不活性になつたようだ。

とにかく場所とりを部隊にしておいてもらおうと思う。

ま、僕にそんな権限はないんだけどね。

「じゃ、テリー、君たち。いまから、モンスター使いになる為の世界に
行くよ」

「わかつた。少し待つてくれ、友人に話さなければならない」

「いいよ」

隊長が無線機を使って、部隊に命令を下す。

〈捕縛対象を見つけた。しかしその条件は厳しく、吉田だけが対処す
ることになった。

残りの隊員は、指示する座標の池、または池の底にあるものを守れ。
以上〉

「吉田。行け」

「え?!」

僕は隊長に、行動を共にすることを許可してもらう。
しかしながら隊長もこないのか、全く分からぬ。

話の流れ的にも、くるべきだ!

「し、しかし、わたぼうが隊長も来るべきだと……」

「本来ならば行くべきだが、私は隊長だ。おいそれと、隊員を置いてい

くことはできない。

ましてや数日以上のパワードスーツの着用は、無意味に病を発症する原因となってしまう。

EDFが何故レンジャーが、様々な世界で接触を図り数日間滞在していられるとおもう？

それは着脱が容易であるからだ。我々特殊部隊にとつて、専用の施設がなければ着脱もままならない。

幸い、EDFへの忠誠心の低い吉田ならば、エアレイダーとしての基本装備をしていない。

レンジャーの服装をしており、状況を鑑みてもつとも信頼できるからこそだ」

「は……い。わかりました、代表で行かせていただきます」
そんなわけで、話し終わった。

納得いかないけれど、仕方ないと割り切ろう。

そして確実にモンスター使いとして、立派になつてやる。

「友達にお別れ出来た？」

「いや、さすがに二人は不可能だつた。

こいつ、吉田を連れて行つてくれ。私は仲間と共に、ここにて待つ」

「うん、わかつた。それじゃ、テリー……行こうか」

「うん……。お姉ちゃんのために、即行でモンスターマスターになつてやる！」

その為に、吉田！ オレと一緒に強くなるぞ！」

「おお、任せとけ！」

僕はテリーと共に啖呵を切る。

グリムリーパー隊長の方を見ると、親指を突き上げて幸運を祈られた。

この時視界の外から、すさまじい光量が差し込んでくる。

何事かと思つて、テリーと共にその方向を見る。

そこには『旅の扉』と同じような事象を発生させている池があつた。これを引き起こしているのは、池の上にいるわたぼうの仕業。まあ、みりやわかるけどさ。

「さあ、テリー……そして吉田。君たちの冒険が始まる。勇気をもつて、ここに飛び込んでくれ！」

「よつしや行くぜ吉田！」

「お、応！ つて、はやつテリーの思い切りの良さはすごいな！」

いつてきます、グリムリーパー隊長！」

テリーがひやつほう！ と言いながら、元気よく飛び込んでいった。その物怖じしなさから、実はすぐ豪胆な人物なんじやないか？ と思つた。

主人公だつたらどうしようと思つたけど、決まつたことだし……隊長に別れを言つてから旅立つ。

「いつてこい」

腕の可動範囲が狭いのか、武器であるハンマーを挙げて応えてくれる。

僕も武器を持つ腕を挙げて応え、わたぼうと共にテリーの後を追う。

「これから俺たちの冒険が始まるとぜ！」

テリーは元気いっぱいだなあ。

僕も頑張つて逃げたあいつの為に頑張るとしようか！

近況報告。U-II装備中。AP：245

特殊兵器：

『試作型シーザー・ワイヤー——10』

『試作型デコイ「ホワイト』——5』

番外編 金の雷光の現状、白い天使の日記

私の名前は、フェイト＝テスタロッサ。

相棒は斧型デバイスのヴァルディッシュ。

そして使い魔のアルフ。

うん。今日も皆元気だ。

母さんのために、ジュエルシードを集めよう。

……なんて、今までやつてきたんだ。

「フェイト。ジュエルシードは何個集まつたの」

「……」

「たつた三個！ 嘆かわしいわ。アンタのような屑を生かしておいてる私に、

歯向かう氣かしら？」

「いえ……」

「そりやそうよね！ 私がいなければ、アンタは死んでいたんだもの！」

「……」

「どうわけで、さつさとジュエルシードを集めてきなさい！」

ドカツ

「うぐっ」

蹴られた。

痛い。

久しぶりに母さんに会つたけど、前よりも酷くなつてゐる。
何がつて……対応もそうだけど、奴らに毒されてる。

「フェイト！ ああつ、怪我してるじゃないか！ あのクソババア
……！」

アルフは母さんが歩いていつた通路の方にらみつけて、荒々しく吠える。

私を気にかけてくれるのは、アルフだけだ。

もう、私は母さんのために、戦えないかもしない。
私は限界なんだ。

ただのジュエルシードだつたときは、簡単に魔法で撃破すればなんとかなつた。

でも母さんがあいつらを紹介した日から、全てが変化してしまつた。

かあさんが私を必要としてくれる事があまりなくなつて、あいつらの事を信用し始めた。

ジュエルシードとかアルハザードなんて迷信より、目の前で死者蘇生されたら

私も彼らを信用してしまうかも知れない。

でもそれは違う筈。かあさんはアリシアの蘇生を対価に、私にジュエルシードの回収を命じてる。

あればあるだけいいから、母さんは私をしかりつける。

以前からあつたけれど、ここまでひどくなつた。

「おや？ プレシア様のご令嬢ではございませぬか。どうしたのですか？」

こいつだ。いや、こいつもそうなんだけど、こいつがいる組織が母さんを、世界を破壊したんだ。

私は憎い。こいつをにらみつける。

でもこいつは飄々としていて、私の威嚇を躲し私を嘲笑してくる。
「今日も回収は〇に近いようですね。では、我々のために頑張つてください」

こいつは悠々とこの場から立ち去る。

「アルフ、抑えてくれてありがとう」

「いつかこいつらをボツコボコにするのが、あたしの野望だからね。

ここで本性を曝け出すには、時期尚早だと思つたからさ」

「うん……。それじゃあ、アルフ……」

「腹……決まつたんだね」

「うん。アルフ、ついてきてくれる？」

「なあに言つてんだい、フェイト。主についていくのは、使い魔として当然じやないか」

だよね。

でも心強い。

あいつらをぶつ潰して、母さんを再度私のモノにできるのならば手段を選んではいられない。

行こうか、海鳴市海浜地区へ。

私の名前は、高町なのは。

大学付属小学校の生徒だけど、関係ないよね。

これから話すのは、現実離れした現実なんだから。
どこから話そうかな……。

つて、ただの日記みたいなものだけどねー。

「なのはー、ごはんだぞー？」

「はーい、今行きまーす！」

うん。悩んでたら夕食の時間になつちやつた。
続々は戻ってきてからにしよつと。

で、帰ってきたんだけど、書くのはあの人と出会つたところから書
こうかな？

あの人って？うーん、友達？

アルバイトみたいなものだから、同僚なのかな。

あの人とはジュエルシード亞種関連で知り合つたんだ。

最初はお姉ちゃんとお兄ちゃんを引き連れてる、小さな軍人さんな
感じだつた。

でも中身は私より2歳年上の子供だつたの。

あー、子供の私がいうのもなんだけね。

でもあの人は子供だけど、心も言葉も見た目以外子供じやなかつ
た。

説明を聞かされた時、凄くおどろいちやつた。

EDFが、フォーリナーが。

まさか宇宙規模の戦争が起こつてしまつてその保護のため、
いろんな世界を渡つているんだとか。

最初の印象が、ね？　ちょっと衝撃的な奴だつたから、最初は嫌な
人だつたんだ。

でもEDFの事とか、私達の事を心配してくれたり、この星の
フォーリナーをあの人一人が請け負つて……。

剩「あまつき」え、お父さんの命も救つてくれた。
なんかもう、私達は会う運命だつたんだよ！つて言われても不思議
じやない。

それくらい助けられてる。

え、あの人はどんな人だつて？
うーーん。

一言で言えば……。

不相応？厳格？職人気質「かたぎ」？
むしろ、フォーリナー専門バーサーカー？
難しいなあ。

あの人をどう思つてるか？お姉ちゃんによくいじられてるけど、好
きじやないよ！
凄く効率的だし、フォーリナーを殺せるならほかの事を無視するよ
うな人だし！

それに機械的で、人を人とも思わないような言動までするし……。
あ、でも、無表情な彼が時折見せるあの顔は、ちょっと……ね？

あーもう！私は好きじゃないんだつて！やりなおし、やり直し！
……私が考案したお菓子を、おいしそうに食べるあの人。
そして……日記書いてるだけなのに、暑くなつてきちゃつた。窓開
けよ。

あー、涼しー。

よし！ 気を取り直して、書くぞー！ なんてね。

あ、そうだ。重要な事なだけど……昨日、私とユーノ君がフェイトちゃんとアルフさんとジュエルシードをかけて戦つていたんだ。

そしたらね、クロノっていう時空管理局の執務官に、強制武装解除とアースラっていう次元航行艦に移送されたの。

何かする間もなく転移させられて、私達は戦艦の艦長と執務官のクロノ君と話し合うことになつたんだ。

話の内容は、ヒドゥン型ジュエルシードといった突然変異種の研究と、

世界を席巻している謎の外来生物について協力を要請してきた。今まで敵だつたのに、何言つてんだろつて思った。

“無礼は承知の上だ。これは君たちだけの問題じゃないんだ。お願いする。

もしよければ、一週間後海鳴市海浜地区にて返答を聞きたい。よろしいか？”

高圧的だけど、フォーリナーに対抗できる手段や技術力をもつ存在が、今のところ彼らだけど考えたら協力しない手はない。

それに結構前から、ここで居候しているネギ君がフェイトちゃんの虐待の痕跡を見つけてから、私はフェイトちゃんとアルフさんをこつち側に呼び寄せてみたんだ。

曖昧な返しだつたけど、アルフさんが“おい、小僧！ フェイトを裸にしたんだ、その償いと復讐……絶対にしてやるからな！”と言つたことから、海浜地区に来ることは確定しているんだ。

それにフェイトちゃんには悪いけど、本気で回収してからお父さん・お兄ちゃん・お姉ちゃんそしてユーノ君を合わせたフルメンバーで戦うよ。

私とネギ君は、絶対参加だから入れてない。

“で、ネギ君？
ありがとうつていいんだけど、私も巻き込んだのはどうしてなの？”

“ひつ?! ゴ、ごめんなさい!”

つまるところ、ネギ君がくしやみをして私とフェイトちゃん、アルフさんの服を武装解除させちゃったんだ。

後はわかるね? わからぬ?

分かれ。

ふー。とにかく! ネギ君には、もつと魔力制御を上手くやつてもらわないと!

「なのはさーん! ユーノが、アクセルシユーターの練習するつてー!」「はーい! 今行くよー!」

今日はここまで。

邂逅は明日だから、今日は早めに切り上げて寝よう。
折角学校も休みなんだからね。